

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第82集

めん じよ  
毛 受 遺 跡

1999

愛知県埋蔵文化財センター

# 序

愛知県一宮市は、尾張平野北西部に位置し、織物業を基幹産業として発展した都市であります。木曽川下流域に位置する当地域は、肥沃な土地と豊かな水に恵まれており、古くから多くの人々の生活に潤いを与えてきました。毛受遺跡が位置する一宮市西部には、弥生時代の遺跡として著名な山中遺跡や八王子遺跡、戦国時代の城跡である丸安賀城をはじめとして、縄文時代から中世・戦国時代に至る幅広い時間にわたって、数多くの遺跡が所在しています。

今回調査した毛受遺跡は、東海北陸自動車道建設に伴い、その事前調査として行われました。調査の結果、戦国時代に掘削された居館を巡る堀と考えられる大溝や屋敷地を区画する区画溝、また江戸時代の毛受村の広がりを示すとみられる区画溝や井戸などを検出することができました。本書に掲載しておりますこれらの調査結果が、学術的にも重要なものとして、地域の歴史研究に活用され、ひいては埋蔵文化財保護のための一助になることを願ってやみません。

この発掘調査を行うにあたって、地元住民の方々をはじめ、関係者及び関係諸機関のご理解とご協力をいただきましたことに、厚く御礼を申し上げます。

最後になりましたが、昭和60年度に発足しました財団法人愛知県埋蔵文化財センターは、平成11年度より、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターへと衣替えしました。今までのご支援に感謝申し上げますとともに、引き続き変わらぬご支援をお願い申し上げます。

平成11年8月

財団法人 愛知県教育サービスセンター

理事長 久留宮 泰啓

## 例　言

- 1 本書は、愛知県一宮市大和町毛受に所在する毛受遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団、愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財團法人愛知県埋蔵文化財センターが、平成7年4月から6月、平成8年4月から10月にかけて実施した。
- 3 調査にあたっては、次の関係諸機関の協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課　愛知県埋蔵文化財調査センター  
日本道路公団　愛知県土木部
- 4 調査担当者は下記のとおりである。

平成7年度　黒田哲生（本センター主査、現愛知県立五条高等学校教諭）、山本寿徳（同調査研究員、現愛知県立岩倉高等学校教諭）、船谷　一（同調査研究員）  
平成8年度　小泉　渡（本センター主査、現一宮市立浅野小学校教諭）、浅井厚視（同調査研究員、現美和町立美和小学校教諭）、船谷　一
- 5 発掘調査には、以下の方々の協力を得た。（敬称略）

野村信生（発掘調査補助員、現青森県教育委員会）・橋本亜希子（発掘調査補助員、現大阪府文化財センター）
- 6 調査、報告書の作成にあたって、以下の方々の御指導を賜った（敬称略）。

愛知県図書館、一宮市博物館、徳川黎明会徳川林政史研究所  
岡本直久、金子健一、久保慎子、須田　肇、千田嘉博、土本典生、坪井裕司、中嶋　隆、藤澤良祐、毛受英彦
- 7 本書の執筆は、第Ⅰ章を浅井厚視、第Ⅱ章・第Ⅲ章・第Ⅴ章・第Ⅵ章を船谷　一、第Ⅳ章第2節を鬼頭　剛（本センター調査研究員）が、それぞれ分担した。また、第Ⅳ章第1節は三辻利一氏（奈良教育大学）より、第Ⅳ章第3節は森　勇一氏（愛知県立明和高等学校教諭）により、それぞれ玉稿を賜った。全体の編集は船谷　一が担当した。
- 8 報告書作製に関わる整理作業には、以下の方々の協力を得た。

岩城由枝、大迫慶子、大津洋子、大西多賀子、加藤美和子、神田善子、斎藤智可子、高山正美、野々垣裕美、松田典子（以上、整理補助員）  
田口雄一、平野昌子（以上調査研究補助員）
- 9 遺構埋土の土色については、財團法人日本色彩研究所編『新版標準土色帳』（1995年度版）を参考に記述した。
- 10 調査記録の座標は、国土座標第VII系に準拠する。
- 11 調査記録及び出土品は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管している。

# 目 次

<b>第Ⅰ章 調査の概要</b>	
第1節 調査の経緯・経過	1
第2節 遺跡の概要	
1 位置と地理的環境	2
2 歴史的環境	3
<b>第Ⅱ章 遺構</b>	
第1節 基本層序	6
第2節 遺構	
1 遺構の概要	8
2 A期の遺構	8
3 B期の遺構	8
4 C期の遺構	11
<b>第Ⅲ章 遺物</b>	
第1節 出土遺物の整理と分析方法	14
第2節 調査区全体のカウント結果（概要）	15
第3節 遺物	
1 A期の遺物	17
2 B期の遺物	18
3 C期の遺物	24
4 その他の遺物	25
<b>第Ⅳ章 自然科学分析</b>	
第1節 毛受遺跡出土の土師器皿の螢光X線分析	36
第2節 毛受遺跡の堆積土の珪藻分析	42
第3節 毛受遺跡の昆虫群集—500年前の夏の夜のできごと	44
<b>第Ⅴ章 考察</b>	47
<b>第VI章 まとめ</b>	57
<b>付表</b>	
遺構一覧表	
遺物一覧表	
<b>図版</b>	
基本遺構図	
写真図版	

## 挿図目次

第1図 調査区位置図	16
第2図 毛受遺跡周辺遺跡分布図	16
第3図 毛受遺跡基本層序図	25
第4図 毛受遺跡基本層序図	27
第5図 D区獨立柱建物実測図	29
第6図 B期主要構築序図	33
第7図 C区SK01・SK18実測図	38
第8図 毛受遺跡出土遺物組成図	43
第9図 時期別破片数グラフ	46
第10図 A期遺物実測図	50
第11図 中世土器口縁部残存率	51
第12図 B区SD11遺物実測図	17
第13図 B区SD12遺物実測図	19
第14図 C区SD17遺物実測図	21
第15図 C区SD18遺物実測図	21
第16図 C区SD18・SD20遺物実測図	22
第17図 D区遺物実測図	23
第18図 貿易陶磁器実測図	23
第19図 C期遺物実測図	24
第20図 加工円盤量共変図	24
第21図 加工円盤重量分布図	27
第22図 加工円盤重量別転用陶器分布図	29
第23図 その他の遺物実測図(1)	30
第24図 その他の遺物実測図(2)	31
第25図 転用土器削割	32
第26図 振り痕を有する土器部位名称	32
第27図 振り痕を有する土器法量図	33
第28図 振り痕を有する土器重量分布図	33
第29図 加工円盤・振り痕を有する土器 出土分布図	33
第30図 石製品実測図	34
第31図 金属製品実測図	35
第32図 土師皿分析資料	39
第33図 毛受遺跡出土土師皿の両分布図	40
第34図 大毛池田遺跡出土土師皿の両分布図	40
第35図 岩城城遺跡出土土師皿の両分布図	40
第36図 清洲城下町遺跡(T)63E出土 土師皿の両分布図	40
第37図 清洲城下町遺跡90C出土 土師皿の両分布図	41
第38図 名古屋城三の丸遺跡出土 土師皿の両分布図	41
第39図 郷上遺跡出土土師皿の両分布図	41
第40図 吉田城遺跡出土土師皿の両分布図	41
第41図 資料採取位置と採取順序	42
第42図 資料採取位置図	45
第43図 資料採取順序	45
第44図 毛受遺跡における昆虫組成	48
第45図 灰釉系陶器出土分布図	49
第46図 毛受遺跡西側周壁敷地割推定図	51
第47図 B期遺物組成図	52
第48図 B期遺物数量分布図	52
第49図 B期遺構出土陶器種別数量分布図	53
第50図 C期遺構配置図	56
第51図 C期遺物組成図	56
第52図 毛受村土竈模式図	57
第4表 陶磁器・土器・土製品破片数	16
第5表 時期別陶器破片数	16
第6表 產地別加工円盤用器種分類表	25
第7表 加工円盤類別表	27
第8表 加工円盤重量別転用陶器分布表	29
第9表 振り痕の残存状況一覧表	33
第10表 蛍光X線分析データ一覧表	38
第11表 珪藻分析結果	43
第12表 毛受遺跡から出土した昆蟲化石	46
第13表 天目茶碗・皿類・捕鉢破片数	50
第14表 B期遺構出土遺物時期別数量分布表	51

## 図版目次

### 17. 図版目次

19. 圖版1～圖版8 遺構図	17
19. 寫真図版	19
21. 圖版9 遺跡遺景	21
22. 圖版10 A a区・A b区全景	22
23. 圖版11 A c区全景・B区全景・B区SD11・B区SD12	23
23. C区全景・C区南部全景・C区SK18・C区SD20	23
24. 遺物出土状況	24
27. 圖版13 C区SD17・C区SD18・C区SD17遺物出土状況・ C区SD18遺物出土状況	27
29. 圖版14 D区北部全景・D区SD06・D区SB01	29
30. 圖版15 48・46・41・49・34・35・72・73・74・75・76・ 84・85・86・87・83・78	30
31. 圖版16 91・92・93・94・95・96・97・98・99・100・111・ 112・113・114・115・116・117・118・119・120・ 131・132・133・134・135・136・137・138・149・ 150・151・152・153・154・155・156・157・158・ 175・176・177・178・179・183・184・185・186・ 187・188・189・192・193・195・196・55・203・ 204	31
34. 圖版17 39・56・60・65・66・67・211・212・213・214・ 215・216	34
39. 圖版18 毛受遺跡から出土した昆蟲化石の顕微鏡写真	39

## 表目次

第1表 発掘調査工程表	1
第2表 毛受遺跡開闢年表	4
第3表 毛受遺跡土質別遺物破片数	16

# 第Ⅰ章 調査の概要

## 第1節 調査の経緯・経過

発掘調査は、東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、財團法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査区及び調査面積は、平成7年度には95 A区をA a区・A b区・A c区の3つ的小調査区に分割し、合わせて1,446m<sup>2</sup>を、平成8年度には96 B区・96 C区・96 D区の3調査区合わせて4,115m<sup>2</sup>を、それぞれ調査した(第1表)。なお96 C区については、工程上調査区を2つに分割して行ったため、調査時には、便宜上、先に調査を行った地区を96 C a区、後に調査を行った地区を96 C b区と呼称した(以下、調査区の表記については、アルファベットのみ記述する)。

遺構の検出は、表土をバックホウで除去した後、近世の包含層である黄褐色シルト層面より行った。その際、それぞれの調査区内に国土座標を基準とした5m×5mのグリッドを設定し、出土した遺物については、各グリッドごとに取り上げた。また遺構の測量は、各調査区ごとにヘリコプターによる航空測量を実施し、必要に応じて手測りによる実測や写真撮影を行った。

発掘調査終了後ただちに、出土遺物を本センター一宮事務所(平成7年度)及び尾西事務所(平成8年度)に搬入し、洗浄・注記等の一次整理を行った。そして平成10年度において資料・出土遺物を改めて本センターの一宮事務所に移し、遺物実測・トレース等の二次整理を行い、報告書の作成作業を行った。

年度	調査区	調査担当者	調査期間							調査面積 (m <sup>2</sup> )	
			4	5	6	7	8	9	10		
平成7	A a	黒田・山本・鈴谷								454	1,446
	A b	黒田・山本・鈴谷								494	
	A c	黒田・山本・鈴谷								498	
平成8	B	小泉・浅井・鈴谷								745	4,115
	C	小泉・浅井・鈴谷				Ca区			Cb区	1,774	
	D	小泉・浅井・鈴谷								1,596	

第1表 発掘調査工程表

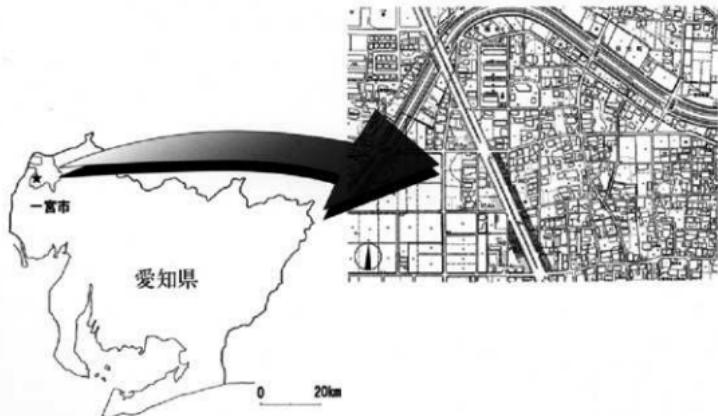
## 第2節 遺跡の概要

### 1 位置と地理的環境

毛受遺跡は一宮市大和町毛受（北緯37度17分50秒 東経136度46分58秒）に所在する遺跡で、市の西部に展開している。現在遺跡周辺は、県道一宮蟹江線（西尾張中央道）が南北に縦断し、水田のまわりに住宅地・工場などが点在している。西尾張中央道は交通量が多く、この地方を南北に繋ぐ重要な幹線となっている。

濃尾平野は木曽川によって形成された沖積平野で、上流域より木曽川扇状地、氾濫原地帯、三角州地帯に分けられる。木曽川扇状地の最南西部は一宮市北東部に展開し、沖積層基礎礫層が広がっている。また木曽川支流の小河川の流域では、洪水性の自然堆積土が微高地列をなす自然堤防帶と後背湿地を展開させている。一宮市内は、微高地を伴わない海拔0m地帯の三角州地帯ではなく、木曽川扇状地と氾濫原によって形成されている。

毛受遺跡は木曽川水系の日光川流域に位置している。遺跡付近は現在でこそ平坦な水田地帯として土地が利用されているが、かつては標高7m前後の自然堤防帶の上に集落が分布し、微高地には畑が広がり、綿が生産されていた。また後背湿地には水田が広がっていた。江戸時代の『寛文村々覚書』にもそれらの様子が記されている。幕末になると藍が作られ、明治20年代の後半からは自然堤防上に桑畠が広がり養蚕が行われた。これらの生産に伴って、機屋も木綿物から綿綿交織へ、さらに大正末期には毛織物へと変わった。



第1図 調査区位置図

## 2 歴史的環境

毛受遺跡の位置する一宮市西部は多くの遺跡が集中している地域である。毛受遺跡が立地する自然堤防は、歴史時代に日光川の旧河道に沿って形成されたと見られ、この辺りに展開する弥生時代～古墳時代にかけての遺跡が立地する自然堤防とは、形成時期を異にしていると考えられる<sup>1)</sup>。

毛受遺跡から南1kmに位置する八王子遺跡は、弥生時代前期～後期にかけて尾張北部での拠点的な集落遺跡と考えられ、県内最古の銅鐸が出土している。そして古墳時代前期までは継続して集落が営まれ、それ以降も、中世まで連続として続いていることが明らかとなった。また毛受遺跡から南西2km付近には、愛知県尾張部の弥生時代後期の標識遺跡となつてある山中遺跡があり、この遺跡を北端とする周辺には同時期の萩原遺跡群が所在する。

古代には、日光川流域に幾つかの寺院が建立されていたことが、発掘調査や分布調査によって確認されている。それらの中の1つ、毛受遺跡からおよそ1km南の地点に位置する薬師堂廃寺では、変形蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦などが採集されている。

中世になると妙興寺から刈安賀を通る街道が東西に設けられ、そのまわりに集落が形成された。この頃になると八王子遺跡は次第に衰退していく、代わって南の刈安賀遺跡へと集落の主体は移り、刈安賀の街並みが街道沿いに展開していく。そして八王子遺跡の北側から毛受遺跡周辺にかけても中世の集落が展開していくようである。毛受遺跡周辺の中世の遺跡として、南1.5km付近に刈安賀遺跡があり、日光川を挟んで、北へ0.5kmの付近に馬引横手遺跡、北へ1km付近に東刈安賀遺跡がそれぞれ位置している。また日光川流域に展開する自然堤防上には中世城館跡が点在している。

戦国時代になると織田信長の家臣浅井新八郎政高が、岩倉の町並や寺院を移して、刈安賀に城下町を形成した。この頃毛受にも砦（毛受城）が設けられ、新八郎の庶弟とも家老とも言われる浅井玄蕃の居城となった。刈安賀城は17世紀の初めに廃城となったが、毛受城はそれ以前に廃城になつたと見られる。それは、浅井新八郎政高的跡を繼いで刈安賀城主となつた浅井田宮丸が、天正14（1584）年的小牧・長久手の戦いに際し、謀反の疑いで殺害されて間もなくの頃と考えられる。なお幾ヶ岳の戦いで柴田勝家の身代わりとなった毛受勝助は、毛受村に在住していたと見られる鶴岡家より春日井郡稻葉村へ分家し、毛受姓を名乗った鶴岡勝明の次男である<sup>2)</sup>。

近世になると刈安賀は巡見街道が通り、街道沿いの在郷の町として発展した。毛受はその北にあり、「寛文村々覚書」に記された石高720石、家数72軒、人数360人の農村として発展した。

毛受は現在「めんじょ」と呼ばれているが、以前は「めんじょう」と呼ばれていたようである。地名の由来としては、「毛受は河内、和泉付近に住んだ物部氏の一族百舌鳥氏が全国に拡がり、モズからメンジョウとなった」（天野信景）「毛受は免除の誤りか」（吉田東伍）「大和国鷹村が毛受となり、更にメンジョウと転じた」（津田正生）などの諸説がある。毛受姓は和泉国発祥の土師姓の一つとも考えられている。

### <参考文献>

- (1) 服部信博編 1992 『山中遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第40集
- (2) 毛受英次 1983 『鶴岡毛受家譜』

第2表 毛受遺跡関連年表

- 11世紀～12世紀 国衙領内に郷保が展開し、中嶋郡毛受村が存在したことが知られる。
- 1235（嘉祐 8）（久我家文書）真澄田社領注文に「毛受茅原二丁半」とある。
- 1281（弘安 4）（醍醐寺文書）毛受製装鶴丸が安食荘預所職となり、年貢を進納する。
- 1282（弘安 5）（醍醐寺文書）千世氏荘坪付注進状案に「毛受里一坪二反大」と記されている。
- 1350（承和 2）（妙興寺文書）毛受遠能・遠嚴・遠篤など、これより数回に渡って、毛受村の所領を妙興寺に寄進する。
- 1388（嘉慶 2）年の毛受遠能の寄進によれば、7町7反あまりの寄進となっている。  
この寄進の中に「瓦堂前・助田・東村・八王子後・深沼・鎌田・西奈木・高畠・箕口前」という小字名がてくる。
- 1356（文和 5）（妙興寺文書）証観荒尾宗顯牛野郷坪付注文に「毛受引一所壱町二坪」と記されている。
- 1394（応永 元）鶴飼頼定が中嶋郡毛受郷に敷地70反の別業の地を開く。
- 1432（永享 4）「尾張名所図絵」によれば、足利義教が富士遊覧の帰途、毛受郷鶴飼頼定家に立ち寄る。
- 1558（永禄 元）六代鶴兵右衛門勝孝、浮野合戦にて織田信長に兵糧を送り恩賞を受ける。  
毛受孫兵衛、永見親親と共に徳川方で三州寺部に戦う。
- 1561（永禄 4）浅井新八郎政高が、岩倉の町並・寺院を移し、刈安賀に城下町を形成する。  
この頃、浅井新八郎政高が所領内に砦（毛受城）を築き、浅井玄蕃の居城とした。
- 1565（永禄 8）毛受城主浅井玄蕃、妙興寺に銅磬を寄進する。
- 1566（永禄 9）浅井玄蕃、毛受勝助が淨土宗金剛寺を建立する。
- 1581（天正 9）浅井新八郎政高が没し、田宮丸が16才で刈安賀城主の跡を継ぎ、織田信雄の三家老の一人となる。
- 1583（天正 13）賤ヶ岳の戦いで、柴田勝家の家老毛受勝助家照（春日井郡稻葉村に移住し、毛受姓に改姓した鶴飼勝明の次男）が、勝家の身代わりになって戦死する。兄毛受茂左衛門も戦死。
- 1584（天正 14）小牧・長久手の戦いが始まる。刈安賀城主浅井田宮丸、羽柴秀吉との内通の疑いを受け、長島城で織田信雄によって殺害される。森勘解由が刈安賀城に入る。  
この頃に、毛受城廃城か？
- 1620（元和 6）源敬公御黒印写に寄れば、毛受村を知行地としている金子庄左衛門は171石となっている。
- 1636（寛永 13）源敬公御黒印写に寄れば、毛受村を知行地としている田嶋八右衛門は104石となっている。
- 1639（寛永 16）源敬公御黒印写に寄れば、毛受村を知行地としている左右田三郎兵衛は200石、石林次左衛門は30石、伴清十郎は10石、行方平左衛門は50石となっている。
- 1672（寛文 12）『寛文村々覚書』によれば村の概高720石余り、田2町7反余り、畠66町余りで、家数72軒、人数360人と記されている。
- 1684（貞享 元）竜明寺が、刈安賀の天台宗法輪坊の寺籍を移して建立される。  
藍の栽培が始まると、明治7年には藍玉製造者が10軒あった。
- 1890（明治 22）毛受村が、日光村の一部となる。



(国土地理院発行 1/25,000地形図「一宮」をもとに作成)

- 1 畑添遺跡（弥生）
- 2 四反田遺跡（弥生～古墳）
- 3 大平遺跡（古墳）
- 4 板倉遺跡（縄文）
- 5 蒲原遺跡（弥生～中世）
- 6 伝治越遺跡（古墳）
- 7 薬師堂廃寺（古代）
- 8 斎宮寺遺跡（古代）
- 9 八王子遺跡（弥生～中世）
- 10 田島遺跡（弥生～古墳）
- 11 竜明寺遺跡（弥生）
- 12 毛受遺跡（中世）
- 13 菊安賀遺跡（中世）
- 14 山中遺跡（縄文～中世）
- 15 馬引横手遺跡（中世）
- 16 法圓寺遺跡（中世）
- 17 東菊安賀遺跡（古墳～中世）
- 18 三味郭遺跡（古墳）
- 19 東向野遺跡（古墳）
- 20 野府城遺跡（中世）
- 21 西上免遺跡（弥生～古墳）
- 22 中切遺跡（古墳）

第2図 毛受遺跡周辺遺跡分布図

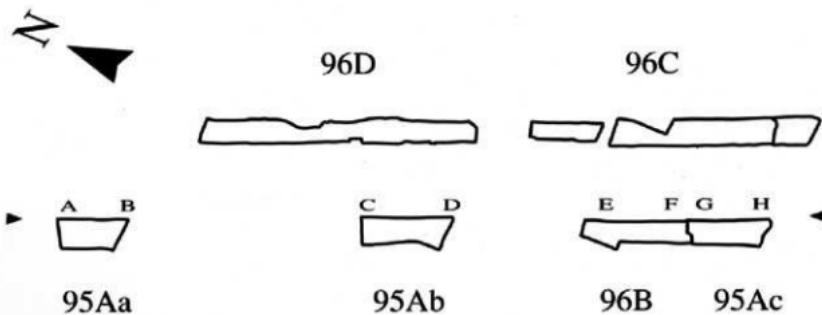
## 第Ⅱ章 遺構

### 第1節 基本層序

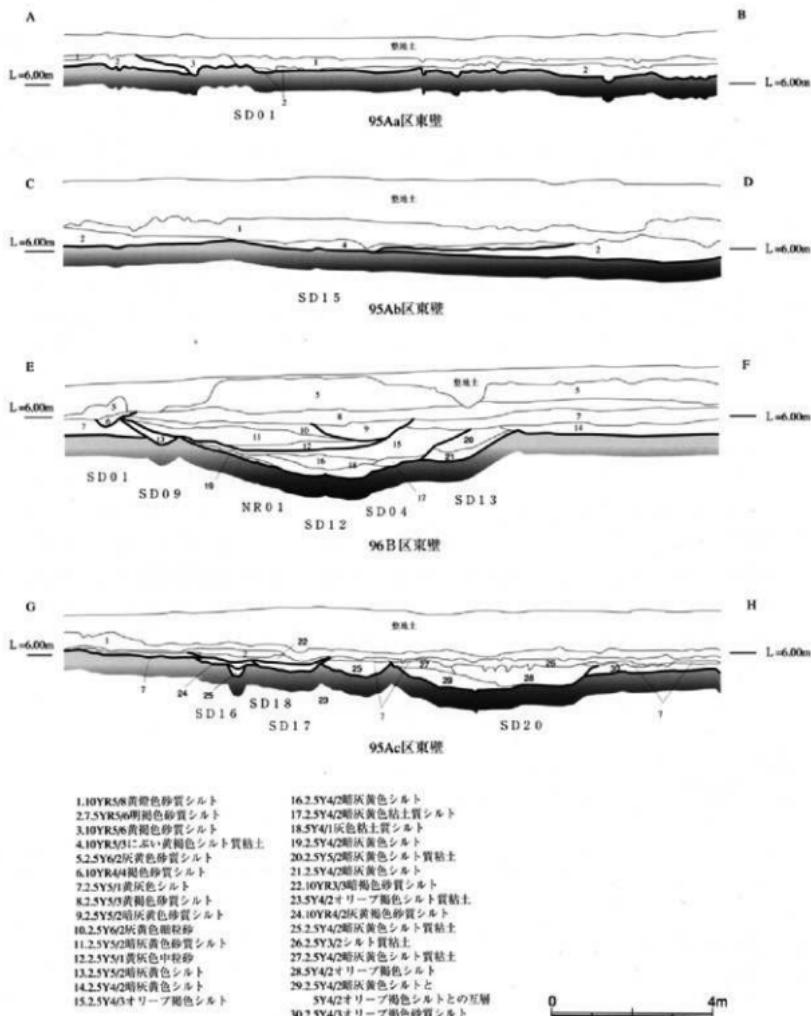
発掘調査区の基本的な層序は、現表土の大部分が、西尾張中央道建設時に埋め立てられた整地土層であった。旧地層の堆積は、それ以下であり、概ね5層に分けられる。

第1層は、旧畠地の耕作土と見られる黄灰色の砂質シルト層で、50～70cm程度の厚さを持っていた。第2層は20～40cm程度の厚さの黄褐色砂質シルトおよびシルト層である。第3層は暗灰黄色もしくはオリーブ褐色の砂質シルト層で、近世（江戸時代）に属する遺構は、この層に掘りこまれている。また第2層と第3層の間には、ところどころに、黄褐色細粒砂がレンズ状に堆積した状況が確認できた。第4層は暗灰黄色もしくは黄褐色のシルト層で、戦国期の遺構の多くは、この層に掘り込まれている。第5層は、黄褐色粘土質シルトと灰黄色極細粒砂との互層が形成されており、この層以下が基盤層となる。（第4図）

毛受遺跡の層序を、南北に見ていくと、最も日光川に近いA a区では、第2層の黄褐色シルト層から以下では、すでに基盤層である黄褐色粘土質シルト層と灰黄褐色極細粒砂との互層が確認されたが、戦国期の遺構が展開するB区・A c区では基本的には上記したような基本層序が確認された。このことから基盤層は北へいくほど高くなっていることが伺える。しかし、検出した遺構の希薄さや所属時期から、日光川に近い堆積層ほど比較的新しい時期に形成された自然堤防と考えることができ、戦国期・近世（江戸時代）の遺構が多く展開し、また現在の毛受集落が立地している南側のほうが、より古い時期に形成された自然堤防として安定した土壤基盤であったと考えることができよう。



第3図 基本層序位置図（タテ、ヨコともに1:2,500）



第4図 基本層序図 (1:125)

## 第2節 遺構

### 1 遺構の概要

C区とD区で、一部現代の攪乱により遺構が大きく削平されていたが、全体としては調査区域の南側に遺構が多く展開し、北側に向かうにつれて、遺構は稀薄になっていくようである。

検出した遺構の多くは、出土遺物から、概ね戦国期に属するものと近世（江戸時代）に属するものとの、大きく2つの時期に分けられる。中世より以前の遺構は、ほとんど検出されなかった。そこで本書では以下の3期に区分して記述をすすめることとする。

A期 古墳時代から中世

B期 戦国期

C期 近世（江戸時代）

なお本報告で記述する戦国期は15世紀後半から16世紀代までを対象とし、近世は概ね17世紀代から19世紀半ばまでを対象とする。

### 2 A期の遺構

溝1条を検出した。出土遺物は稀薄で、所属時期は明らかにし難いが、B期の遺構との前後関係などから、室町時代半ば～後半くらいの遺構と考えられる。

C区 SD19

SD18に切られる東西方向の溝である。検出面での規模は、幅約2.7m、深さ約0.4mを測る。溝の底面には、溝の方向上に、節を割り抜いた竹製の道管状の筒が2本並列して置かれており、西側は調査区外へ延びていた。性格は不明である。

### 3 B期の遺構

B期の遺構は調査区域の中程から南側にかけて展開をしていた。検出した溝は、いずれも比較的規模が大きく、屋敷地または居館を開む区画溝と考えられる。また掘立柱建物が1棟検出された。

#### A 掘立柱建物

D区 SB01（第5図）

調査区の南部で検出された桁行4間以上×梁行2間の東西棟の掘立柱建物で、桁行7m以上×6.6mを測り、西側は調査区外へ広がっていく。この建物を構成する柱穴群は、検出面で、直径0.7～1.2mの規模を測る。柱穴の遺存状況から、建物の一部がすでに削平された可能性がある。また柱間距離は、南面の東西方向で、東から約1.9m・約1.9m・約1.9m・1.3m以上、とほぼ等間隔に並んでいたと考えられる。また南北方向では、北から約3.9m・約2.7mであった。検出された11基の柱穴には

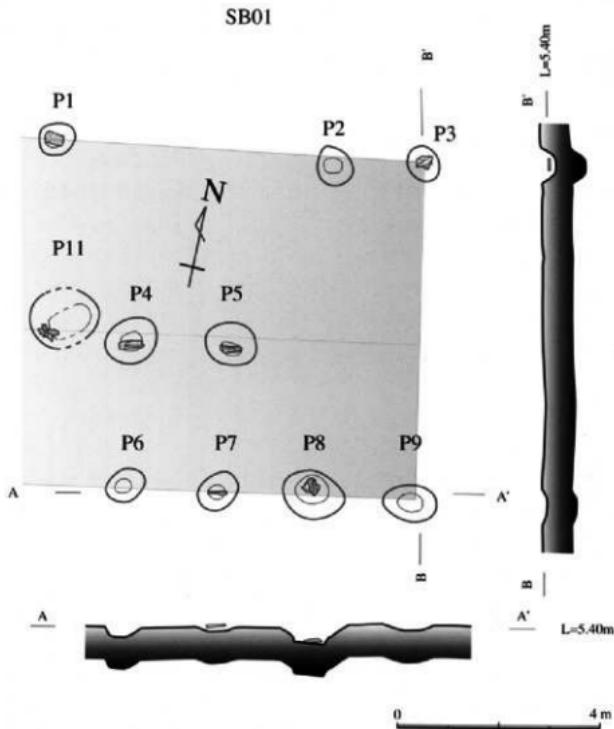
柱痕の遺存は見られなかったが、そのうち6基には、礎板が設置されていた。主軸方位は N83°E を測り、C区SD18やD区SD06と方位をほぼ同じくすることから、これらの遺構と同時期に属すると見られる。

## B 溝

### (1) B区

SD11

溝の西側の肩は調査区外のため、全体の規模は不明であるが、検出し得た規模では、幅1.9m以上、深さ約0.7mを測る。最下層面から被熱した痕跡をもった自然礎が幾つか固まって出土したが、石組み構築物の石材等の可能性は低い。この溝は、調査区内で北から西へ逆L字形に屈曲してい

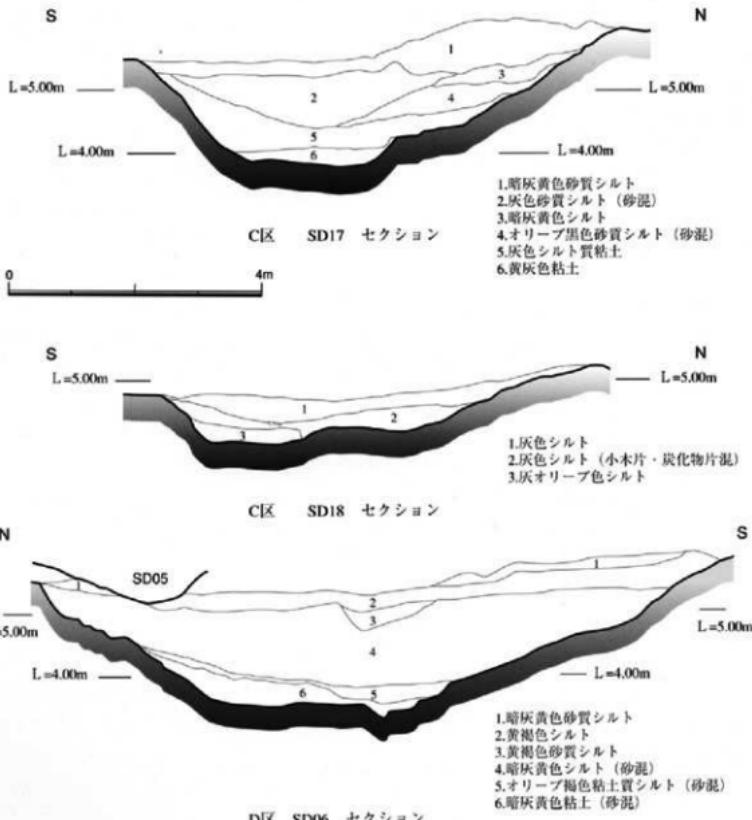


第5図 D区 掘立柱建物実測図

ことから、調査区域よりさらに西側へ展開する区画溝と考えられる。

#### SD12

調査区の中央をほぼ南北に走る溝である。上部はSD04、NR01によって壊されていた。検出面での規模は、幅約1.8m、深さ約1.5mを測るが、推定幅は約3.5m前後になると思われる。埋土は暗灰黄色シルトで、下層面では、植物質の堆積層が部分的に確認できた。比較的規模が大きく、深いU字形の断面形態を呈していることから、堀削のような機能を持った区画溝と考えられる。



第6図 B期主要溝層序図 (1:80)

## (2) C区

### SD17（第6図）

確認した規模は、幅約7.8m、深さ約2.4mを測る。上部の一部はSD16により壊されていた。埋土は、上層が暗灰黄色シルト、下層が灰色シルトである。この溝は、調査区内で北から西へやや鋭角に屈曲しており、同時期の他の溝とは若干方位を異にしている。その規模や、断面形が逆台形の掘形であることから、清洲城下町遺跡にみられる堀のような、企画性を持って掘られたと考えられる大溝である。

### SD18（第6図）

溝の上面は、現代の攪乱によりほとんど削平されていた。そのため検出面での規模は、いくらか過小であるとみなければならないが、幅約7.2m、深さ約1.5mを測る。埋土は灰色シルトで、部分的に植物質の堆積が見られた。断面形態から、この溝は平らな溝底で比較的急斜面の掘形が想定できる。また検出状況から、調査区付近にクランク状の屈曲部を持っていたことが確認された。SD17同様、堀と考えられる大溝である。

### SD20

調査区のはば中央を、東西に走る溝で、幅約3.2m、深さ約0.5mを測る。主軸方位はN83°Eであり、C区SD17を除く、他の同時期の溝とは同一方向である。この溝からは木製辛塔婆が1基出土していることから、居住域を区画していた溝と考えられる。

## (3) D区

### SD06（第6図）

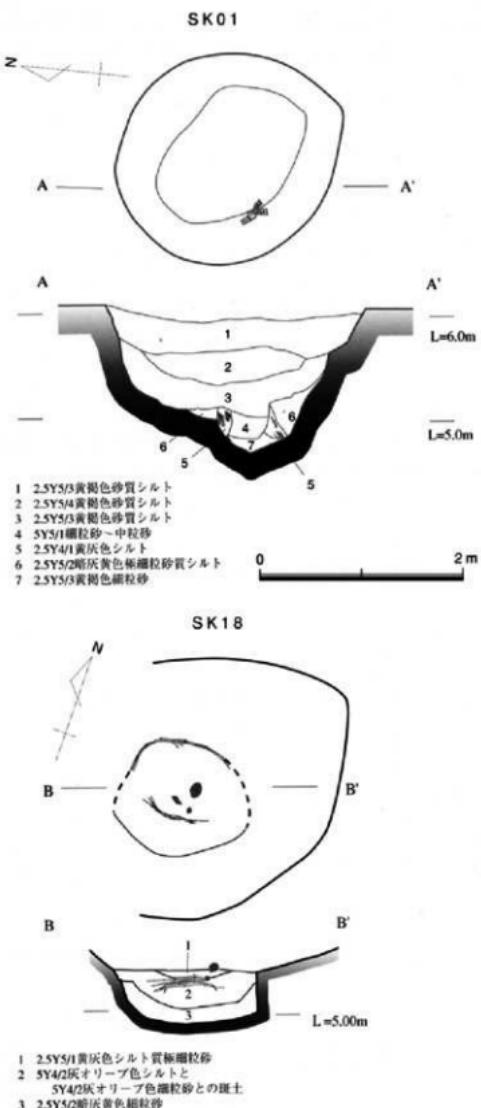
調査区の中央付近を東西に走る大溝で、主軸方位はN65°Eである。上部は後世の掘り返しなどで破壊されていた。幅10.2m、深さ2.1mを測り、断面形がやや急峻な斜面をもった逆台形であることから、堀として掘削された溝と考えられる。埋土中の遺物から、該期の中でも初期に位置づけられる。

### SD07

SD06の北側に併走する溝で、主軸方位はN65°Eである。幅1.8m、深さ1.1mを測り、断面は逆三角形を呈する。検出状況から、SD06より若干先行して掘削された可能性もあるが、出土遺物が稀薄なことから、掘削時期については明らかにし難い。

## 4 C期の遺構

C期の遺構は、調査区域ほぼ全域から検出された。特に96C区南域では、居住空間を区画していくと想定させる方形に屈曲する溝数条、井戸を数基検出した。この時期の溝は、いずれも主軸方位は南北もしくは東西であり、B期のそれとは若干方位を異にしていることが窺える。これらは、概ね江戸時代の前期前半（17世紀前半）から中期後半（18世紀後半～19世紀前後）に属すると考えられる。



第7図 C区 SK01・SK18実測図

#### A 畦状遺構

A (A a) 区の北西付近で検出された、小規模な溝が数条並行して走る遺構群を畦状遺構として報告する。長さ 2m ~ 4m 程の溝 7 条で構成される。いずれの溝も幅 0.3m ~ 0.7m、深さ 0.16m ~ 0.19m 程度を測る。それぞれの溝の間隔は、SD02 と SD07 との間が約 0.4m である他は、0.1m ~ 0.2m 程度で、主軸方位は N63° E である。溝の埋土は暗褐色砂質シルトであった。出土遺物がほとんど存在しないことから時期は特定し得ないが、天保年間に作成された村絵図によれば、この付近は畠となっていることから、江戸時代後期以前と考えることができる。

#### B 井戸

C区で 2 基検出した。

##### SK01 (SE01) (第7図)

調査区の南側で検出された。平面プランは長径約 3.2m の梢円形を呈し、深さ 1.5m を測り、断面形は 1 段の段差を持っている。井戸の内部構造は遺存していないかったが、最下層に砂の噴出を防ぐための竹製の編み物が設置されていた。SD03 に切られていることから、江戸時代前期に属すると考えられる。

##### SK18 (SE02) (第7図)

SK01 (SE01) から南へ 6m ほど離れた地点で検出された。平面プランは長径 2.3m の梢円形を呈

し、深さ約1.2mを測る。SK01同様、井戸の内部構造は遺存していなかったが、最下層に竹製の編み物が設置されていた。SD11に切られているので、江戸時代前期後半～中期に位置づけられる。

## C 溝

### (1) C区

#### SD01

調査区の南側をほぼ南北に走る溝である。検出規模で、幅1.1m、深さ0.35mを測る。この溝の南端は、調査区の南端付近で収束している。出土遺物から江戸時代中期に属する。

#### SD02

調査区南側で東西方向から南北方向に屈曲する溝である。幅0.76m、深さ0.33m測り、南端は調査区南端で収束する。出土遺物から江戸時代中期後半に属する。

#### SD03

調査区南東側で方形に巡り、東側は調査区外へと延びている溝である。幅は0.9m、深さ0.2mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。方形の南北の長さは約15.5mであった。屋敷地を囲む区画溝と考えられる。出土遺物や、SK01を切り、SD01に切られていることから、江戸時代前期後半～中期頃に位置づけられる。

#### SD06

SD03の外側に平行して走る溝である。幅0.5m、深さ0.16mを測り、断面形は浅いU字形を呈する。江戸時代中期後半と考えられる。

#### SD09

調査区の中央を東西に走る溝である。幅1.71m、深さ0.3mを測り、断面形は浅い皿形を呈する。SD20が埋没した後で掘削され、SD06に切られている。出土遺物から、江戸時代中期に属する。

#### SD11

調査区南東部で検出された、SD01にはほぼ並行して走る溝である。幅1.2m、深さ0.38mを測り、南端は調査区南端で収束する。出土遺物から、江戸時代中期に属する。

#### SD12

調査区中央を南北に走る溝である。幅1.8m、深さ0.3mを測り、断面形は皿形である。江戸時代中期に属すると考えられる。

#### SD13

SD12の西側を並行して走る溝である。規模はSD12よりやや小さく、幅1.28m、深さ0.23mを測る。SD12とはほぼ同時期の溝と考えられる。

### (2) D区

#### SD01

調査区のほぼ中央で検出された、東西方向に走る溝である。南肩部は後世の掘削により削平されていたが、検出した規模で、幅6.7m、深さ0.73mを測る。埋土は黄灰色シルトであった。出土遺物から江戸時代中期に属すると考えられる。

## 第Ⅲ章 遺物

### 第1節 出土遺物の整理と分析方法

#### A 出土遺物の整理方針

出土した遺物は、27リットル入りコンテナ容器に換算しておよそ40箱程度であった。遺構に伴う一括性の高い遺物は少なく、多くは遺構外からの出土である。また遺物の残存状況も良好とはいえない。ほとんどが小破片である。そのため、遺跡の性格を理解するための情報をできるだけ多く収集するために、出土遺物の分類と出土量のカウント作業をおこない数量化することにつとめた。特に、毛受城が築城されていたとされるB期の遺物については、毛受遺跡の南に位置し、歴史的にも関係が深いとされる刈安賀城との比較をおこなうための基礎データを蓄積することに観点を置いた。整理、カウント方法については『清洲城下町遺跡IV』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第53集 1994)・『清洲城下町遺跡V』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 1995)を参考とし、分類項目もこれらの報告書の形式を基本的には踏襲しつつ、一部改変を行った。

#### B 出土遺物整理の方法

出土遺物を材質(陶磁器、土師器、石製品、木製品、金属製品)で区分し、大きくA期・B期・C期の3期に分けた。B期の遺物を中心にカウント作業を行い、それ以前・以後の遺物についても、器種によっては、簡単なカウント作業をおこなった。

なお、各時期の遺物の年代観は、古式土師器については赤塚次郎氏(本センター主査)、灰釉系陶器については岡本直久氏・藤澤良祐氏(共に(財)瀬戸市埋蔵文化財センター)、B期・C期の陶磁器については鈴木正貴氏(本センター調査研究員)・藤澤良祐氏、また石製品の材質鑑定は堀木真美子氏(本センター調査研究員)にそれぞれご教示をいただいたが、その文責はすべて筆者にある。

#### C カウント方法

##### ① データの収集

- a 遺構、グリッド別毎に接合作業を実施した後、口縁部の有無で区別する。
- b 口縁部を有するものは接合後破片1点につき1データとした。
- c 口縁部を持たないものも、基本的には破片1点につき1データとした。
- d 長辺が1cm以下の小破片は、原則として分析から除外した。

##### ② 陶磁器・土器の分類

出土した遺物は、B期のみならず、多くが細片化した小破片であるため、器種項目毎に分類を進めることができなかった。そこで器類毎に分類することとし、場合によって器種分類までおこなった。

A 瓢……………口径10cm前後、器高7cm前後の小型容器。

- 平碗・天目茶碗・丸碗・尾呂茶碗・せんじ碗・鍔茶碗、など
- B 皿……………口径 10 cm 前後、器高 2 cm 前後の浅い小型容器。  
縁軸皿・腰折皿・端反皿・稜皿・重圓皿・丸皿、など
- C 鉢……………口径 25 cm 前後で逆ハの字状に開くものと向付と呼ばれる小鉢状のものを一括。  
平鉢・丸鉢・大皿・筒型鉢、など
- D 撥鉢……………内面に撥目を持つ口径 25 cm 前後で逆ハの字状に開く大型容器。
- E 袋物……………袋形・筒形の形状をなす容器。(底径の大きさで大形品と小形品との細分が可能だが、遺物の残存状況から、本報告ではそこまでの細分が困難であることから一括して「袋物」として扱う)。  
壺類・甕類・瓶類・筒型容器、など
- F 香炉……………筒形・壺形の容器に脚がついたもの。
- G 鍋・釜……………煮沸・煮炊に使用されたと思われる浅鉢・大型製品を特に区別する。
- H その他……………蓋・鉢・陶丸・錘等上記の分類に当てはまらないもの。
- I 不明……………器類・器種が不明なもの。

なお、土師器皿、土師器の鍋・釜、灰軸系陶器については、以下の手順で、カウントをおこなった。土師器皿は、遺構に伴って出土した破片点数が総破片点数の約 37% 程度であり、形状を復元できる資料も少量であった。そのため、遺構に伴う資料のなかで、数量的にもまとまって出土したものについては、カウントをおこなった。土師器の鍋・釜は、口縁部の形状に基づき内耳鍋・焙烙・羽付鍋・伊勢型鍋とに分類されるが、所属時期を踏まえた上で器種分類を進めるための十分な破片資料数が得られなかった。そのため、土師器皿同様に、把握できる限りにおいてカウントをおこなったが、基本的には「鍋・釜」という 1 つの器類として扱った。灰軸系陶器についても、碗と皿を明確に区別することが困難であったため、すべて「碗」としてカウントした。

### ③ 口縁部残存率の算定方法

今回の分析で実施した口縁部計測法は、

- 口縁部を持つもののすべてを対象とし、鉢・陶丸・錘等は計測不能とした。
- 口縁部が完存した場合を 1 ( $12/12$ ) として、遺存している口縁部の割合を 12 分の 1 単位で計測した。小破片の資料化も試みたため 12 分の 1 以下を切り上げて算定している。(12 分の 0 より大きく 12 分の 1 以下の破片を 1, 12 分の 11 よりも大きく 12 分の 12 以下の破片を 12 とした)。
- 計測器具は、直徑を 1 cm 単位ずつ拡大した同心円とその中心から放射状に 12 等分した直線(角度は 30° づつ)を、白または透明の用紙に印刷したものを計測器として用意し、口縁部残存資料を計測器具に当てて、残存する口縁部の長さが放射状に 12 等分された区画の幾つかを調べて口縁部残存率を求めた。

## 第 2 節 調査区全体のカウント結果（概要）

出土遺物の点数は、陶磁器・土器・土製品類の接合前の総破片数 5,005 点、瓦の総破片数 125 点、

	陶磁器 土器 土製品	瓦	木製品	金属製品	石製品	合計
点数	5.005	125	27	22	14	5,193

第3表 毛受遺跡材質別遺物破片数

	灰釉系 陶器類	陶器類	土師皿 鍋・釜 類	その他 古式土器類 須恵器、等	磁器類	加工円盤	擦り痕を 有する土器	土鉢・ 土人形	陶丸・ 土玉	土錐	土製円盤	合計	
点数	1,733	1,662	749	418	245	88	71	20	11	4	3	1	5,005

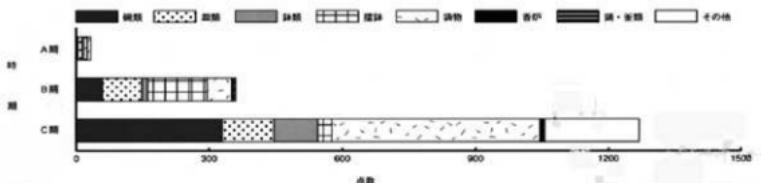
第4表 陶磁器・土器・土製品破片数



第8図 毛受遺跡出土遺物組成図

	碗類	皿類	鉢類	擂鉢	袋物	香炉	鍋・釜類	その他	合計
A期	3	10	4	8	8	0	0	0	33
B期	60	88	14	133	56	2	4	3	360
C期	329	117	99	31	469	7	3	214	1,269

第5表 時期別陶器破片数



第9図 時期別破片数グラフ

木製品27点、金属製品22点、石製品14点であった(第3表)。また以下に示す破片点数は、すべて接合前の点数である。

出土した土器のカウント作業の結果、古墳時代前期の古式土師器、須恵器、灰釉陶器などが、少量ではあるが、確認された(4.9%)。中世の土器については、灰釉系陶器が最も多く出土した(34.6%)。また中世施釉陶器は、器類構成は少ないが、出土した該期の陶器類の約2%の割合を占めた(第4表・第8図)。

他方、土師皿、土師器鍋・釜類については次のような結果を得ることができた。

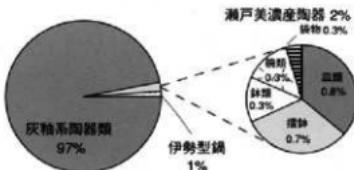
土師皿は総破片数で749点(15.0%)出土し、口縁部残存率は234(1/12単位とする。以下同様に表記する)である。特にB区北側、C区北側、D区中央と、いずれも戦国期の大きな区画溝が検出されたあたりに集中している。土師器鍋・釜は総破片数418点(8.4%)出土し、口縁部残存率はIIIであった。そのうち内耳鍋・焰烙類が総破片数377点を数え、口縁部残存率が86ともっとも大きかった。

### 第3節 遺物

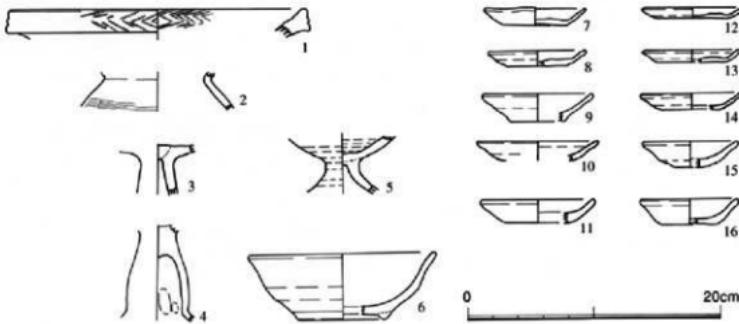
#### 1 A期の遺物(第10図1~16)

ここでは、古墳時代から中世までの時期の遺物を一括して扱う。

1~4は古墳時代の古式土師器である。1は壺の口縁部である。口縁内面には平坦面を持ち、内面・外面に連続した羽状刺突紋が施されていることから、拂ヶ壺型土器の祖形タイプと考えられる。週間II式後半に属する。2は壺の体部で、



第11図 中世土器口縁部残存率



第10図 A期遺物実測図

機械沈線紋を施す。4世紀中頃（廻間Ⅲ式？）に位置づけられる。3・4は高坏である。3は古墳時代前期後葉に位置づけられ、4は松河戸I式に属する。

5は須恵器の高坏である。

6～16は灰釉系陶器である。6は「北部系」（美濃窯）産の碗で、外面底部の回転糸切痕と高台部のモミ痕をナデ消している。5型式に属する。7～16は皿である。11は猿投窯産か知多窯産の製品と思われる。15・16はいわゆる「南部系」産の荒肌手の製品である。7～10、12～14はいずれも美濃窯産の均質手の製品で、7は完形である。これらはいずれも5型式～9型式に位置づけられる。灰釉系陶器の接合前の絶破片数は1,733点で、口縁部残存率は624であった。また、該期の造構が稀薄であったこともあり、ほとんどが二次堆積による覆土からの出土である。

そのほか、中世の遺物として、「伊勢型鍋」と呼ばれる土師器鍋は、口縁部破片数が9点、口縁部残存率は6であった。また古瀬戸中期～後Ⅲ期くらいに属する施釉陶器は破片数で26点が出土し、いずれも瀬戸美濃窯産である。器類は、碗類（平碗など）3点、皿類（卸皿、縁付皿など）10点、鉢類（折縁深皿など）4点、擂鉢8点、袋物（壺瓶類）1点であった。また口縁部残存率は碗類0.3、皿類0.8、鉢類0.3、擂鉢0.7、袋物0.1であった（第11図）。

## 2 B期の遺物

出土した土器の割合は、全体の22%程度であるが、遺物の残存状態は比較的よく、また当該期の造構からの出土量も一定の割合で見られたことから、各調査区の主な造構毎に記述をすすめる。

### （1）B区

#### SD11（第12図 17～29）

調査区の北西隅付近で検出された区画溝で、ここからは瀬戸美濃窯産の天目茶碗、腰折皿、縁付小皿、擂鉢、壺、匣鉢、常滑産の壺などの陶器類、土師皿、木製品が出土した。

土師皿（17～20）はいずれも口径6cm前後の非ロクロ成形で、体部にヨコナデを強く施している。19には口縁部にタールが付着している。21～23は瀬戸美濃窯産の擂鉢である。22には廃棄された後に受けたと思われる被熱痕が見られる。21・22は古瀬戸後IV期新段階、23は大窯第1段階に属する。24は無釉の筒型製品である匣鉢、25は縁付小皿である。常滑産の大型の壺である26は、口縁は「N」字状に折り返したもので、かなり縁帶に近い形となっている。

27は4ヶ所に穿孔をもつ折敷の底板である。28・29の板状の木製品は、ともに中央部に抉りをもち、先端部に孔が穿たれている。これらは、出土地点が近接していたことや、また他遺跡の類例から、本来は十字形に組み合わされており、曲物桶などの容器を載せて吊した運搬具であったと想定される。

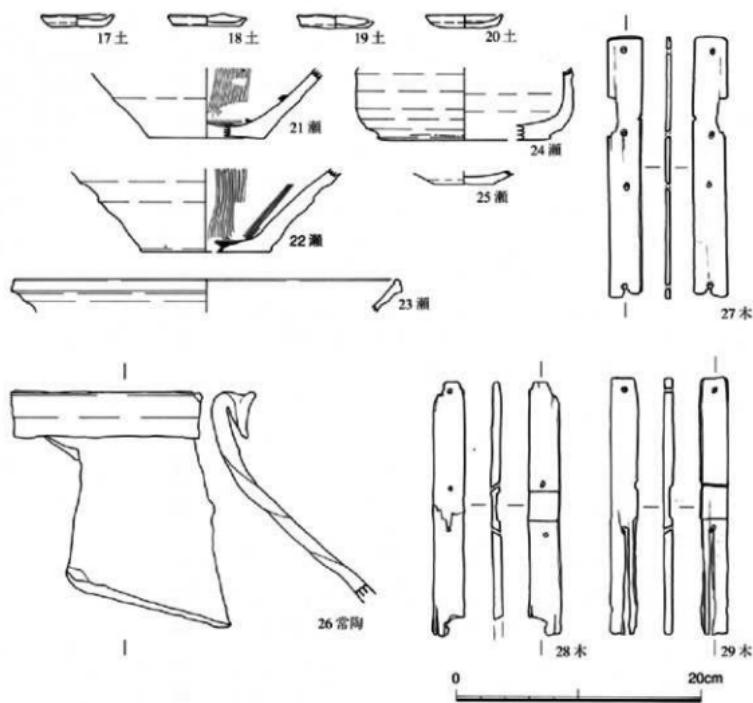
#### SD12（第13図 30～33）

調査区の中央をほぼ南北に走る大溝で、ここからは瀬戸美濃窯産の天目茶碗、擂鉢、壺などの陶器類、土師器内耳鍋、そして最下層の灰色粘土質シルト層からは木胎漆器碗が出土した。

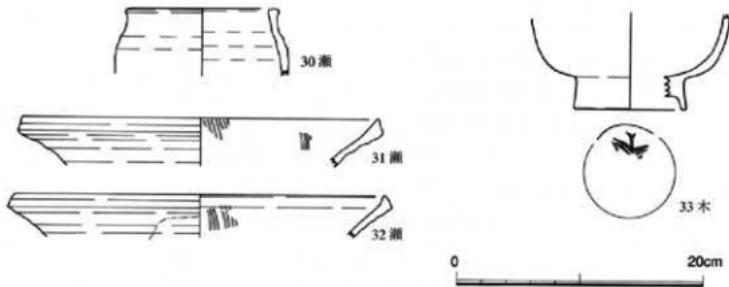
30は口広有耳壺で、外面に鉄軸をかけている。擂鉢（31・32）は、口縁端部が内側に屈曲し上方に伸びているもの（32）と口縁断面が三角形のもの（31）とに分かれる。32は古瀬戸後IV期新段階、

31は大窓第1段階にそれぞれ属する。

木胎漆器椀 (33) は体部の器厚に比して底部の器厚が著しく厚く、高台も高い。また底部と体部



第12図 96B区 SD11遺物実測図



第13図 96B区 SD12遺物実測図

の外側に段差があることが断面形から窺えることから、古瀬戸後Ⅳ期新段階～大窯第1段階くらいに位置づけらる。底面には文様の刻書が施されている。

## (2) C区

### SD17 (第14図 34～39)

調査区内で、逆L字状の鉤手に屈曲する大溝で、堀割としての機能が推測される。出土遺物は、瀬戸美濃窯産の天目茶碗、重圓皿、卸目付大皿、内耳鍋、常滑窯製などの陶器類、土師皿、土師器内耳鍋、銅製紅皿、木胎漆器碗である。

34は銅製の紅皿である。法量は口径4.4cm、器高1.6cmを測る。35は灰釉系陶器碗の系譜を引いたと見られる瀬戸美濃窯産の重圓皿で、内面に螺旋状の凹線が巡り、口縁端部は内彎している。土師皿は非ロクロ成形のもの（36）とロクロ成形のもの（37）とが存在する。37は口径12.4cmを測り、体部下端部から口縁部まで直線上に逆「ハ」の字状に開くものである。内面にタールが付着していた痕跡を僅かに残している。38は中国窯産青花碗である。高台の残存形態からいわゆる「蓮子碗」と見られる。見込み部分には草花文らしき文様が描かれている。

39は木胎漆器碗である。外面には黒色漆、内面には赤色漆が塗布され、底部の器厚はやや厚いが、高台は低い。外面には赤色漆で鶴紋と亀紋がそれぞれ描かれている。鶴紋は鶴の羽を複数の細い線で平行に描いており、亀紋は亀の頭・足・尾が表現されている。また底面には十文字状の刻書が施されている。器形や文様形態などから、古瀬戸後Ⅳ期新段階～大窯第1段階くらいに位置づけられる。

### SD18 (第15図・第16図 40～66)

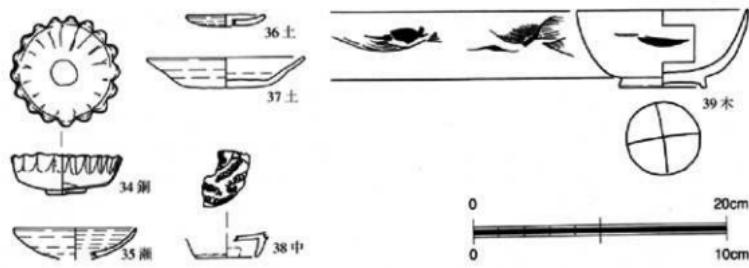
調査区をクランク状に屈曲しながら走る堀割と思われる溝で、SD19を切っている。該期の遺構の中では、最も遺物の出土量が多かった。ここからは、瀬戸美濃窯産の天目茶碗、腰折皿、折縁深皿、擂鉢、常滑窯産の甕、中国窯産の青磁碗などの陶磁器類、土師皿、木胎漆器碗をはじめとする生活道具類の木製品などが出土した。

土師皿は、非ロクロ成形のもの（40～47）とロクロ成形（48～50）のものとがある。非ロクロ成形の土師皿は、口径が6.0～7.0cmを測り、いずれも底部内面にナデ、体部に強いヨコナデを施している。ロクロ成形の土師皿は、口径が10.0cm～13.0cmを測り、体部下端部から口縁部まで直線的に逆「ハ」の字状に開く。48は口縁端部がつまむようにやや強いヨコナデがされている。41・49には口縁内面に、48には内面全体にタールが付着している。

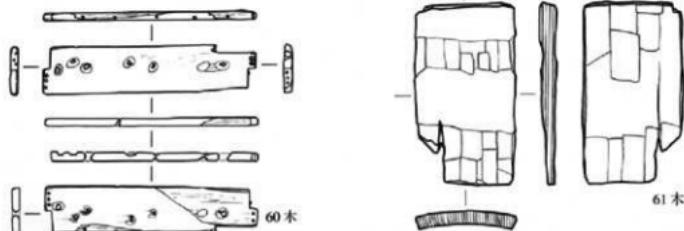
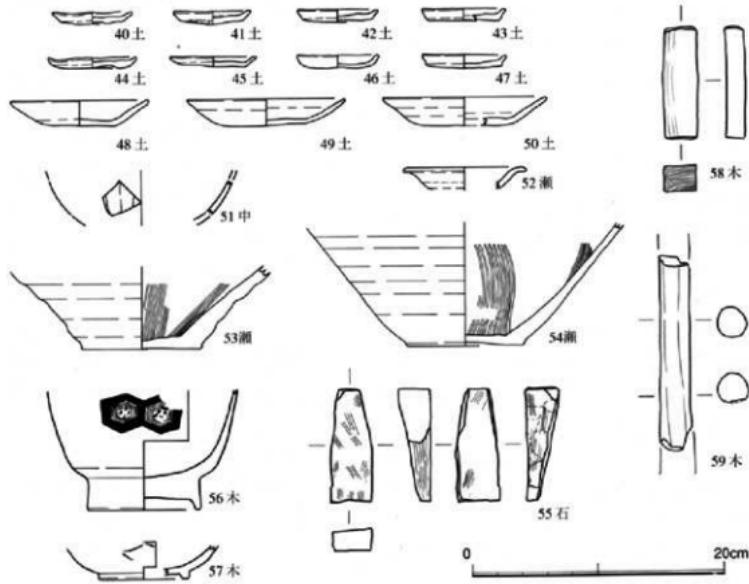
この溝から出土した土師皿は破片数112点を数え、今回の調査では最も多くまとった資料となった。そのうちロクロ成形のものは101点（90.2%）、口縁部残存率39、非ロクロ成形のものは10点（0.09%）、口縁部残存率45であった。これらの破片数の約91%が、この溝の南西角付近に集中して出土していることから、意図的にこの付近へ廃棄されたと推定される。

51は浮彫状の蓮弁文を施した中国窯産青磁碗である。52は瀬戸美濃窯産の灰釉腰折皿で、古瀬戸後Ⅳ期新段階に属する。53・54は瀬戸美濃窯産の擂鉢で、53は古瀬戸後Ⅳ期新段階、54は大窯第1段階に、それぞれ属する。

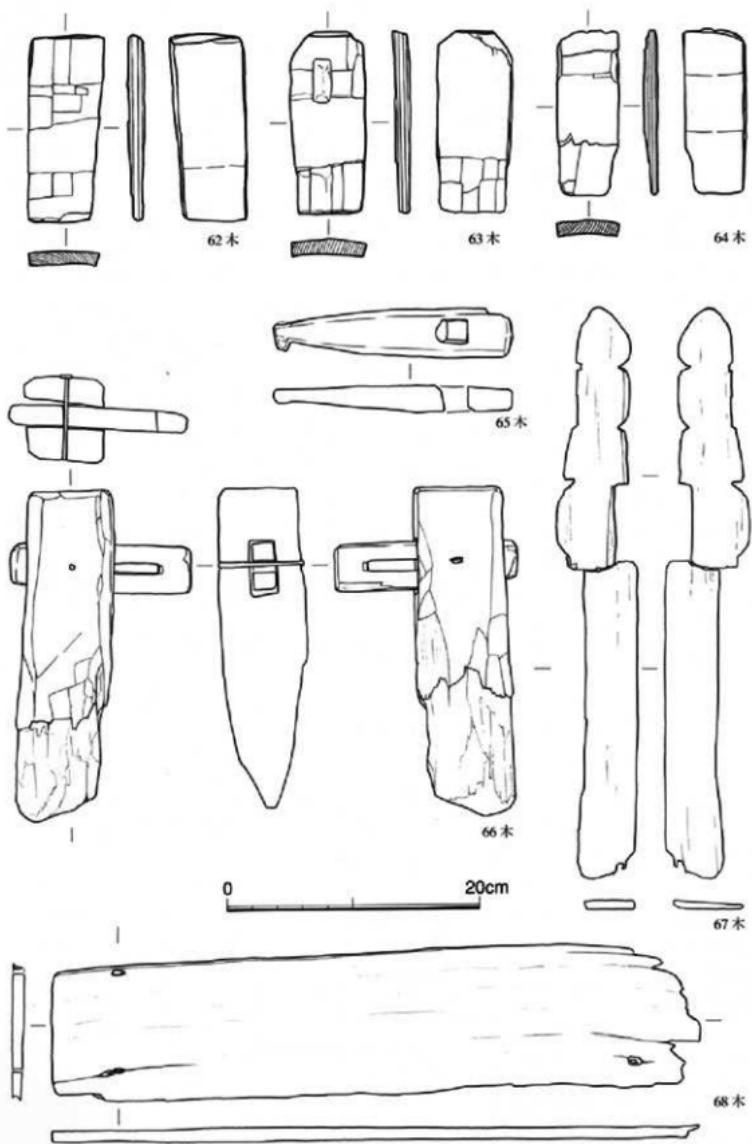
55は砥石で、一部欠損しているが、各面に使用痕が顕著に認められる。部分的に被熱の痕跡が見られる。石材は凝灰岩である。



第14図 96C区 SD17遺物実測図 (34は1:2、35~39は1:4)



第15図 96C区 SD18遺物実測図



第16図 96C区 SD18・SD20 遺物実測図

木胎漆器碗は3点出土したが、図化できたのは2点(56・57)である。いずれにも外面に黒色漆、内面に赤色漆が塗布されている。56は高い高台をもち、体部はやや直線上に立ち上がる。底部の器厚は体部のそれに比して厚く、断面形態から底部と体部の外側に段差が見られる。外面には赤色漆で亀甲紋が2つ並列された形で描かれ、亀甲紋の中央には4個の点が記されている。器形や文様形態などから、古瀬戸後IV期新段階～大窯第1段階くらいに位置づけらる。57は器厚のやや厚い低い高台をもつ。外面には赤色漆で鶴亀紋らしき紋様が描かれている。

58～66は生活道具と考えられる木製品である。59は摺り粉木状の棒状木製品である。60は指物と呼ばれる木箱の板材である。両端には、表面に3ヶ所ずつ、側面に3ヶ所ずつの目釘が打たれ、また長辺の側面の一方にも5ヶ所に目釘が打たれている。61～64は結桶の側板で、外面にタガの圧痕が残存している。この溝からは、結桶の側板は8点出土したが、ほとんどに被熱の痕跡が見られる。65はその形状から、開炉裏に吊り下げられた自在鉤の高さを調整するために使われる小猿と呼ばれる木製品と思われる。66は用途不明の木製品である。構造は角柱の材に長方形の穴を削り抜き、そこに中央を長方形に削り抜いた小さな板材を差し込み、目釘を打つことによりこの差込板が可動式となっている。備え付けの器械類に付随する調整具の一種と考えられる。

#### SD20 (第16図 67～68)

調査区のはば中央を東西に走る溝で、ここからは瀬戸美濃窯産の天目茶碗、平碗、縁皿、擂鉢などの陶器類、土師皿、土師器羽付鍋、木製品、が出土した。67は木製の卒塔婆である。表面には文字の痕跡がかろうじて認められるが、判読はできなかった。68は両端に2ヶ所ずつの穿孔がなされた板状木製品である。枠材の1つと考えられる。

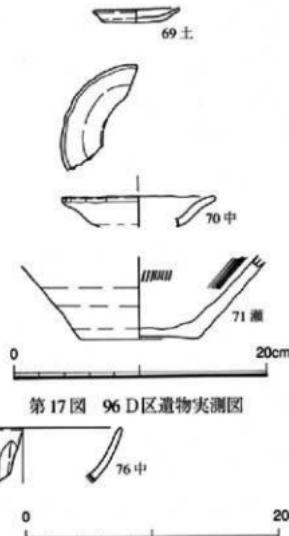
#### (3) D区

##### SB01・SD06・SK12 (第17図 69～71)

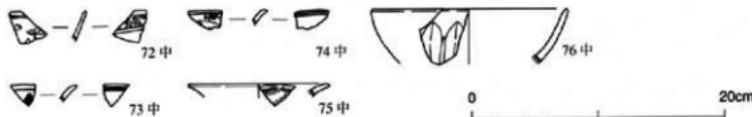
D区では、該期の遺構からのまとまった遺物の出土は見られなかった。

69はSB01の柱穴P7から出土した非クロコ成形の土師皿で、体部外面のみに強いヨコナデを施している。正立した状態で出土したことから、地鎮のために埋納されたと考えられる。

SD06は堀割と考えられる大溝である。ここからは、中窓窯産の青磁接花皿(70)、瀬戸美濃窯産の重圓皿、卸目付大皿、擂鉢、内耳鍋などの陶器類、常滑窯産の甕、土師皿、土師器羽付鍋が出土したが、該期の遺物量はさほ



第17図 96 D区遺物実測図



第18図 貿易陶器実測図

ど多くはなかった。

71はSK12から出土した瀬戸美濃窯産の擂鉢である。大窯第1段階ないしは第2段階くらいに位置づけられる。

#### (4) 貿易陶磁器 (第18図 72~76)

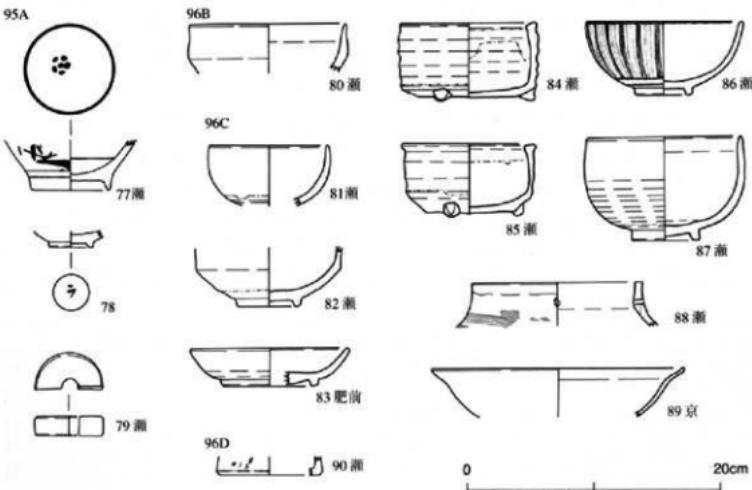
ここでは、今回の調査で出土した貿易陶磁器の破片数8点のうち、遺構外から出土した5点について記述する。出土した遺物には口縁部から体部にかけて残存する良好な資料ではなく、すべて破片である。72~74は青花、75~76は青磁で、产地はいずれも中国窯産である。

72は碗。外面体部には毛彫りが施され、内面口縁部に菱格子帶文が描かれている。73・74は端反皿で、外面体部に牡丹唐草文らしき文様が描かれている。75は棱花皿で、口縁部内面に波状文が施されている。76は外面体部に浮彫状の蓮弁文を施した碗である。

#### 3 C期の遺物 (第19図 77~90)

C期の陶器類の総破片点数は、今回の調査で出土した陶磁器のおよそ77%で、B期のそれに比べて器種構成もかなり豊富になっている。中でも、「赤物」と呼ばれる常滑窯産の壺に代表される大型の袋物が最も多くの破片点数を数え、この時期の出土陶器の約37%を占める。しかし、遺構に伴う遺物の量は少なく、多くは遺構外出土のものである。しかも日常雑器類の主体となる碗皿類の残存状況は決して良好とはいはず、どの器種においてもほとんどが破片資料である。

77~79は、A区から出土した遺物である。77は美濃窯産の広東茶碗の底部で、内面底部は丸み



第19図 C期遺物実測図

を持って凹んでいる。連房窯第10小期に属する。78は生産窯地不明の丸碗の底部である。外面底部には「キ」という墨書きがされている。79は戸車である。

80はB区から出土した瀬戸美濃窯産の天目茶碗である。連房窯第2小期に属する。

81～89はC区からの出土遺物である。C区は、数条の近世期の区画溝などの遺構が広く展開しており、当該期の遺物の出土量も調査区全体の中で最も多かった。81は連房窯第8・9小期に属する丸形湯呑茶碗である。SD02から出土した。82は連房窯8小期に属する瀬戸窯産の腰折碗である。83はSD21から出土した18世紀後半くらいに位置づけられる肥前窯産の青磁皿である。84・85は筒型の灰釉香炉である。84は瀬戸窯産で連房窯第8小期に属し、85はSK19から出土した、連房窯第3・4小期に属する瀬戸美濃窯産である。86は瀬戸窯産丸碗で、外面体部は麦薺手文様が施されている。連房窯第8小期に属する。87はSD02から出土した瀬戸窯産の灰釉丸碗で、連房窯第8・9小期に属する。88は羽付釜の口縁部で、口縁部に穿孔がされており、口縁部内外面にはタールの付着痕が見られる。SK19出土。89は関西系窯産陶器の鉢である。

D区では、SD01から碗皿類の小型製品から「赤物」などの大型製品にいたる陶磁器類、瓦など多くの遺物が出土した。この溝から出土した90は、連房窯第1小期に属する瀬戸美濃窯産の織部向付である。

#### 4 その他の遺物

##### A 加工円盤（第23図・第24図 91～162）

陶器の破片を素材としてそれに加工を施した陶製品のうち、多角形に打ち欠き円形状に成形した小型製品を、「加工円盤」としてここで取り扱う。なお天目茶碗によく見られるような、底が丸く抜けてしまったため自然に円形にできあがった可能性があるものについては除外した)。

本調査で出土した加工円盤は71点で、材質は、瓦2点を含め、すべて陶器を使用している。これらの資料を、1) 素材、2) 加工技法、3) 法量、の3項目について観察、測定を行った)。

1)素材 素材となっている陶器を器種別に見ると、碗類、皿類、鉢類、擂鉢、壺類、壺類、常滑窯産の赤物などの大型製品、瓦、器種不明の9種類に分けられ、このうち69%に当たる49点が鉢類、擂鉢、壺類、壺類、大型製品、といった器厚が比較的厚い器種を用いている。使用されている部位は、口縁部を含めた体部を転用する場合(63点)と高台部を含めた底部を転用する場合(8点)の2つの場合がある。これら陶器の産地については、瀬戸窯産27点、瀬戸美濃窯産23点、美濃窯産

	碗類	皿類	鉢類	擂鉢	壺類	壺類	大型製品	瓦	器種不明	計
瀬戸窯産	6		2	16		3				27
瀬戸美濃窯産	7	1	4	6	1	2	1		1	23
美濃窯産	5		4		3			1		13
常滑窯産					1	4	1			6
産地不明				1				1		2
計	18	1	10	23	5	9	2	2	1	71

第6表 産地別加工円盤転用器種分類表

13点、常滑窯産6点、产地不明2点であった(第6表)。また所属時期は、近世(連房窯期)のものが60点と最も多く全体の84.5%を占めており、他、中世2点、古瀬戸後期~大窯期4点、時期不明5点、というように分けられた。

2) 加工技法 周縁部を打ち欠いたものと、その破面をさらに研磨しているものとの2つのタイプが見られる。周縁部の打ち欠きについては、破面の観察から、①陶器の内側から加撃をした後、②陶器の外側から加撃をし、整形をする、という一定の工程があったものと推定される。研磨痕については、周縁部の一部に見られるもの(92・102・143・158・160・161)と、全周を研磨しているもの(94・96・111・116・119・127・147・159)とがあり、体面にも研磨痕が見られるもの(102・137・146)もある。周縁部に研磨を施したものは全体の約20%程度にあたる14点しか出土していないことから、円く整形するために破面に研磨を施したのではなく、描り具のような別の用途に用いられた結果として、より正円に近い円盤状に成形されたとも考えられる。

3) 法量 法量は、長径・短径・重量について測定した。長径・短径の計測は、転用された部位の上下位置を定めたのち、中心点を通る最長線を基準線とし、便宜上、基準線に直交する線間の最大値を長径、平行する線間の最大値を短径とした。重量測定は電子計量器を使用し、小数点第一位を有効数値とした。

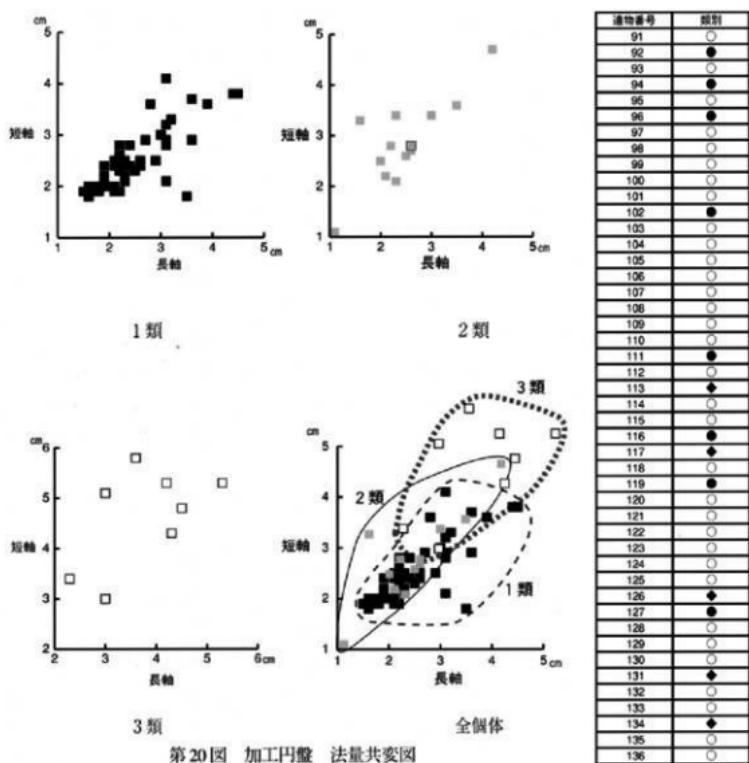
以上述べた素材からの転用された部位と、加工技法の組み合わせから、当該資料は次のように類別される。

- 1類 陶器の体部を転用し、周縁部は打ち欠きによる整形だけにとどまる。
- 2類 陶器の体部を転用し、周縁部は打ち欠きによる整形を行った後、研磨を施す。
- 3類 陶器の底部を転用し、周縁部は打ち欠きによる整形だけにとどまる。
- 4類 陶器の底部を転用し、周縁部は打ち欠きによる整形を行った後、研磨を施す。

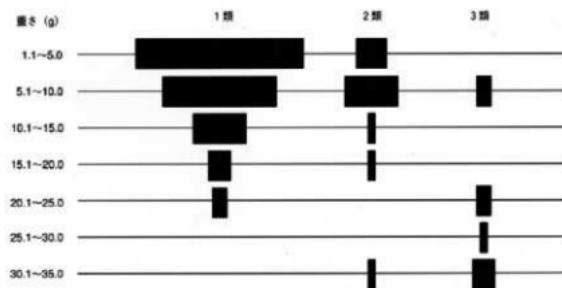
これらの分類に該当する資料点数は、1類49点、2類14点、3類8点となり、4類についての該当資料は見いだせなかった(第7表)。以下、これらの分類に基づいて、規格・素材について述べていく。

1) 規格 分類毎に計測値の分布を見ていくと、1類は長径・短径とともに2.1~3.0cmの範囲を中心に、1.1~3.0×1.1~3.0cm以内に数が集中する。長幅比(長径/短径)は1.01である。重量は4.1~5.0gを中心広がるグループと、8.1~11.0gに広がるグループとの2つのピークが見られる。2類は長径・短径ともに2.1~3.0cmに大きなピークがあるが、長径は2.1~4.0cmに、短径は1.1~3.0cmに数が集中する。長幅比は1.15と、1類に比べ、多少のバラツキが見られる。重量においても4.1~5.0gと8.1~9.0gとに小さなピークが見られるが、全体としてのバラツキは大きい。これらの点から1類に比べてやや大型化する傾向が窺える。3類は長径5.1~6.0cmにピークをもち、短径は2.1~3.0cmと4.1~5.0cmとに小さなピークが見られ、長幅比は1.22である。重量も20g以上に6点が集中する。類別に見ていくと、1・2類は大きさが1~5×1~5cm以内に収まり、重量平均でも1類が7.5g、2類が9.7g、と共に10g未満であることから、小型製品としてグループ化することができる。これに対し、3類は大きさが2~6×2~6cm以内とやや大形であり、重量平均も23.2gであることから、資料中最も大型のグループであるといえる。(第20図・第21図)

- 2) 素材 1類では1.1~10.0gの領域に、49点中37点が分布する。転用された陶器では描鉢が



第20図 加工円盤 法量共変図



第21図 加工円盤重量分布図

第7表 加工円盤 類別表

○=1類 ●=2類 ◆=3類

最も多く、5.1～10.0 gを中心広く分布している。鉢類、壺類、壺類も擂鉢とほぼ同様の分布領域を示す。また碗類は1.1～5.0 gの領域にほとんどの点数が集中する。2類でも重量分布は1類とさほど変わらないが、転用されている陶器に碗類は選択されていないようである。研磨を行うには器厚の厚い器種が素材としてより適していたためであろう。逆に3類では碗類、皿類といった、比較的小形で器厚の薄い器種が使用され、擂鉢や壺などの器種は使用されていない。底部の高台を表面に残しながら、その輪郭には沿うような形で、円形に成形していることから、高台をもたない器種は適用できない素材として用いられなかったと考えられる。1・2類では、使用されている器種は比較的重量のある大形のものであるが、小規格で軽量な加工円盤として転用されている。しかし、3類では、軽量な器種である碗類・皿類が用いられているが、1・2類に比べて約2倍ほどの重さがある。このことから、素材から転用される陶器の部位の加工技法によって、加工円盤の大きさや重量が規制されていることがいえる。また、素材となる器物が使い込まれた後に円盤形の製品として加工をされたことを示す例<sup>3)</sup>は、擂鉢以外には見いだせなかつた（第22図、第8表）。

毛受遺跡の加工円盤は、陶器の体部を用いるものを主体とし、周縁部を円形に打ち欠いて整形しただけの1類が最も多く、他の遺跡で多く見られるよう、打ち欠いた周縁部を研磨して整形した2類は、あまり出土していない。他方、灰釉系陶器を用いた加工円盤において特徴的に見られる形態である高台部を利用した3類は少量しか見られなかつた。加工円盤の素材となる器種やその部位について、意図的な選択がなされていたかどうかは、他の遺跡の資料の様相ともあわせて、今後さらに検討を要するところもある。

使用時期は、遺構からの出土が少なく必ずしも特定できない。しかし、使用（転用）されている陶器から、資料の多くが近世の段階に製作されたと考えた方が妥当であろう。

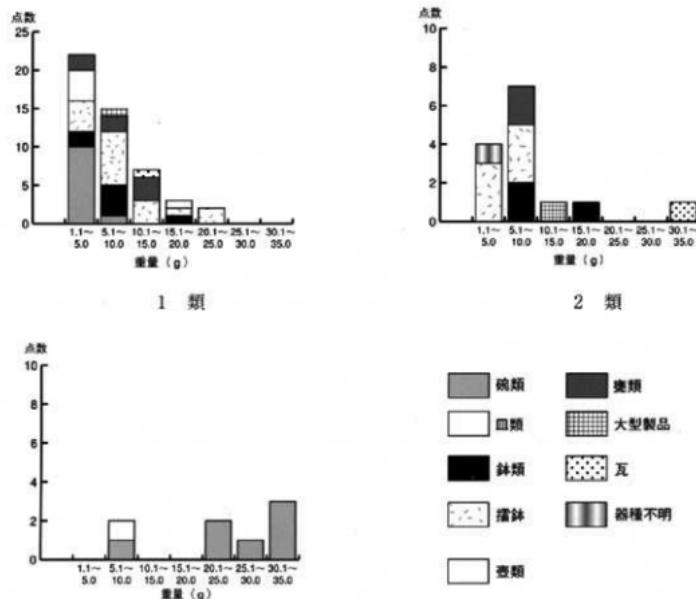
加工円盤については、計量具、飛碟（つぶて）、「おはじき」「石蹴り」などの遊戯具の一種、祭祀具といったように、さまざまな用途が考えられている<sup>4)</sup>。資料の観察から、成形の際の加熱にも、内面から行った後、外側から行うという一定の工程を経ていたと見られることから、意図的な企画に基づいた一つの道具として製作されたと考えることができる。また出土地点を空間的に復元すると、居住空間を区画する溝や井戸といった、境界を示す遺構の付近からの出土が最も多く、さらに溝からの出土地点を見てみると、居住区間にあたる内側からの例が多い（第29図）。この点については、当該期の清洲城下町遺跡や、その周辺の外町遺跡などにも見られ、中世の灰釉系陶器を用いた加工円盤の場合と共通している<sup>5)</sup>。これらのことから、戦国期から近世においても、加工円盤は境界の外からの悪霊や惡魔に対する除災のための呪術具であったと考えられる。

#### ＜注・参考文献＞

- 1) この点については、「天目茶碗の成形に起因するのであって、意図したものとは言えない」とする説にしたがつた。（岡本直久 1998 「加工円盤」「上品野蟹川遺跡」財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第16集）
- 2) 渡邊康行氏の分類を参考にした。（渡邊康行 1986 「加工痕を有する陶・磁器」「麻布台一丁目 那須省飯倉分館内遺跡」港区麻布台一丁目遺跡調査会）
- 3) 例えば、一宮市に所在する大毛池田遺跡などに見られる。（八木佳素美 1997 「c. 加工円盤・陶丸」「大

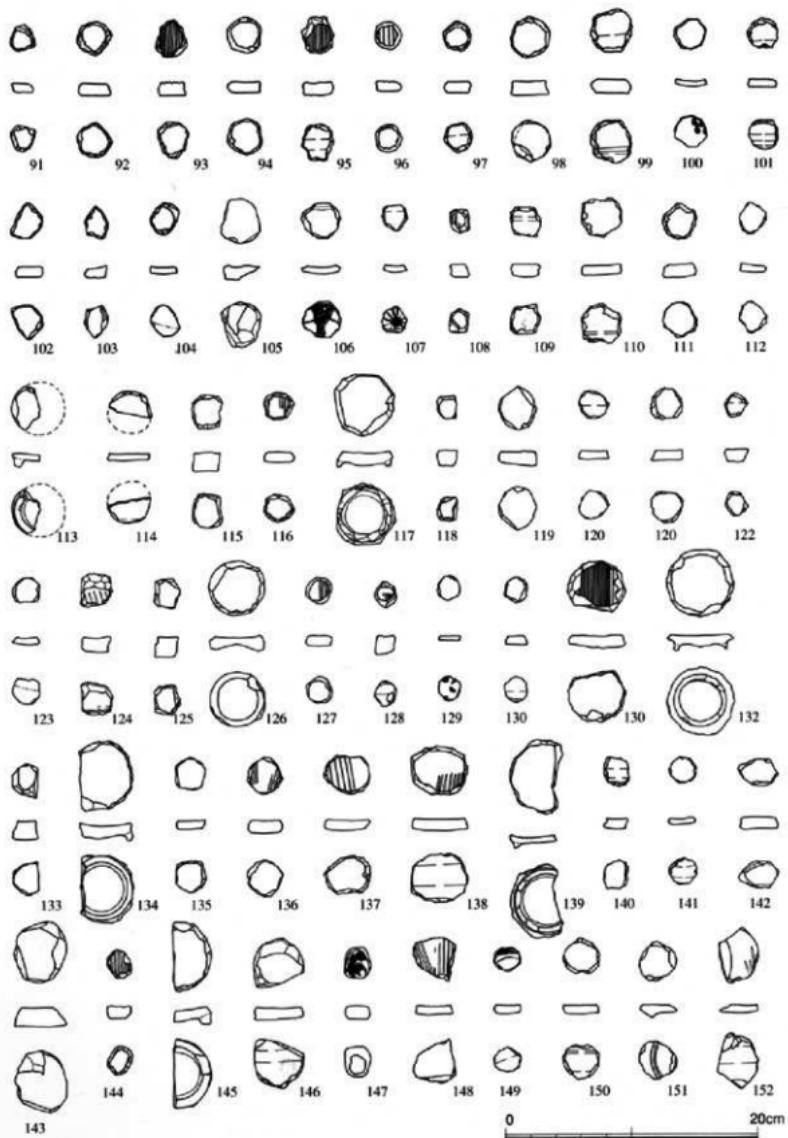
	重量(g)	碗類	皿類	鉢類	擂鉢	壺類	甕類	大型製品	瓦	器種不明	計
1 類	~5.0	10		2	4	4	2	1			22
	5.1~10.0	1		4	7		2				15
	10.1~15.0			1	3		3				7
	15.1~20.0				1	1					3
	20.1~25.0				2						2
	25.1~30.0										0
	30.1~35.0										0
2 類	~5.0					3				1	4
	5.1~10.0				2		2	1			7
	10.1~15.0				1						1
	15.1~20.0										1
	20.1~25.0										0
	25.1~30.0										0
3 類	30.1~35.0								1		1
	~5.0										0
	5.1~10.0	1		1							2
	10.1~15.0										0
	15.1~20.0										0
	20.1~25.0			2							2
4 類	25.1~30.0			1							1
	30.1~35.0			3							3
計	~35.0		総	当	質	料	な	レ			0
		18	1	10	23	5	9	2	2	1	71

第8表 加工円盤 重量別転用陶器分布表

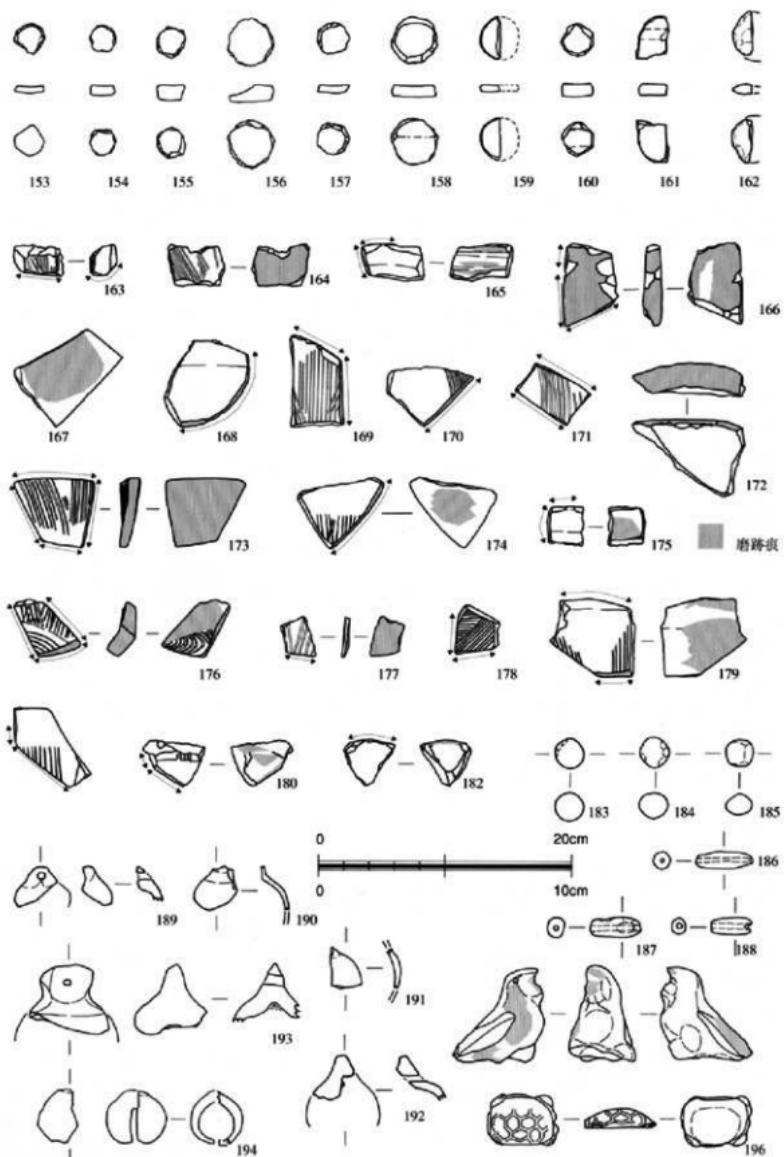


3 類

第22図 加工円盤 重量別転用陶器分布図



第23図 その他の遺物実測図（1）



第24図 その他の遺物実測図（2）（189～196は1:2、そのほかは1:4）

#### 毛池田遺跡 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第72集)

なお筆者が『考古学フォーラム』9(1998)において発表した「加工円盤について」の中で「大毛池田遺跡」中の「c. 加工円盤・陶丸」を参考にしたが、この文責は岡田智子氏ではなく、八木佳素美氏の誤りであったことを、この場を借りて訂正しておく。

- 4) 本稿でいう加工円盤の用途については、川吉謙二氏の論考が参考となる。

川吉謙二 1996 「土製円板小考」「紀要」創刊号 (財) のぎじく文化財保護研究財団

また、加工円盤のような「小型円板」の付着物の観察から、灯明具として認定しうるものがあるとの指摘もされている。

山口 格 1997 「2. 陶磁器の2次加工品について -「小型円板」再考」『四ツ野C遺跡発掘調査報告』津市教育委員会・津市埋蔵文化財センター

- 5) 摘稿 1998 「加工円盤について」『考古学フォーラム』9 考古学フォーラム

#### B 土製円盤 (第24図 162)

土師質の円盤状土器である。手捻りで成形した後、表面をナド調整している。C区SD11から出土した。

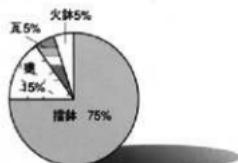
#### C 擦り痕を有する土器 (第24図 163~182)

陶器の破片の一部に二次的な擦り痕が見られる土器を、「擦り痕を有する土器」として、ここで取り扱う。

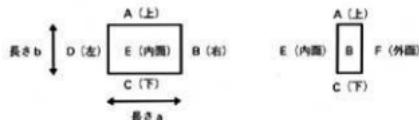
今回の調査では20点が出土した。材質は瓦を用いたものが1点、他はすべて陶器を使用している。これらの資料を、1) 素材、2) 痕跡、3) 法量の3項目について観察、測定を行った。

1) 素材 素材となっている陶器は、擂鉢が15点と最も多く、壺が3点、瓦と火鉢が各1点を数え、いずれも器厚が比較的厚い器種が用いられている。転用されている陶器の部位には口縁部(172)、体部(163~175・178~182)、底部(176)がある。これらの陶器の産地は、瀬戸窯産13点、瀬戸美濃窯産5点、常滑窯産は1点、生産窯不明1点であった(第25図)。またこれらの所属時期も、168が大窯期に属する以外は、すべて近世(速房窯期)に属する。

2) 痕跡 使用された陶器片の面を6区画に設定し(第26図)、擦られた痕跡の有無を観察した。その結果、6面すべてに痕跡をもつ土器は見られなかった。5面に痕跡が見られたのは3点で、以下



第25図 転用土器割合



第26図 擦り痕を有する土器部位名称

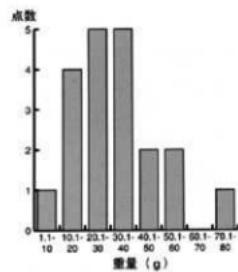
遺物番号	擦り痕部位
163	C
164	F
165	A・D・F
166	A・B・D・E・F
167	F
168	B
169	A・B
170	B
171	A・C
172	A
173	A・B・C・D・F
174	B・F
175	A・B・F
176	A・B・C・D・F
177	C・F
178	A・C・D
179	A・F
180	B・C
181	A
182	B・C・D・F

#### 残存部位

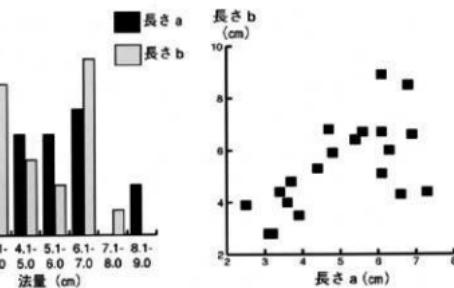
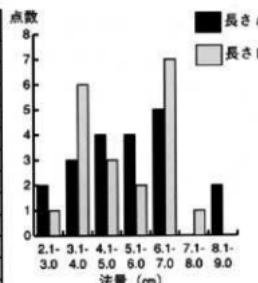
面数	点数
1面	7
2面	6
3面	3
4面	1
5面	3
6面	0
計	20

#### 残存面数

第9表 擦り痕残存状況一覧表

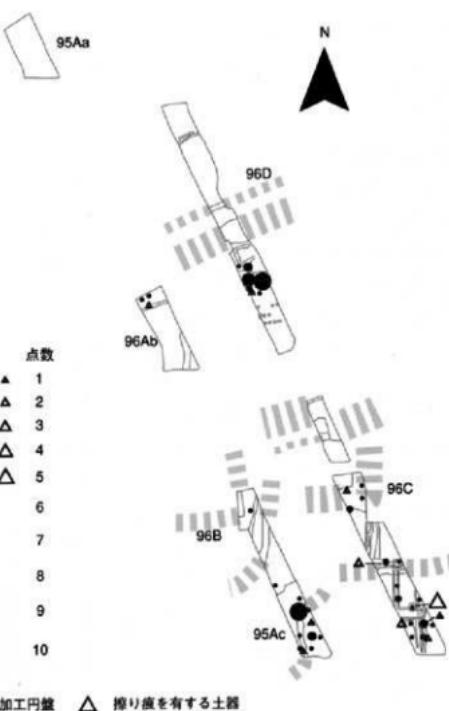


第28図 擦り痕を有する土器  
重量分布図



法量分布図

第27図 擦り痕を有する土器法量図



第29図 加工円盤・擦り痕を有する土器出土分布図 (1:2000)

4面1点、3面3点、2面7点、1面6点である。陶器の表面にのみ擦り痕が見られるのは167だけで、それ以外のものは側面のいずれかに擦り痕が見られた（第9表）。

3) 法量 長さ・重量について測定した。資料のほとんどは不整形であるため、長さについては、使用されている陶器片の上下位置を定めたのち、最長辺をそれぞれ基準線とし、基準線に平行する線間の最大値を長さa、直交する線間の最大値を長さbとした。重量測定は電子計量器を使用し、小数点第一位を有効数値とした。

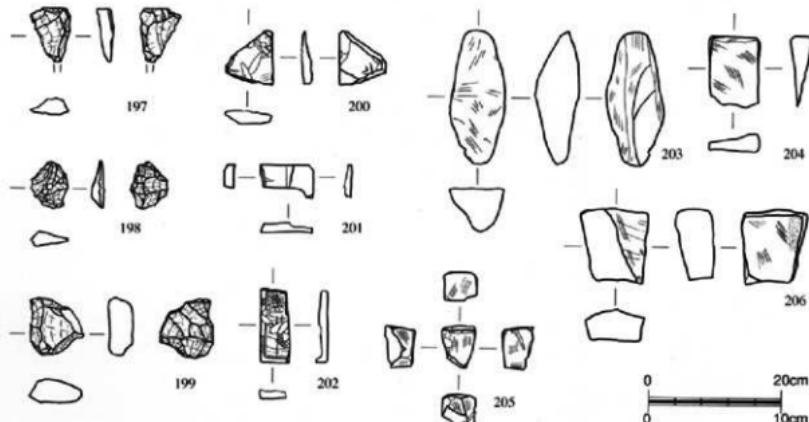
「擦り痕を有する土器」の長幅比（長さa／長さb）は1.07であるが、長さbでは3.1～4.0cmと6.1～7.0cmとにピークが見られる（第27図）。また重量では、20g～40gの間に全点数の半数が集中している（第28図）。

これらは、C期の居住区域と見られるC区の溝や井戸などから多く出土しており（第29図）、また素材として使用されている陶器の時期から、近世（連房窯期）に属すると見られる。

陶器の破片に二次的な加工痕が見られる点では加工円盤と同様であるが、加工円盤が陶器片の周縁を打ち欠いて円形状に成形を行っているのに対し、「擦り痕を有する土器」では規格化した形状には整えられず、擦られている箇所あるいは面数もバラバラで統一性は見られない。このことから、企画性をもって二次的な加工を受けたとは考えにくい。また擦り痕が器厚の比較的厚い陶器にのみ見られることなどから、使用される陶器についてはある程度の選択がなされていたと思われる。したがって、適当な大きさの破片を砥石のような擦り道具として用いられたと考えられる。

#### D 陶丸・土玉（第24図 183～185）

球状に成形された灰釉系陶器質の製品である陶丸は、2点（183・184）出土した。大きさは直径2.3cmほどで、重量はともに11.9gであった。土師質の土玉（185）は、2点出土した。大きさは陶丸とさほど変わらないが、重量は陶丸の約1/2となる。



第30図 石製品実測図（197～199は1:2、そのほかは1:4）

#### E 土錘（第24図 186～188）

出土した3点の土錘は、いずれも土師質の管状土錘である。孔径は、186が0.5mm未満とやや狭い。また重量は、いずれも10g未満と軽量である。

#### F 土鈴・土人形（第24図 189～196）

土鈴は調査区全体で8点出土したが、いずれも破片である（189～194）。紐部分の残片が、巾着状にたたみ込まれるもの（189）、角状に振り上げられるもの（192）、方形を呈するもの（193）、とにかく分けられることから、複数の形態があったと見られる。（紐の分類については『清洲城下町遺跡V』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第54集に依った）

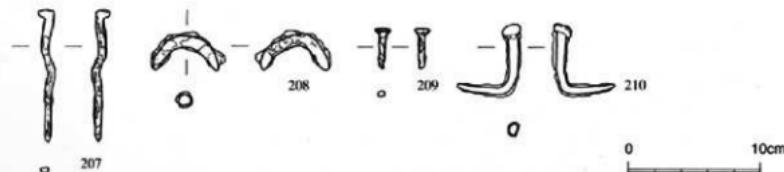
土人形は2点出土した。195は鳥を象ったもので手捻りで成形されている。196は亀を象ったもので型成形後、裏面を指オサエ調整している。

#### G 石製品（第30図 197～206）

今回の調査で出土した石製品は石器を含めて14点である。石材の材質鑑定はすべて肉眼でおこなった。197は下呂石製の石錐の頭部、198は縁辺に微小剥離が認められるチャート製の剥片石器である。199は焼石で、表面観察から養老山系で産出されるチャートである。D区SD01から出土した。200～202は96C区から出土した硯で、石材はいずれも凝灰質泥岩である。203～206は砥石で、いずれにも各面に使用痕が顕著に見られる。B区から出土した203は凝灰質泥岩で、被熱痕跡が見られる。C区から出土した204は凝灰質泥岩、205・206は凝灰岩である。

#### H 金属製品（第31図 207～210・図版17 211～216）

207～210は、いずれも鉄製の釘である。208は、その形状から、鎧のようなものと見られる。銅製錢貨は6点出土した。このうち、錢種が特定できるのは3点で、211は「祥符元寶」、212は「元符通寶」、213は「寛永通寶」である。211と212は、本来の初鋤年が中国の北宋時代（1008年と1098年）であることから、中世に流通した輸入錢であろう。214は欠損が著しく、また215、216は同種の銅錢である。いずれも錢種を特定することはできなかった（215・216は「□元通寶」と読めるか）。216は埋没環境によって2枚の銅錢が重なり合ってしまっている。これらの錢貨は、検出段階での出土であるため詳細は不明であるが、中世のある時期からこの付近でも貨幣が使用（流通）されていたことを窺わせるものといえる。



第31図 金属製品実測図

## 第IV章 自然科学分析

### 第1節 毛受遺跡及び、周辺の遺跡出土の中世土師器の 蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

#### 1. はじめに

伊勢の斎宮近くにある北野遺跡には古代の土師器窯跡が多数発見されている。ここから出土する土師器は変を大量に分析した結果、窯跡出土須恵器や埴輪と同様、K-Ca、Rb-Srの両分布図で集中して分布することがわかった。このことは窯生産で古代土器を集中して焼成する場合には、素材粘土も一定の場所で集中して採取していることを示唆している。

ところが、一般的に、消費遺跡から出土する土師器を胎土分析すると、かなりばらつく場合が多い。このことは須恵器に比べて手軽に製作が出来る土師器は製作している場所も多く、あちこちから供給されるためであろうと推察してきた。しかも、ほとんど場合、製作場所（窯跡）は残っていないので、土師器の产地問題の研究はきわめて難しい、中世の土師器といえども、同様である。

しかし、元素分析のデータから何も情報が得られないかというと、そうではない。同時期の近辺の遺跡から出土する土師器の胎土を比較することによって、少しはあるが土師器の生産と供給に関する情報は得られる。

このような考え方から、毛受遺跡から出土した中世は時期の分析データと比較し、その生産と供給について考察した結果について報告する。

#### 2. 分析結果

今回分析した全資料の分析値は表1にまとめられている。このデータに基づいて、K-Ca、Rb-Srの両分布図を作成し、各遺跡出土土師器の化学特性を比較していく訳であるが、どの遺跡の土師器を比較対照資料に選択するかである。ここでは分析資料数のもっとも多い、毛受遺跡の土師器を対照資料とすることにした。そこで、毛受遺跡の土師器が両分布図で集中して分布し、まとまるかどうかである。図33には毛受遺跡の土師器の両分布図を示す。T-6、8の2点を除いて他の土師器はまとまって分布しており、同質の胎土を持つ土師器と考えられる。これらをすべて包含するようにして、毛受領域を描き、比較対照のための領域とした。表9をみると、T-6はNa因子でも他の土師器と異なっており、外部からの搬入品である可能性を持つ。T-8もCa、Sr量が少ないと異質の胎土である。そうすると、他の13点の土師器はNa、Fe因子でも類似しており、同一产地の製品であると考えられる。ロクロ成形、非ロクロ成形の技法の問題は胎土には無関係のようである。同じと

ころで両方の技法で土師器を製作したと推察される。このようにして、毛受遺跡の土師器は大部分のものが技法に関係なく同じ胎土をもつところから、比較対照のための資料としては適していることがわかる。もし、これらがまとまらずに、ばらばらに分布すると、つまり、あちこちから持ち込まれた土師器の集団であると、とても比較対照の資料としては使えないくなるからである。次に、同時期の他の遺跡から出土した土師器の胎土を毛受遺跡のものと比較してみた。

図34には大毛池田遺跡出土土師器兩分布図を示す。毛受領域内に分布するものは1点もないことがわかる。したがって、大毛池田遺跡の土師器は毛受遺跡の土師器とは別の場所で製作されたものであると考えられる。T-18を除く、他の4点の土師器の胎土は類似しており、同一産地の製品である可能性が高い。しかし、T-18はNa因子でも他の4点とは異なっており、別産地の製品であろう。この遺跡でも、ロクロ成形、非ロクロ成形の土師器形成技法は胎土とは関係がないことがわかる。

次に、16世紀前半と推定される岩倉城遺跡出土土師器の兩分布図を図35に示す。すべての資料はよくまとまって分布しており、同一産地の製品であることを示している。しかも、ほとんどの資料が毛受領域に分布しており、Na, Fe因子でも毛受毛受遺跡出土土師器胎土に類似しているところから、その産地は近接しているものと推察される。

次に、清洲城下町遺跡(T-63E(以下、清洲城下町遺跡63Eと表記)出土の土師器の兩分布図を図36に示す。T-27, 29の2点を除く3点の資料(T-26, 28, 30)は全因子で類似しており、同一産地の製品である。T-26は非ロクロ成形であり、T-28, 30はロクロ成形である。ここでも、ロクロ成形の技法は胎土とは無関係である。そして、同一産地の製品とみられるT-26, 28, 30の3点は、兩分布図で毛受領域に分布するのみならずNa, Fe因子でも類似していることから、毛受遺跡の主成分の土師器と同じところで製作された土師器である可能性がでてきた。なお、No.27にはFe量が多く、T-29と同質の胎土であるとは言い難い。

図37には清洲城下町遺跡90C出土土師器の兩分布図を示す。T-31, 32とT-33, 34, 35はそれぞれ別々に分かれてまとまって分布する。T-31, 32は非ロクロ成形の土師器であり、T-33, 34, 35はロクロ成形の土師器である。この場合は技法と胎土が関係があることになる。

T-31, 32はNa因子でも類似しており、なおかつ、毛受領域によく対応する。したがってT-31, 32は清洲城下町遺跡63EのT-26, 28, 30とともに、毛受遺跡の主成分の土師器と同一産地の製品である可能性を持つ。また、T-33, 34, 35のロクロ成形土師器は同じ清洲城下町遺跡63EのT-29のロクロ成形土師器と全因子で類似しており、同一産地の製品である可能性が高い。

図38には名古屋城三の丸遺跡から出土した中世土師器の兩分布図を示す。Ca, Srの少ないT-37, 39とCa, Sr量がやや多いT-36, 38, 40の2群に分かれる。Na, Fe因子にもその傾向がある。両群とも毛受領域には対応しない、別産地の製品である。

Ca, Sr, Na, Fe量が少ないのは猿投窓群の須恵器の化学特性であり、同系統の粘土を使ったすると、T-37, 39は名古屋市内の製品ということになる。No.37はロクロ成形であり、T-39は非ロクロ成形であることから、この場合も、技法と粘土とは無関係であるということになる。

次に、年代が少し古い、15世紀代半ばと推定される郷上遺跡出土土師器の兩分布図を図39に示す。いずれも、毛受領域には対応しない。T-41, 44, 45の3点は全因子で類似しており、同一産地の製品である。したがって、少なくとも、3ヶ所の製品があることになる。しかし、いずれも技法

はロクロ成形である。

最後に、16世紀前半～後半と推定される吉田城遺跡出土土師器の両分布図を図40に示す。

T-49, 50とT-47の3群に分かれ、別々の3ヶ所から供給された土師器と考えられる。

須恵器に比べて手軽に作れる土師器はあちこちで製作されたものと推察される。したがって、1つの遺跡にはあちこちの製品が出土することは容易に理解できる。今回分析した遺跡の中でも、胎土が単色であったのは岩倉城遺跡のみで、他の遺跡からは2～3色の胎土が検出された。その場合、同時期の近接した遺跡からは同質の胎土をもつ土師器が出土することも十分に考えられる。清洲城下町遺跡63E出土のT-29と同じ清洲城下町遺跡90C出土のT-33, 34, 35が同質の胎土であり、同じところで製作された土師器があることを立証したのがその例である。

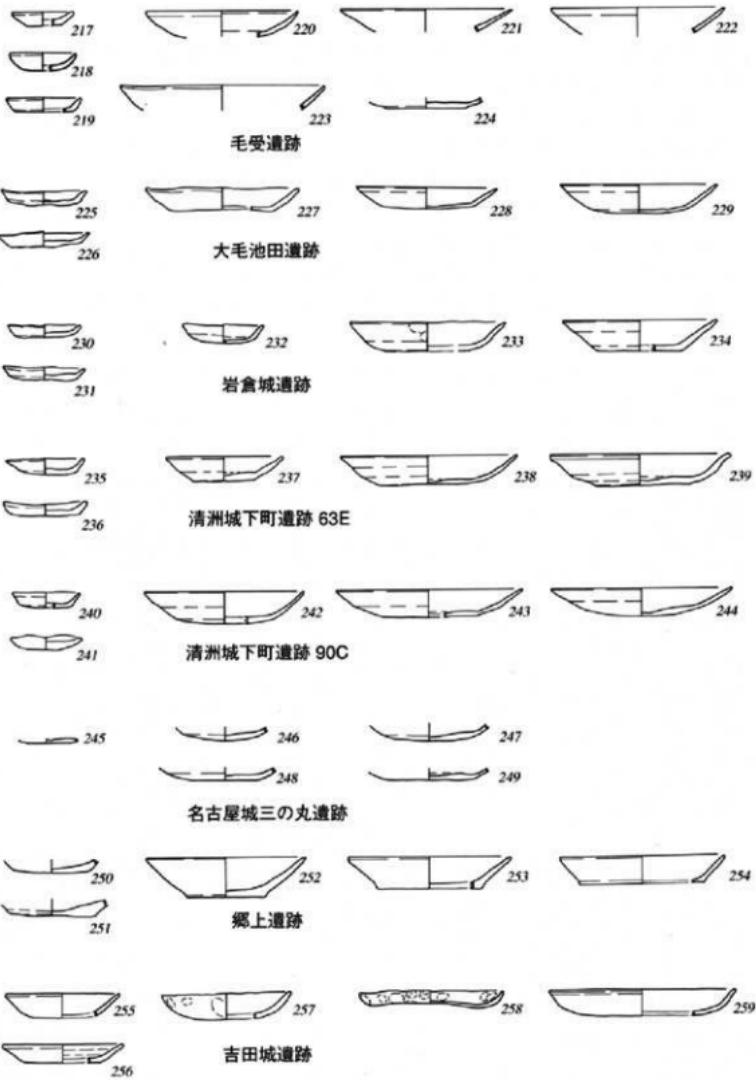
他方、ロクロ成形、非ロクロ成形の技法は一般に、胎土とは無関係であることを今回のデータは示した。

1遺跡から数点の資料抽出、合計8遺跡から出土した土師器の分析データから引き出された情報は以上の通りである。このようなデータを今後も集積していくことによって、中世土師器の生産と供給について、もう少し詳しい情報は引き出せるものと期待される。

遺跡番号	遺跡地番	遺跡名・遺跡区分	遺跡番号	遺跡名	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	断面形状	備考
T-1	223	牛久田跡96Ca	SD016	ロクロ成形	(16.2)	—	—	15C後半～16C前半	
T-2	222	牛久田跡96Cb	SD016	ロクロ成形	(15.6)	—	—	15C後半～16C前半	
T-3	220	牛久田跡96Cc	SD016	ロクロ成形	(11.9)	—	—	15C後半～16C前半	
T-4	221	牛久田跡96Cd	SD016	ロクロ成形	(13.6)	—	—	15C後半～16C前半	
T-5	224	牛久田跡96Ce	SD017	ロクロ成形	—	—	(6.4)	15C後半～16C前半	
T-6	218	牛久田跡96Cf	SD017	三クロ口成形	(5.7)	(1.4)	—	15C後半～16C前半	
T-7	219	牛久田跡96D	SD001	四クロ口成形	(5.0)	(1.1)	(5.0)	15C後半～16C前半?	
T-8	217	牛久田跡96D	SD006	四クロ口成形	(4.6)	(1.1)	(2.8)	15C後半～16C前半	
T-9	17	牛久田跡96D	SD011	四クロ口成形	(5.6)	1.0	4.1	15C後半～16C前半?	
T-10	69	牛久田跡96D	SD001	四クロ口成形	—	—	(1.1)	15C後半～16C前半	
T-11	37	牛久田跡96D	SD001	四クロ口成形	(5.0)	—	4.2	15C後半～16C前半	
T-12	19	牛久田跡96D	SD016	ロクロ成形	(12.4)	2.2	5.9	15C後半～16C前半	内面保付
T-13	40	牛久田跡96Ca	SD016	四クロ口成形	(6.2)	1.0	(5.0)	15C後半～16C前半	
T-14	44	牛久田跡96Ca	SD018	三クロ口成形	(7.0)	0.9	(4.2)	15C後半～16C前半	
T-15	45	牛久田跡96Ca	SD016	四クロ口成形	6.8	0.9	5.1	15C後半～16C前半	
T-16	225	大河内田跡96H4j	SD001	三クロ口成形	(6.7)	1.2	(5.2)	15C後半～16C前半	
T-17	226	大河内田跡95Ma	SD002	四クロ口成形	7.0	1.2	5.7	15C後半～16C前半	
T-18	227	大河内田跡96H4j	SD001	三クロ口成形	(11.6)	(1.6)	(8.0)	15C後半～16C前半	
T-19	229	大河内田跡95Ma	SD002	四クロ口成形	(12.4)	2.3	(7.4)	15C後半～16C前半	
T-20	228	大河内田跡96H4g	SD005	四クロ口成形	(11.2)	1.7	(7.1)	15C後半～16C前半	
T-21	230	大河内田跡96H4a	SD003	四クロ口成形	5.4	1.0	5.6	15C後半～16C前半	ほぼ保付
T-22	230	大河内田跡96H4a	SD003	四クロ口成形	—	1.0	—	15C後半～16C前半	
T-23	241	大河内田跡96H4a	SD003	四クロ口成形	(6.4)	(1.5)	(5.2)	15C後半～16C前半	
T-24	224	大河内田跡96Ba・B	SD003	四クロ口成形	(12.2)	(2.5)	(6.7)	15C後半～16C前半	
T-25	233	大河内田跡96Ba	SD003	四クロ口成形	(12.3)	(2.3)	(6.6)	16C前半	
T-26	236	清洲城下町遺跡63E	SD136	四クロ口成形	6.4	1.2	5.3	15C後半～16C前半	
T-27	235	清洲城下町遺跡63E	SD136	四クロ口成形	6.0	1.3	4.5	15C後半～16C前半	
T-28	237	清洲城下町遺跡63E	SD136	四クロ口成形	9.2	1.9	5.0	15C後半～16C前半	
T-29	238	清洲城下町遺跡63E	SD136	四クロ口成形	14.0	2.2	7.8	15C後半～16C前半	
T-30	239	清洲城下町遺跡63E	SD136	四クロ口成形	14.3	2.8	7.8	15C後半～16C前半	
T-31	241	清洲城下町遺跡90G	NR4001	四クロ口成形	6.6	1.2	4.6	15C後半～16C前半	
T-32	240	清洲城下町遺跡90G	NR4001	四クロ口成形	(7.9)	1.2	(5.9)	15C後半～16C前半	
T-33	243	清洲城下町遺跡90G	NR4001	四クロ口成形	(12.8)	(2.8)	(5.9)	15C後半～16C前半	
T-34	243	清洲城下町遺跡90G	NR4001	四クロ口成形	(15.0)	(2.9)	(7.6)	15C後半～16C前半	
T-35	244	清洲城下町遺跡90C	NR4001	四クロ口成形	(14.4)	(2.2)	8.0	15C後半～16C前半	
T-36	246	名古屋城三の丸遺跡91	SD041	四クロ口成形	—	—	5.6	16C第3回半期	
T-37	246	名古屋城三の丸遺跡91	SD041	四クロ口成形	—	—	(5.0)	16C第3回半期	
T-38	249	名古屋城三の丸遺跡91	SD041	四クロ口成形	—	—	(7.0)	16C第3回半期	
T-39	247	名古屋城三の丸遺跡91	SD041	四クロ口成形	—	—	(7.0)	16C第3回半期	
T-40	245	名古屋城三の丸遺跡91	SD041	四クロ口成形	—	—	4.0	16C第3回半期	
T-41	251	繩文土器27A	SD0011	四クロ口成形	—	—	7.0	15C半ば	内面保付
T-42	250	繩文土器27A	SD0011	四クロ口成形	—	—	6.0	16C第3回半期	
T-43	252	繩文土器27C	SD48YT	四クロ口成形	(12.6)	3.1	—	15C半ば	
T-44	253	繩文土器27C	SD48YT	四クロ口成形	(12.6)	(3.8)	(8.8)	15C半ば	
T-45	264	繩文土器27C	SD48YT	四クロ口成形	(12.2)	(2.7)	(8.9)	15C半ば	
T-46	268	吉田城遺跡90	SD102	四クロ口成形	(16.4)	1.4	8.9	16C前半～後半	
T-47	269	吉田城遺跡90	SD102	四クロ口成形	(14.8)	—	(13.0)	16C前半～後半	
T-48	266	吉田城遺跡90	SD102	四クロ口成形	(10.4)	—	—	16C前半～後半	
T-49	266	吉田城遺跡90	SD102	四クロ口成形	(9.6)	—	—	16C前半～後半	
T-50	265	吉田城遺跡90	SD102	四クロ口成形	(9.2)	—	—	16C前半～後半	

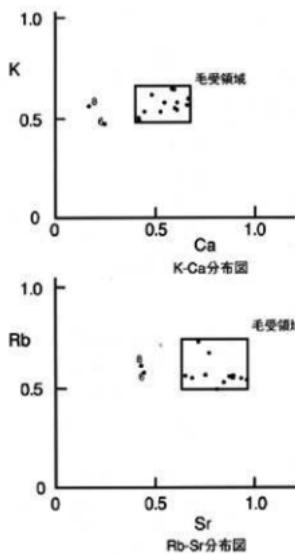
第10表 蛍光X線分析データ一覧表

\* ( ) は推定値

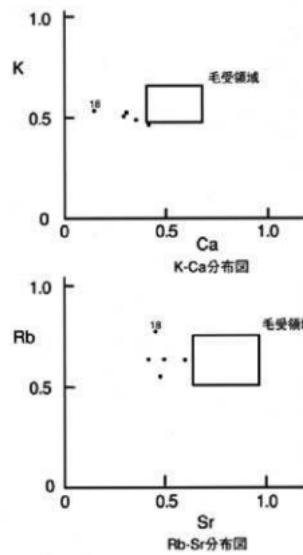


0 20cm

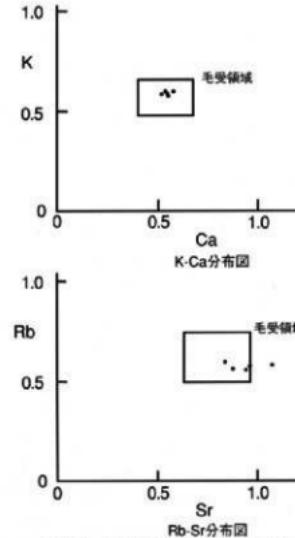
第32図 土師皿分析資料



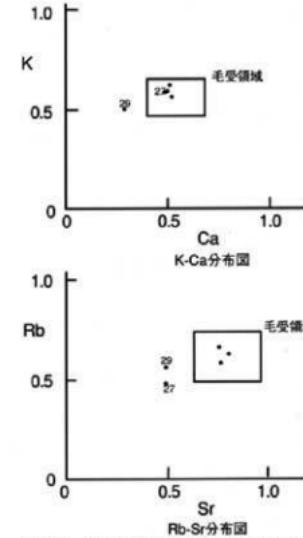
第33図 毛受遺跡出土土師皿の両分布図



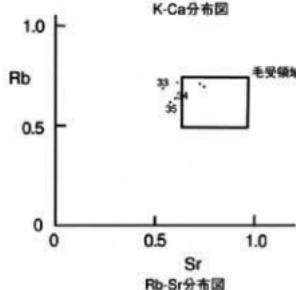
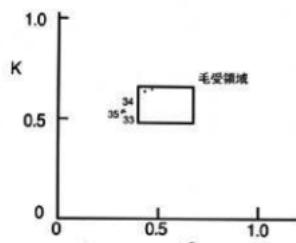
第34図 大毛池田遺跡出土土師皿の両分布図



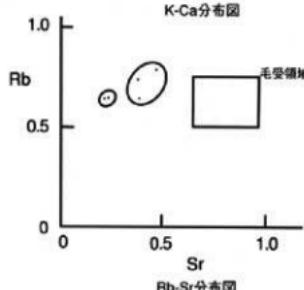
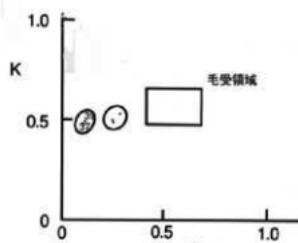
第35図 岩倉城遺跡出土土師皿の両分布図



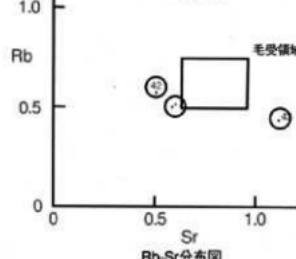
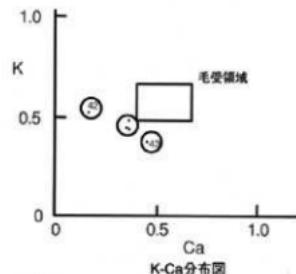
第36図 清洲城下町遺跡(T63E)出土土師皿の両分布図



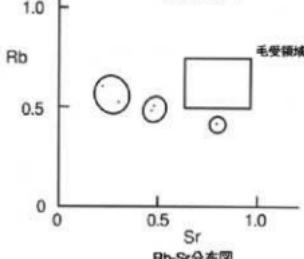
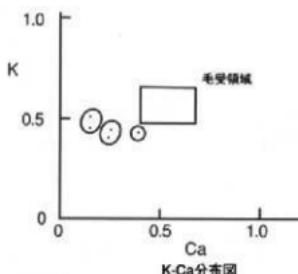
第37図 清洲城下町造跡90C出土土師皿の両分布図



第38図 名古屋城三の丸道路遺跡出土土師皿の両分布図



第39図 郷上遺跡出土土師皿の両分布図



第40図 吉田城遺跡出土土師皿の両分布図

## 第2節 毛受遺跡の堆積土珪藻分析

毛受遺跡では今から約500年前の室町時代後期に、いくつかの屋敷地（居館）とそれらを取り囲む居住域の存在が推定されている。その区画溝のひとつを埋積する堆積物中の珪藻微化石分析を行ない、当時の自然環境について考察を加えたいと思う。なお、試料は96D区より検出された区画溝であるSD06より採取した。また、本試料を用いて昆虫遺体分析も行なっている（第3節）。

**珪藻分析方法** 乾燥重量1gをトールビーカーにとり、過酸化水素水（35%）を加えて煮沸し、有機物の分解と粒子の分散を行なった。岩片除去のち、水洗を4～5回繰り返しながら同時に比重選別を行なった。分離した試料を希釈し、マウントメディア（和光純薬製）にて封入した。検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用し、各試料とも200個体の珪藻殻を同定した。珪藻の同定についてはKrammer & Lange-Bertalot(1986, 1988, 1991a, 1991b)を参考にした。

**分析結果** 試料中より出現した珪藻遺骸は22属50種（1変種を含む）であった。そのリストを第11表に示す。試料全体についてみると、pHに対する適応性では不定性種の占める割合が48%と高く、次いで真・好酸性種が26.5%、好アルカリ性種が22.5%であった。水流性については不定性種が63%と最も多く、真・好流水性種が28%、真・好止水性種が6%であった。生態性では底生種と付着生種が多産し、底生種が56.5%、付着生種が41.5%を占めた。塩分に対する適応性では94%が不定性種で占められた。多産した種として底生種の*Navicula radiosa*が16.5%、真酸性種・好流水性種・底生種の*Gyrosigma acuminatum*が13%、好アルカリ性種・流水不定性種・底生種の*Pinnularia gibba*が7%を占めた。

**考察** 約500年前、室町時代後期の屋敷地を区画する溝内試料の珪藻微化石分析を行なった。試料から珪藻化石が多産することと、*Hantzschia amphioxys*などの陸生珪藻とよばれる耐乾性種群の出現頻度が低いことから考えて、溝内は水の関与する環境であったことがわかる。また、本遺構が絶えず帶水し、放棄されるまでその幅と深さにはほとんど変化がなかったと仮定すれば、水域の表層に浮遊する浮遊性珪藻の多産が期待される。ところが、遺構から検出される珪藻化石は*Navicula radiosa*、*Gyrosigma acuminatum*などの底生種が多産した。これは試料採取層準において、かなり水深が浅くなっていたことを示すものである。また、*Fragilaria ulna*や*Cymbella*属、*Eunotia*属といった付着生種も底生種に次いで多く確認される。珪藻の付着基物となる植物が、溝内に繁茂していた事実を示すものである。以上のことから、居館を区画する溝は、少なくとも試料採取層準において、比較的水深が浅く水生植物が繁茂する環境であったと推定される。また、同じ試料をもとに行なわれた昆虫遺体分析から、ゲンゴロウやマメガムシといった水生昆虫がみつかる事実とも矛盾しない。

## 文献

- Krammer, K., and Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae, Band 2/I von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K., and Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Suriellaceae, Band 2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K., and Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariae, Eunotiaceae, Band 2/3 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K., and Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergaezungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema, Band 2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 248p.

学名	pH	淡水性	形態性	種分	96D SD96
<i>Achnanthus convergens</i> Kobayasi	Ind	Ind	Epip	Ind	2
<i>Achnanthus linearis</i> (W. Smith) Grunow	Ind	Ind	Epip	Ind	2
<i>Achnanthus minitissima</i> Kutzing	Ind	Ind	Epip	Ind	3
<i>Actinella brasiliensis</i> Grunow	Ac-ph	Li-ph	Epip	Ind	1
<i>Anaphora lytica</i> Ehrenberg	Al-ph	Ind	Bent	Ind	1
<i>Anomoeocystis brachysira</i> Pfizer	Ind	Ind	Bent	Ind	2
<i>Caloneis siccifolia</i> (Ehrenberg) Cleve	Ac-ph	Ind	Bent	Ind	2
<i>Caloneis</i> sp.	-	-	-	-	1
<i>Cocconeis pinnata</i> Ehrenberg	Al-ph	Ind	Epip	Ind	2
<i>Cymbella acuta</i> (Ehrenberg) Cleve	Al-ph	Ind	Epip	Ind	2
<i>Cymbella leptocerina</i> (Ehrenberg) Kutzing	Ind	Li-ph	Epip	Ind	1
<i>Cymbella minutissima</i> Hildebrand	Ind	R-ph	Epip	Ind	6
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald	Ind	Ind	Epip	Ind	4
<i>Cymbella rotundata</i> Grunow	Ind	R-ph	Epip	Ind	7
<i>Cymbella stellata</i> Bleisch	Ind	Ind	Epip	Ind	4
<i>Dinema mesodon</i> (Ehrenberg)	Al-ph	Li-ph	-	Ind	1
<i>Djirkensia ovalis</i> (Hilse) Cleve	Ind	Ind	Bent	Ind	2
<i>Epithemia</i> sp.	-	-	-	-	1
<i>Epithemia rugosa</i> (Ehrenberg) Kutzing	Al-ph	Li-ph	-	Ind	1
<i>Eunotia fumaria</i> Trebosc	Ac-ph	Ind	Epip	Hp-bo	2
<i>Eunotia pectinata</i> var. <i>minor</i> (Kutzing) Rabenhorst	Ac-ph	Ind	Epip	Hp-bo	2
<i>Eunotia praeputia</i> Ehrenberg	Ac-ph	Ind	Epip	Hp-bo	1
<i>Fragilaria acuta</i> (Ehrenberg) Cleve	Al-ph	R-ph	Epip	Ind	2
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch) Lange-Bertalot	Al-ph	Ind	Epip	Ind	12
<i>Fristulia vulgaris</i> (Thwaites) De Toni	Al-ph	Ind	Epip	Ind	1
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ind	Liph	Epip	Ind	5
<i>Gomphonema angustatum</i> Ehrenberg	Ind	Ind	Epip	Ind	7
<i>Gomphonema clevei</i> Fricker	Al-ph	R-ph	Epip	Ind	3
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ind	Li-ph	Epip	Ind	1
<i>Gomphonema parvulum</i> Kutzing	Al-ph	R-ph	Epip	Ind	9
<i>Gyrosigma acuminatum</i> (Kutzing) Rabenhorst	Ac-bi	R-ph	Bent	Ind	26
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehrenberg) Grunow	Al-ph	Ind	Bent	Ind	1
<i>Navicula americana</i> Ehrenberg	Ind	Ind	Bent	Ind	4
<i>Navicula capitata</i> Ehrenberg	-	-	Bent	Ind	1
<i>Navicula cryptolepta</i> Kutzing	Al-ph	Ind	Bent	Ind	2
<i>Navicula elginiensis</i> (Gregory) Ralfs	Al-ph	R-bi	Bent	Ind	3
<i>Navicula levissima</i> Kutzing	Ind	Ind	Bent	Ind	2
<i>Navicula radiosa</i> Kutzing	Ind	Ind	Bent	Ind	33
<i>Navicula rynchcephala</i> Kutzing	Al-ph	Ind	Bent	Ind	1
<i>Neckium amplifolium</i> (Ehrenberg) Krammer	Ind	Ind	Bent	Ind	4
<i>Nitzschia levidensis</i> (Wm. Smith) Van Heurck	-	-	-	Mehn	1
<i>Nitzschia palea</i> (Kutzing) Grunow	Ind	Ind	Bent	Ind	2
<i>Pinnularia acroscapha</i> W. Smith	Ind	Ind	Bent	Ind	1
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ind	Ind	Bent	Ind	1
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ac-ph	Ind	Bent	Ind	14
<i>Pinnularia intertexta</i> W. Smith	Ind	Ind	Bent	Ind	1
<i>Pinnularia microstoma</i> (Ehrenberg) Cleve	Ac-ph	Ind	Bent	Ind	4
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ind	Li-bi	Bent	Ind	2
<i>Rheopoldia gibberula</i> (Ehrenberg) O. Muller	Al-ph	Ind	Epip	Ha-ph	1
<i>Suriella crassa</i> Kutzing	Al-ph	Ind	Epip	Mehn	1
<i>Suriella</i> sp.	-	-	Bent	Ind	2
<i>Tabelaria fenestrata</i> (Lyngbye) Kutzing	Ac-ph	Ind	Epip	Ind	1
Total	-	-	-	200	

第11表 硅藻分析結果

### 第3節 毛受遺跡の昆虫群集－500年前の夏の夜のできごと

森 勇一（愛知県立明和高等学校）

はじめに

ここに一枚の昆虫リストがある。それは、木曾川の支流・日光川上流部に存在したとされる一宮市毛受遺跡の室町時代後期の区画溝（SD06という）から発見されたものである。室町時代後期というと、応仁の乱（1467～1477年）で京都が荒れ放題になり、日本各地に戦国大名が登場しつつあった頃のことだ。今から遡ることおよそ500年前、濃尾平野の一角にどんな昆虫がいて、人々は虫にどんな想いを抱いていたのだろうか。分析方法や昆虫群集の解析のしかたなどは、これまで筆者が書いてきたものを見ていたくとして、昆虫の特性と見いだされた昆虫群集が語る毛受遺跡付近の情景について述べてみよう。

虫が有効な  
わけ

虫にも色々なものがいる。昆虫の住みか（生息環境）は水中・地表面・植物上など多岐にわたり、食べ物（食性）では、植物の葉や根のみならず樹液を吸ったり、花粉を失敗したり、動物食では腐肉や動物の糞などのほか、他の虫を捕食したりその体液を吸うものもいる。昆虫化石の場合、昆虫が生息していた場所からあまり移動することなく見つかるケースが多いことから、当時の環境を推定するのに都合がよい。土の中から発見された昆虫の種がわかると、昆虫が生活していた場所の環境が手にとるようにわかるってわけだ。

多くの昆虫は、植物の葉を食べて生活している。植物は、大切な光合成器官である葉を食べられたくないから、葉に毒を盛ったり味をまずくしたり、さまざまな忌避物質を身につけて防衛している。この過程で、有毒物質を解毒する酵素を身につけた特定の昆虫のみが、ある種の植物の葉を食べることを許されたのである。このため食植性昆虫に注目することにより、そこに存在したホストプランツを推定することができるのだ。

生えていた植 最も多く産出したヒメコガネ、これは成虫が各種広葉樹の葉を、幼虫が主に大豆はじめ各種畑作物の葉を推定する根を加害する人里昆虫の代表種だ。ヒメコガネは、マメ科植物やブドウ・カキなど、多くの植物の葉を食べる広食性昆虫のため、本種の存在だけでそこに生えていた植物を特定することはできない。つぎに多いサクラコガネ属・ドウガネブイブイなどを含めて考えると、毛受遺跡周辺に畑作物が植栽されていたことは明らかだ。これらの推定は、中世のころ、毛受遺跡近傍の一宮市大毛沖・大毛池田両遺跡などから得られた昆虫組成ともよく一致している。畑作地に多いセアカヒラタゴミムシ・ハネカクシ科・マダラコガネなどの地表性歩行虫の産出は、こうした推定をさらに補強する。ハムシ科の中のダイコンハムシは、成虫・幼虫とともにダイコンや白菜など、アブラナ科植物の害虫として知られ、クリハムシはクリの葉を好んで食べることから、いずれもホストプランツの推定に役立つ。

このほか、クロコガネ・クロカミキリ・ノコギリカミキリ・スジコガネは、アカマツ林に多い昆虫であり、毛受遺跡周辺にアカマツが生えていたことがわかる。また、ヤナギルリハムシはヤナギの葉を加害するハムシとして有名であり、ほかにヤナギに由来する昆虫にアカアシクワガタ・ヒゲコガネなどが見つかった。コカブトムシやクロコガネ・クリハムシの出現は、遺跡付近に朽木が存在したことを示している。こうしていくつかの食植性昆虫の名を列挙するだけで、毛受遺跡付近に生えていた植物を推定することができる。

灯りめがけて 昆虫群集にゲンゴロウやミズスマシ・コガシラミズムシなどの食肉性の水生昆虫と、セマルガムシ・マメガムシ・ガムシなどの食植性の水生昆虫が伴われている。いずれも水田や水田周辺の水路・水たまりなどに多い水田指標昆虫ばかりだ。食糞性のコブマルエンマコガネやマダソコガネ・コマダソコガネは、遺跡周辺に動物性の糞便が存在したことを示している。おそらく人糞だろう。

さてさて、これらがいっしょに産出したのをどう理解すべきだろうか。これには、ライトトラップという昆虫採集の経験が大いに役立つ。盛夏のころ、周囲に畑作地を控えた郊外の水田地帯に出かけ、ブラックライトを灯して夜間採集を行うと、今回得られた昆虫群集とよく似た昆虫を探集することができる。夜間採集標本にあって、毛受遺跡の昆虫群集に欠けるものがあるとすればガの仲間（鱗翅目）だけだが、これも電子顕微鏡下で土を丹念に観察すれば、ガのはねから離脱した新しい数の鱗片を識別することができるだろう。そして、この形態や構造色などから、そこに飛来したガの種類を特定することも理論上できることではない。

もう紙面がなくなった。そろそろまとめに入らなければならぬ。毛受遺跡では、盛夏のころ、屋敷地の一角に灯火が灯されていたと考えられる。その日は月のないむし暑い夜だった。多くの昆虫が灯火めがけて飛んできていた。あるものは灯火に飛び込み体を焼かれて負傷した。また、あるものは一晩中飛び続け、壁や木の枝に体をぶつけ落とした。この下にやや深い溝があり、多くの虫たちを捕捉して、やがて絶命させた。虫体のいくつかをレベルアップした名大年代測定資料研究センターのタンデロン加速器質量分析計にかけば、この虫たちが水中に落下した実年代を推定することも困難ではない。いずれにしても、これらの昆虫群集が長い間かかって蓄積されたものでないことは確かだ。せいぜい一夏か二夏のこと、あるいは一晩か二晩の夏の夜のできごとだったのかもしれない。

アドリブ 500年前の一時期、毛受遺跡付近に畑作物が植栽されていた。その中には、マメ科植物やダイコンなどのアブラナ科植物、クワが混じっていた。屋敷地周辺にアカマツが生え、水辺にはヤナギが生えていたことだろう。近くに人の生活空間が存在したもの、昆虫化石を産出した溝は生活污水が流入するような汚れた環境ではなかった。

驚くべきことでありまた当然ともいえることだが、500年前の昆虫相は、近現代において濃尾平野北西部でライトトラップ法により採集される昆虫群集と酷似しており、今日見るような昆虫相が、すでに中世後期のころ完璧なまでに完成していたのである。このことは、筆者にとって非常に新鮮な発見だった。

	和名	学名	検出部位および点数	Sum.
水 肉性	ゲンゴロウ	<i>Cybister japonicus</i> Sharp	E1.A1 2	
	ゲンゴロウ科	<i>Dytiscidae</i>	E2.A6 8	
	ミズスマシ	<i>Gyrinus japonicus</i> Sharp	E1.A1 2	
	コガシラミズムシ科	<i>Halipidae</i>	A1 1	
生 植性	コガシラミズムシ	<i>Peltodytes intermedius</i> (Sharp)	E3.A1 4	
	セマルガムシ	<i>Coelostoma stultum</i> (Walker)	P1 1	
	マメガムシ	<i>Regimbartia attenuata</i> (Fabricius)	P3.E4 7	
	ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky	L1 1	
地 食性	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	P1 1	
	コブマルエンマコガネ	<i>Onthophagus atrippennis</i> Waterhouse	E1 1	
	マグソコガネ属	<i>Aphodius</i> sp.	P1 1	
	コマグソコガネ	<i>Aphodius pusillus</i> (Herbst)	E1 1	
委 食性	マグソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)	H2.P3.E1 6	
	エンマムシ科	<i>Histeridae</i>	P4 4	
	オサムシ科	<i>Carabidae</i>	H3.P2.E4.T3.A6 18	
	セアカヒラタゴミムシ	<i>Dolichus halensis</i> (Schaller)	E1 1	
性 食履性	ゴモクムシ亞科	<i>Harpalinae</i>	H1 1	
	ハネカクシ科	<i>Staphylinidae</i>	P3.E1.A3 7	
	シデムシ科	<i>Silphidae</i>	E1 1	
		<i>Scarabaeidae</i>	H1.E1.L2 4	
陸 食性	コガネムシ科	<i>Mimela testaceipes</i> Motschulsky	E2.T1 3	
	スジコガネ	<i>Mimela splendens</i> Gyllenhal	E2.A1 3	
	コガネムシ	<i>Anomala</i> sp.	S1.P5.E6.T2.A1.L10 25	
	サクラコガネ属	<i>Anomala cuprea</i> Hope	E7.T3.A6.L5 21	
植 食性	ドウガネブイブイ	<i>Anomala rufocurea</i> Motschulsky	H3.S2.P11.E19.T1.A5.L10 51	
	ヒメコガネ	<i>Polyphylla latifollis</i> Lewis	H1.L1 2	
	ヒゲコガネ	<i>Popillia japonica</i> Newmann	H1.P1.L3 5	
	マメコガネ	<i>Holotrichia kiotensis</i> Brenske	P1 1	
生 性	クロコガネ	<i>Anomala albopilosa</i> Hope	H1.P6 7	
	アオドウガネ	<i>Rhomborrhina japonica</i> Hope	H1 1	
	カナブン	<i>Eophileurus chinensis</i> (Faldermann)	L1 1	
	コカブトムシ	<i>Elateridae</i>	A1 1	
性	コメリキムシ科	<i>Cerambycidae</i>	P1.E2.L1 4	
	カミキリムシ科	<i>Prionus insularis</i> Motschulsky	E1.L1 2	
	ノコギリカミキリ	<i>Spongiphora buprestoides</i> Linne	P1 1	
	クロカミキリ	<i>Lucanidae</i>	An1 1	
性	クワガタムシ科	<i>Nipponodorus rubrofemoratus</i>	E1 1	
	アカアシクワガタ	<i>Vollenhovenia</i>		
	ハムシ科	<i>Chrysomelidae</i>	E9.T1.L1 11	
	ヤナギルリハムシ	<i>Plagiodesma versicolora</i> Laicharting	E8 8	
その他	クワハムシ	<i>Fleutiauxia armata</i> Baly	E2 2	
	ダイコンハムシ	<i>Phaeden brassicae</i> Baly	E6 6	
	ゾウムシ科	<i>Curculionidae</i>	E2 2	
			総計	254

(検出部位凡例)

H(Head):頭部 An(Antenna):触角 M(Mandible):大歯 S(Scutellum):小橋板 P(Pronotum):前胸背板  
 C(Chrysalis):卵鞘 E(Elytron):鞘翅 T(thorax):胸部 A(Abdomen):腹部 L(Leg):腿脛節 O(Others):その他

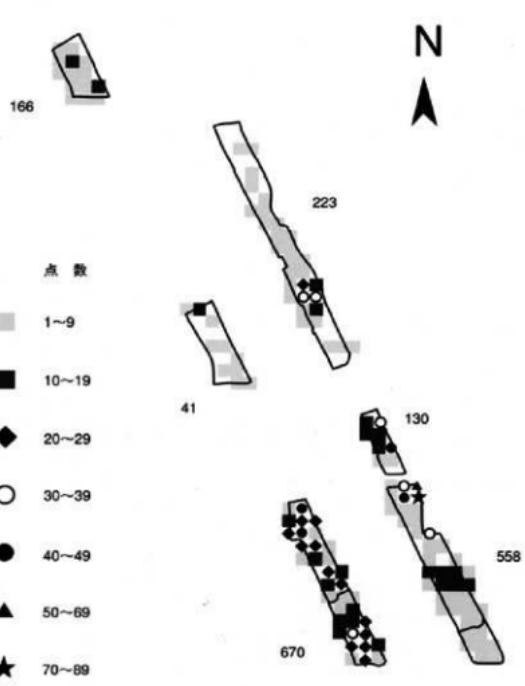
第12表 毛受遺跡から産出した昆虫化石

## 第V章 考察

毛受遺跡では古墳時代から近世にかけての遺物が出土した。そのうち所属時期が明らかな遺構は、B期とC期の各種遺構で、そのほかについては遺物のみの検出にとどまった。ここでは検出された遺構の変遷から、A期、B期、C期の各時期の毛受遺跡についてまとめていきたい。特にB期については、検出された大溝と遺跡の名称とも関わる毛受（めんじょう）城との整合性について述べていきたい。

### 1 A期の遺構・遺物の様相

C区SD19のみが戦国期以前の中世に属する溝と考えられる以外は、該期の遺構は検出されなかつた。そこで、出土した遺物から概観していくこととする。



第45図 灰釉系陶器出土分布図 (1:2000) \*数字は破片点数

各調査区からは、古墳時代前期～中期に属する古式土師器や古墳時代後期に属する須恵器、平安時代に属する灰釉陶器などが出土したが、いずれも少量であった。そのため、これらの遺物を伴う時期の遺跡の様相や、各遺物の時間的な継続性の有無については確認できないが、周辺では、少なくとも古墳時代の早い段階には人々の生活が開始されており、古代にかけても生活が営まれていたであろうと考えられる。

またカウントした結果から、本遺跡から出土した陶磁器・土器・土製品の中で、最も破片数が多い中世以前の遺物は灰釉系陶器（いわゆる山茶碗）

であり、全体の約35%を占めている。所属時期は、主にC区から出土した第5型式（13世紀前後）に属するものが、出土した中では最も古い段階に位置づけられるが、数量的には、第6型式（13世紀前半）～第11型式（15世紀半ば）までに属する、いわゆる「北部系」と呼ばれる美濃（東濃）窯産の均質手の製品が圧倒的に多く見られた。このことから、遅くとも13世紀半ば頃には、当地周辺で灰釉系陶器の流通、消費活動が行われていたと考えられる。そこで、調査区内を5m×5mのグリッドで区切り、調査区全体の中で灰釉系陶器のような出土分布状況であるのかを検討していく（第45図）。各調査区からの出土破片点数はA a区166点、A b区41点、A c区・B区670点、C区718点、D区223点であった。B期の比較的規模の大きな遺構が展開する地域（A c区・B区、C区）に重なるようにして資料数が集中している箇所が幾つか見られるが、二次堆積による覆土からの出土資料であるため、その属性を明らかにすることはできない点には、注意をしなければいけない。次に1m<sup>2</sup>から出土した割合を見ていくと、A a区0.36点、A b区0.08点、A c区・B区0.54点、C区0.39点、D区0.14点となり、A a区、A c区・B区、C区の3調査区において高い割合を示し、逆に低い割合を示したA b区、D区では分布状況もおしなべて稀薄である。これらのことから、A c区・B区からC区にかけての周辺には、中世半ばくらいの頃には集落が立地していた可能性があり、またそれに隣接する形でA a区付近にも人々の生活が営まれていた可能性が高いことが窺える。

また、毛受遺跡及びその周辺の、中世以前の各時期における動向を考えていくためには、本遺跡の南約1kmに位置し、弥生時代から中世にかけて当地域の中心的な遺跡である八王子遺跡の動向を射程に入れておく必要がある。これまでの成果から、中世から戦国期にかけての時期に、八王子遺跡の北辺から毛受遺跡方面にかけて想定される遺構の展開状況<sup>1)</sup>は、毛受遺跡での灰釉系陶器の出土のあり方とも関わる問題でもあり、留意しておかなければならぬ。

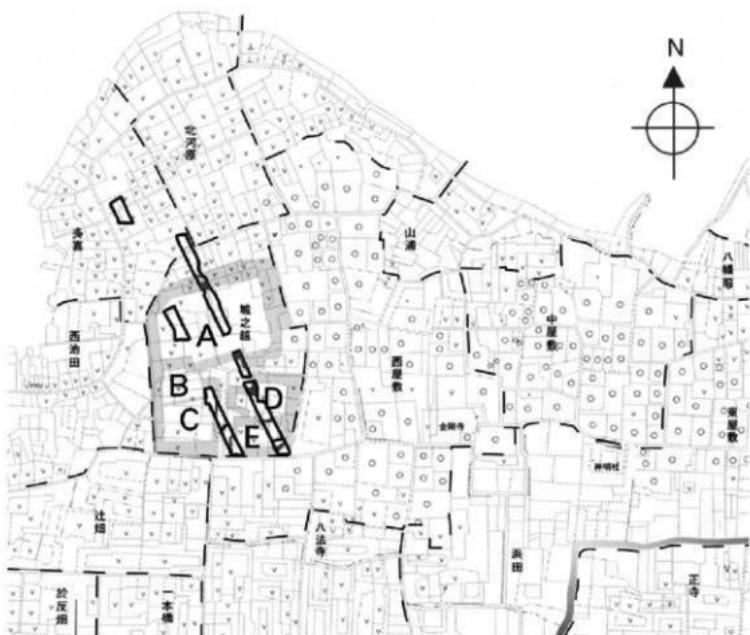
## 2 B期の遺構・遺物の様相

### A 遺構の展開

B期の遺構の特徴としては、溝により方形に区画される空間が幾つか見られるということである。検出した溝は、日光川の南流する方向する方向にはほぼ並行していることから、立地地形にいくらか規制されたためと見られる。これらはいずれも規模が大きく、特にC区SD17・SD18、D区SD06については、幅5m以上を測る大規模なもので、掘形などから清洲城下町遺跡などで見られる堀を想定させる。C区のSD17は他の溝と方向性を違えていることから、近接するSD18とは、溝を共有していた可能性もあり、また「横矢」と呼ばれる防御機能を持たせるために溝間に道を設けて分離していたとも考えられる<sup>2)</sup>。

検出された遺構を明治17年に作成された地籍図に重ね合わせた図が、第46図である。田畠の地割から、次のような各区画が復元できる。

- A C区SD18とD区SD06とを結んだ方形の区画（区画A）。
- B 調査区よりさらに西へ広がる、B区SD11により想定される区画（区画B）。
- C B区SD12を東辺として想定される区画（区画C）。



第46図 毛受遺跡 B期屋敷地割推定図(1:5000)

D C区 SD17・SD20とを結んでつくられる区画（区画D）。

E A区 SD20とC区 SD20・SD24とを結んでつくられる区画（区画E）。

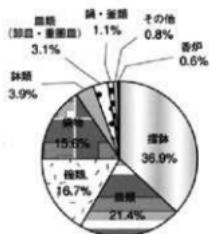
これらの区画を形成している溝からは、該期の陶器や木製品（木胎漆器椀）などが出土しており、また区画Aからは掘立柱建物が検出されていることから、これらの区画は屋敷地であったと見られる。

最も大きな区画Aは、東西約100m（1町）、南北約50m（0.5町）の規模を測る。また、当地の「城之腰（越）」という小字名が、かつての城館趾の存在を示す城館地名として有力である場合が多いとされる<sup>3)</sup>。これらの点から、区画Aには当地を治めていた領主クラスの居館の存在が想定できる。そして南に展開する幾つかの小区画には、この区画Aを主郭として、領主に服属する家臣団、もしくは職人たちの屋敷地が展開していたと考えられる<sup>4)</sup>。

#### B 遺物の様相

B期の陶器の総片数は360点（内、貿易陶磁器8点）を数え、毛受遺跡から出土した陶器類総破片数の21.6%にあたる。

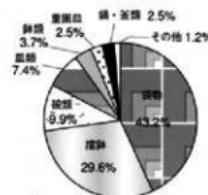
該期の遺物の様相を見てみる。まず、調査区全体から出土した陶器組成については第47図に示



総破片数

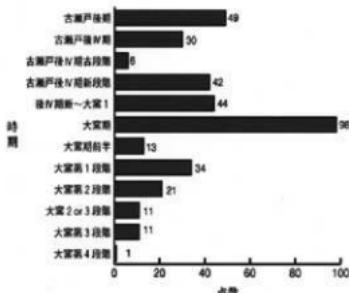


口縁部残存率

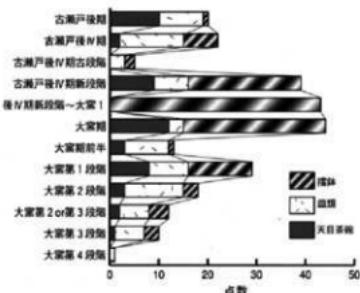


遺構出土破片数

第47図 B期遺物組成図



全体



天目茶碗・皿類・擂鉢

第48図 B期遺物数量分布図

		古瀬戸 後期	古瀬戸 後N期	古瀬戸 後N期 古窯跡	古瀬戸 後IV期 新段階	後IV期 新～大 窯I	大窯期	大窯期 前半	大窯第 1段階	大窯第 2段階	大窯第 2 or 第 3段階	大窯第 3段階	大窯第 4段階	合計
天目	点数	10	2	0	9	0	12	3	8	3	2	1	0	50
茶碗	%	20.0	4.0	0	18.0	0	24.0	6.0	16.0	6.0	4.0	2.0	0	100
皿類	点数	9	13	3	7	0	3	9	8	12	6	6	1	77
皿類	%	11.7	16.9	3.9	9.1	0	3.9	11.7	10.4	15.6	7.8	7.8	1.3	100
擂鉢	点数	1	7	2	23	43	29	1	13	3	4	3	0	129
擂鉢	%	0.8	5.4	1.6	17.8	33.3	22.5	0.6	10.1	2.3	3.1	2.3	0	100

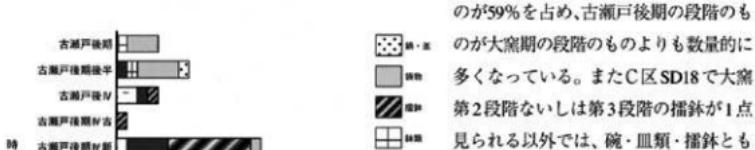
第13表 B期天目茶碗・皿類・擂鉢破片数

したとおりである。出土点数では擂鉢がもっとも点数が多く、皿類、碗類がこれに続く。口縁部残存率では、皿類が51%、擂鉢が48%と他の器類に比べて高い比率を示している。また、所属する時期別に見てみると、古瀬戸後IV期新段階～大窯I段階への過渡段階のものが14%見られ、これを境に古瀬戸後期の段階のものが41%であり、特に後IV期新段階に急激に増加している。そして大窯期の段階のものが45%であった。さらに大窯期の中でも確実に第1・第2段階ないしは前半段階に属

するものが48%であるのに対し、第2段階ないしは第3段階～第4段階までの後半段階の時期に属するものは16%であった。このことから該期の毛受遺跡では、古瀬戸後IV期～大窯期前半期にかけて1つのピークがあり、大窯期の後半段階以降は急激に衰退していく様子が読みとれる(第48図)。

次に、数量的にもまとまっていた器種である碗・皿類・擂鉢を対象としてさらに分析を行うこととする。これらは、他の同時期の遺跡からも比較的多量に、しかも普遍的に出土していることから、比較をしていく上でも有効であると思われる<sup>5)</sup>。なお、碗については出土割合の高かった天目茶碗のみを取り上げ、平碗などは除外した。皿類については縁付小皿、縁反皿、丸皿、稜皿などの小皿類とし、鉢類、重圓皿(灯明皿)などは含めない。器種別に見ると、古瀬戸後IV期新段階～大窯第1段階への過渡期段階の資料としては擂鉢しか見られなかった(33.9%)が、古瀬戸後期後半の段階では碗42.0%、皿類41.5%、擂鉢25.2%であったのに対し、大窯期では碗58.0%、皿類58.4%、擂鉢40.9%であった。また各器種とも大窯期の前半段階に比べて後半段階の方が出土率はほぼ半減しており、大窯第4段階においては皿(志野丸皿)1点のみが見られる程度である。こうした傾向は、全器種(器種)に見た場合と、ほぼ同じ様相を示している(第48図、第13表)。

遺構から出土したこれらの器種を時期別にみると、いずれも古瀬戸後IV期段階のものから出土している。特に後IV期新段階に属する擂鉢の点数が最も多いことと比例して、総計でもこの時期のものが59%を占め、古瀬戸後期の段階のものが大窯期の段階のものよりも数量的に多くなっている。またC区SD18で大窯



第49図 B期遺構出土陶器器種別数量分布

第2段階ないしは第3段階の擂鉢が1点見られる以外では、碗・皿類・擂鉢とともに大窯第1段階までのものしか見られない。

今回分析に用いた碗・小皿類・擂鉢については、「天目茶碗や小皿類に比べて、擂鉢は新しい時期のものが多く出土すること」が指摘されており<sup>4)</sup>、「使用期間が短く、城館址の存続期間に近い年代観を示すと思われる擂鉢」に注目してみると、

	古瀬戸後期	古瀬戸後期後半	古瀬戸後IV期	古瀬戸後IV期新段階	古瀬戸後IV期新	古瀬戸後IV期新～大窯1	大窯期	大窯期前半	大窯第1段階	大窯第2 or 第3段階
碗類			2	1					3	
皿類		1	1		4					
鉢類	1	1								
擂鉢			1	1	8	4	2	1	7	1
袋物	3	4		1			21		1	
鍋・釜		1				1				

第14表 B期遺構出土遺物時期別数量分布表

遺構から出土した資料は多くが大窯第1段階までに属するもので、大窯第3段階まで下がるものはほとんど見当たらない。

このことから、大窯第2段階ないしは第3段階の古い時期（16世紀半ば）には、屋敷地を囲む区画溝の機能は停止していたと思われる。またこれらの溝が掘削されたのは、碗・小皿類・擂鉢をはじめとする日常消費財にかかる器種が普遍的に見出すことができる古瀬戸後IV期の段階（15世紀後半）と考えられる（第49図、第14表）。

#### C 毛受城との整合性

毛受城については、『尾陽雑記』に「中島郡毛受村に新八家老浅井玄蕃屋敷跡有り」との記述がされている。新八とは織田信長の家臣で刈安賀城主となった浅井新八郎政高である。そして浅井玄蕃は浅井新八郎の弟（浅井氏系図）もしくは舍弟（『張州府志』）とされる人物で、永禄8年（1565）に妙興寺に銅磬を寄進している。また『尾張志』には（一宮城主）閔十郎右衛門（長安か）の項に「刈安賀の浅井氏と志ば志ば合戦す」と記されている。このことから毛受城は、日光川を挟んで一宮城の閔氏と対峙するために、刈安賀城主であった浅井新八郎が弟の浅井玄蕃に命じてこの地に築かせた砦としての機能を持った支城であったと思われる。そして築城年代は、刈安賀城が永禄4（1561）年に築かれていることから、ほぼ同時期の16世紀後期前葉頃に比定できよう。

一方、『寛文村々覚書』には「先年浅井玄蕃居城之由、今ハ百姓屋敷ニ成」と記されており、『尾張志』にも、「今城跡に林平という農民住て其末孫也といへり」という記述が見られる。『寛文村々覚書』の編纂が江戸時代前半の寛文年間（1661～1673）であることから、毛受城が築かれた場所は、江戸時代の初期にはすでに農家の屋敷地へと替わっていたようである。

次に、発掘成果を見ていく。戦国期の遺構から出土した遺物から、検出された屋敷地を区画する大溝は、古瀬戸後IV期段階～大窯第1段階（15世紀後期後葉～16世紀前期）を中心に展開しており、大窯第3段階（16世紀半ば）には終息していたと考えられる。

以上のことから、今回の調査において居館跡と想定される区画については、次のような点が考えられる。

①該期の遺構から出土した遺物の所属時期の消長から見て、毛受城の存続時期とは明らかに年代のズレが生じているといえる。このことから、毛受城が築かれる以前の当地を治めていた国人クラスの在地領主の居館が築かれていたと考えられる。そして浅井玄蕃によって当地に毛受城が築かれたことにより、それまでの機能を失い、廃絶されたと見られる。

この視点に立った場合、当地を支配していた在地領主として考えられるのが、『尾張名所図絵』に描かれている「義教公詠歌の松」<sup>16)</sup>に登場する鵜飼領定を祖とする鵜飼氏である。鵜飼氏が当地に住み始めたのは、応永元（1394）年に領定が「七十余反の別業の地」をこの地に開いたことに始まると見られる。そして永禄元（1558）年の浮野合戦の際には、6代鵜飼勝孝が織田信長に兵糧を送り恩賞を受けたという記録や、慶長13（1608）年「頃には鵜飼毛受家の敷地は三反余に縮地され、金剛寺の西に隣り三方に築地があつて南側に門を存し」<sup>17)</sup>ていたことなどから、15世紀前後くらい～16世紀代（半ばくらい）までは、この鵜飼氏が在地領主としてこの地域を支配していたと考えられる。しかし、文献史料などの諸資料の裏付けに欠けているため、戦国期の鵜飼氏の動向について

は今後検討をしていかなくてはならない。

また、毛受城趾が、江戸時代初期の段階で、農家の屋敷地となっていたという後世の伝承記録などから、毛受城の築城場所は、本遺跡とは別の地点（現在の毛受集落内か？）であったと思われる。

②該期の遺物の消長から見て、毛受城が築かれたと見られる16世紀半ばに「場の機能」が変化したと考えられる。すなわち16世紀前半頃までは在地領主の居住空間であった場が、毛受城の築城に伴って憩構の中に取り込まれたことにより、非居住空間へと変化したと見るものである。このことは16世紀後半（大窓第3段階・第4段階）に属する出土遺物が、遺跡全体を見ても、16世紀前半（大窓第1段階・第2段階）に比べて急激に少量化しており、また屋敷地を囲む区画溝からはほとんど出土していないことからも窺うことができる。したがってこの時期にはそれまでの溝はすでに埋没していたと考えられる。しかし出土遺物が少量であることや、遺構が稀薄であることから、具体的な空間機能を想定することは難しい。

### 3 C期の遺構・遺物の様相

#### A 遺構の展開

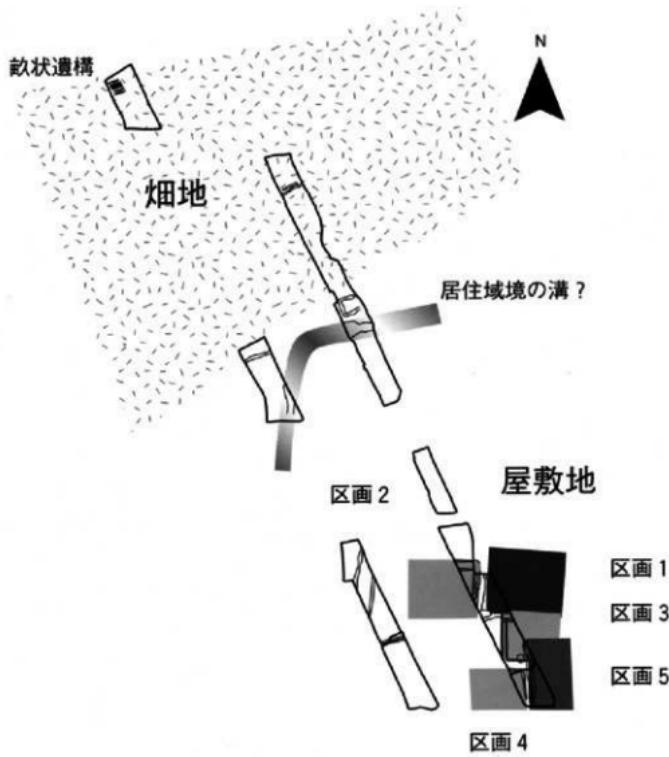
主にC区を中心に展開する。この付近では幅1m前後の溝が方形に巡り、区画を形成していることから該期には屋敷地が広がっていたと思われる。今回の調査区においては、屋敷地として5つの区画が想定できる（第50図）。これらの区画は、いずれも主軸はほぼ南北方向であり、また遺構の前後関係から、区画1が最も古く、区画5が最も新しいことが窺える。検出した溝はいずれも調査区外へ延びているため、東西方向の区画の規模は確認しえないが、南北方向については、大きいもので15m～20m程度の長さを測る。調査区の南端で溝が収束してしまうのは、後世の削平を受けたためと見られる。これらの溝は、出土遺物から、18世紀後半頃には掘削されていたと考えられる。またAa区では文献状遺構が検出されたことから、この付近では、近世後半段階には畠地が広がっていたと思われる。これらのこととは天保12（1841）年に描かれた村絵図からも裏付けられる（第52図）。

今回の調査では、近世（江戸時代）後半期における毛受村の集落の西端を確認できたといえる。

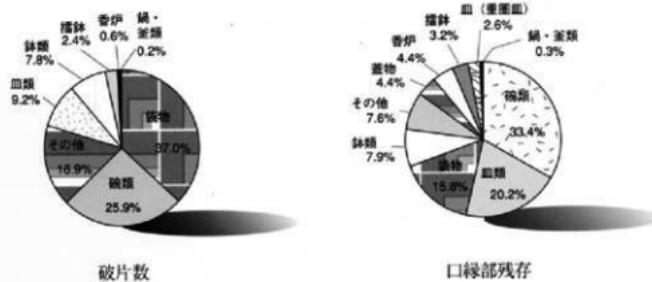
#### B 遺物の様相

陶器類は、近世期のものがもっと多くを占める。各器類（器種）の出土割合を戦国期と比べてみてみると、擂鉢の比率がかなり少なくなっている（3.4%）、小皿類も10%程度に減少している。逆に碗類・鉢類の割合が増えている。口縁部残存率でも、碗類114、皿類69、鉢類27であった。また赤物と呼ばれる常滑産の甕などの大形の袋物製品（壺・甕類）が比較的多い。

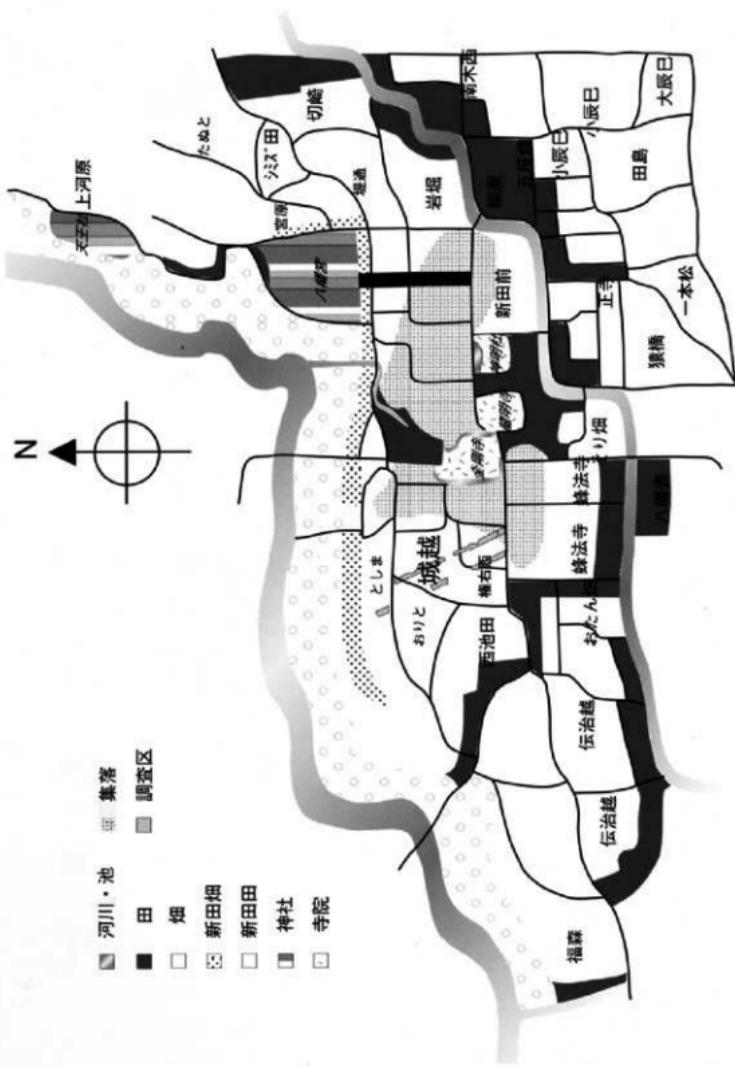
戦国期の屋敷地が廃絶されて間もない17世紀前半頃には、一時的に遺物の量が減少していることから、このあたりは集落の周縁部であったと考えられる。しかし毛受の集落が西に展開していく18世紀代になると、再び遺物の量は増加し、器種構成も豊富になってくる。このことは、該期の遺構が調査区内に展開していることからも明らかである。周辺が毛受集落の日常的な生活領域となっていましたことによるためであろう。



第50図 C期造構配置図



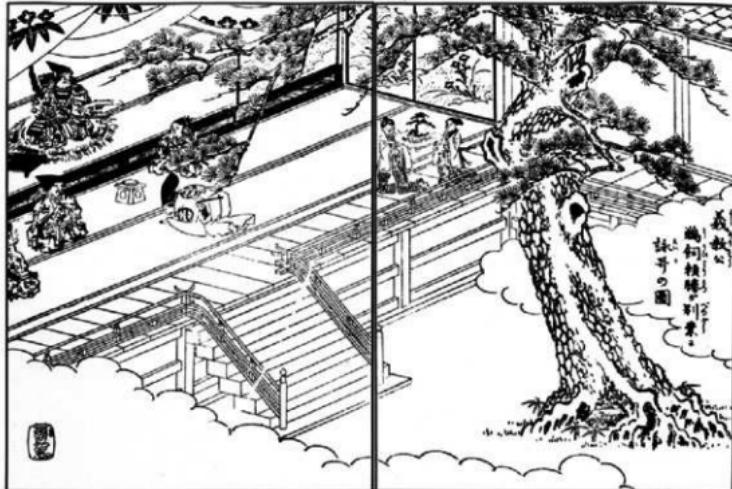
第51図 C期造物組成図



第52図 毛受村村絵図模式図

<注・参考文献>

- 1) 梶上 昇 1997 「八王子遺跡」『年報』平成8年度 (財)愛知県埋蔵文化財センター
- 2) 千田嘉博氏のご教示による。
- 3) 小島道裕 1997 『城と城下』 新人物往来社
- 4) 千田嘉博 1991 「村の城館をめぐる五つのモデル」『年報 中世史研究』第16号 中世史研究会  
前川 要 1999 「考古学から見た戦国期城下町の原型」『歴史地理学』第41巻1号
- 5) 藤澤良祐 1991 「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」 石井 進・萩原三雄編『中世と城の考古学』  
新人物往来社
- 6) 「義教公詠歌の松」は、室町幕府第6代將軍足利義教が永享4(1432)年の富士遊覧の帰途に、毛受村の頼定の館に立ち寄った場面を描いたものである
- 7) 毛受英次 1983 『鶴飼毛受家譜』  
また、鶴飼氏については、毛受英彦氏より、多くの有益な助言をいただいた。
- 8) 徳川林政史研究所須田 垣氏の御厚意により、同研究所所蔵の『中島郡浜田庄毛受村村絵図』を実見させていただいた。



「義教公詠歌の図」「尾張名所図絵」より

## 第VI章　まとめ

今回の毛受遺跡の調査において得られた成果を各時期毎にまとめる。

- 1 A期…遺構の展開はほとんど見られなかつたが、古墳時代の土師器、須恵器、古代の灰釉陶器、中世の灰釉系陶器と、幅広い時代時期にわたって遺物が出土した。このことから、当地周辺では、古墳時代の早い段階には人々の生活が営まれていたと見られる。また多くの破片点数の出土を見た灰釉系陶器のあり方から、近隣に中世村落の存在が示唆される。なお、中世の様相については、本遺跡の南約1kmに所在する八王子遺跡の該期の様相とも絡めて考えていく必要がある。
- 2 B期…東西約1町、南北約半町の規模をもつ区画を主郭として、その南に幾つかの屋敷地が展開していたことが確認できた。出土遺物からこれらの遺構の消長時期のピークは15世紀後半～16世紀前半代と考えられる。これに対し、遺跡の名称に関わる毛受城は、『尾陽雑記』や『寛文村々覚書』などの記載事項から16世紀後半に想定される。すなわち、調査の結果得られた時期と、伝承されている毛受城が築城された想定時期とは年代観上のズレが見られた。それに対する考え方として以下の2点が提示できる。
  - ①16世紀前半頃までは、当地を支配していた在地領主（鶴飼氏？）の居館を主郭とする屋敷地が展開していたが、毛受城が築城されると同時に廃絶されたと考えられる。
  - ②在地領主層の屋敷地の区画が、16世紀半ば頃の毛受城築城にともない、その惣構の中に取り込まれた。そのため日常的な場から、非日常的な場へと機能が変化したと考えられる。
- 3 C期…近世後半段階における毛受村の広がりの西端を確認することができた。



毛受村の猿曳の図（『尾張名所図絵』より）

# 1 遺構一覧表

\* ( ) は、調査区内で確認できた最大計測値

\* < >は、復元推定値

調査区	遺構番号	グリッド番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	旧遺構番号	備考
A	SD01	IXG14o・15o-	(1160)	80	9	C	95Aa-SD01	
A	SD02	IXG14m・14n	389	68	20	C	95Aa-SD02	
A	SD03	IXG14m・14n	(410)	32	19	C	95Aa-SD03	
A	SD04	IXG13m・14m	204	22	17	C	95Aa-SD04	
A	SD05	IXG13m・14m	309	31	17	C	95Aa-SD05	
A	SD06	IXG13m・14m	402	50	16	C	95Aa-SD06	
A	SD07	IXG14m・14n	360	28	18	C	95Aa-SD07	
A	SD08	IXG14m・14n	335	26	16	C	95Aa-SD08	
A	SD09	IXG16o	152	16	-		95Aa-SD09	
A	SD10	XH15c	(257)	52	14		95Ab-SD10	
A	SD11	XH14d・15d	(454)	38	-		95Ab-SD11	
A	SD12	XH14d・15d	487	12	11		95Ab-SD12	
A	SD13	XH14d-	(650)	53	17		95Ab-SD13	
A	SD14	XH15d・15e-	(1090)	76	20		95Ab-SD14	
A	SD15	XH17g・17h-	(1100)	280	12		95Ab-SD15	
A	SD16	I TH17o-	(975)	130	10		95Ac-SD16	96B-SD0
A	SD17	I TH18o-	(950)	115	11		95Ac-SD17	96B-SD10
A	SD18	I TH18p-	(445)	(218)	40		95Ac-SD18	
A	SD19	I TH19p-	(2020)	87	5		95Ac-SD19	
A	SD20	I TH19p-	(1880)	230	42	B	95Ac-SD20	
A	SK01	IXG13m	123	29	16		95Aa-SK01	
A	SK02	IXG14n	99	74	22		95Aa-SK02	
A	SK03	IXG14n	-	(44)	-		95Aa-SK03	
A	SK04	IXG13m	74	32	8		95Aa-SK04	
A	SK05	IXG14o	-	80	10		95Aa-SK05	
A	SK06	IXG15o	83	73	15		95Aa-SK06	
A	SK07	IXG15n	69	62	13		95Aa-SK07	
A	SK08	IXG14m	50	49	21		95Aa-SK08	
A	SK09	IXG16o	46	22	6		95Aa-SK09	
A	SK10	IXG17n	79	46	20		95Aa-SK10	
A	SK11	IXG17n-	(226)	(124)	28		95Aa-SK11	
A	SK12	IXG16n-	280	(100)	-		95Aa-SK12	
A	SK13	IXG17p	69	52	33		95Aa-SK13	
A	SK14	IXG14n	(280)	189	-		95Aa-SK14	
A	SK15	IXG15n	125	105	15		95Aa-SK15	
A	SK16	IXG15p	48	37	11		95Aa-SK16	
A	SK17	IXG17p	53	38	36		95Aa-SK17	
A	SK18	IXG17o	103	71	30		95Aa-SK18	
A	SK19	IXG16n	(204)	(114)	24		95Aa-SK19	
A	SK20	XH15d	42	34	15		95Ab-SK20	
A	SK21	XH15d	166	56	26		95Ab-SK21	
A	SK22	XH18f・18g	66	60	6		95Ab-SK22	
A	SK23	XH20e・20f	(290)	(295)	40		95Ab-SK23	
A	SK24	I H18p	190	190	63		95Ac-SK24	

調査区	遺構番号	グリッド番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	旧遺構番号	備考
B	SD01	I H11K-	(883)	105	30			

調査区	遺構番号	グリッド番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	旧遺構番号	備考
B	SD02	IH11l-	(690)	47	8			
B	SD03	IH11k - 12k	410	40	6			
B	SD04	IH12n-	(1550)	(113)	32			
B	SD05	IH17n-	(400)	152	12			95A-SD16
B	SD06	IH16n-	(900)	120	12			
B	SD07	IH10l-	(480)	96	9			
B	SD08	IH12l-	(1300)	185	22			
B	SD09	IH11m-	(318)	(45)	-			
B	SD10	IH17n-	(135)	(155)	21			95A-SD17
B	SD11	IH10k-	(960)	(190)	70	B		
B	SD12	IH11m-	(1600)	(180)	146	B		
B	SD13	IH12n + 13n	(415)	(80)	68	B?		
B	SK01	IH11l	153	105	29			
B	SK02	IH16m + 16n-	(356)	(146)	57			
B	SK03	IH12k	(156)	136	30			
B	SK04	IH13k + 13l-	(172)	(106)	15			
B	SK05	IH13l + 14l-	(495)	(151)	4			
B	SK06	IH14m	70	56	17			
B	SK07	IH14m	(186)	(143)	12			
B	SK08	IH10k	65	52	10			
B	SK09	IH11l	44	42	13			
B	SK10	IH10l	62	28	13			
B	SK11	IH12l	65	54	10			
B	SK12	IH13m	59	44	17			
B	SK13	IH13m	(50)	(38)	5			
B	SK14	IH13m	83	72	25			
B	SK15	IH15n	120	73	40			
B	SK16	IH15n	126	107	73			
B	NR01	IH11m-	(1640)	(205)	28			

調査区	遺構番号	グリッド番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	旧調査区	備考
C	SD01	II17e - II2f	(2510)	74	35	C	96Ca - Cb	
C	SD02	II20d - II2e-	(1780)	76	33	C	96Ca - Cb	
C	SD03	II16d - II19d-	(2970)	59	18	C	96Ca	
C	SD04	II18e - 18f	(432)	53	16		96Ca	
C	SD05	II19d-	(530)	58	13		96Ca	
C	SD06	II15d-	(1780)	50	16	C	96Ca	
C	SD07	II17d-	(640)	35	10		96Ca	
C	SD08	II17e	260	21	9		96Ca	
C	SD09	II15b-	(1155)	171	30		96Ca	
C	SD10	II17c-	(335)	29	7		96Ca	
C	SD11	II19c - II2f	(1870)	120	38	C	96Ca - Cb	
C	SD12	II12b-	(1460)	180	32	C	96Ca	
C	SD13	II12b-	(1200)	128	23	C	96Ca	
C	SD14	IH12t-	(1020)	82	22	C	96Ca	
C	SD15	IH12t-	(620)	122	18	C?	96Ca	
C	SD16	IH11t-	(592)	111	28	C?	96Ca	
C	SD17	IH9a-	(1750)	780	236	B	96Ca	
C	SD18	IH3g-	(1890)	720	150	B	96Ca	
C	SD19	IH5r-	(380)	271	38	A	96Ca	
C	SD20	IH6b-	(1115)	320	54	B	96Ca	
C	SD21	II12a-	?	(600)	38	C	96Ca	
C	SD22	II11a-	405	41	12		96Ca	
C	SD23	II11g + 2g	615	48	7		96Ca	

調査区	遺構番号	グリッド番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	旧調査区	備考
C	SD24	II120e-	(900)	670	18	B	96Ca	
C	SK01	II118e・19e	316	282	150	C	96Ca	井戸
C	SK02	II15b	(406)	268	50		96Ca	
C	SK03	II114b・15b	(103)	137	15		96Ca	
C	SK04	II118f・19f	148	122	25		96Ca	
C	SK05	II15d	72	59	14		96Ca	
C	SK06	II19d	(106)	(58)	(14)		96Ca	
C	SK07	II18d	106	83	12		96Ca	
C	SK08	II17e	33	30	7		96Ca	
C	SK09	II16c	159	105	17		96Ca	
C	SK10	II15c	71	50	16		96Ca	
C	SK11	II15c	62	47	10		96Ca	
C	SK12	II15c	61	52	18		96Ca	
C	SK13	II18d	74	62	15		96Ca	
C	SK14	II11e	64	56	10		96Cb	
C	SK15	II11g	82	60	37		96Cb	
C	SK16	II11g	94	54	34		96Cb	
C	SK17	II20f・II1f-	(150)	182	30		96Cb	
C	SK18	II20f	(210)	230	116	C	96Cb	井戸
C	SK19	II20e・II1e	235	222	42		96Cb	

調査区	遺構番号	グリッド番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期	旧遺構番号	備考
D	SD01	XH13k-	(1055)	670	73	C		
D	SD02	XH10k・11k-	(1850)	125	14			
D	SD03	XH2g・1h-	(468)	311	102			
D	SD04	XH2g・1h	312	82	12			
D	SD05	XH9j-	(815)	107	30			
D	SD06	XH9j-	(815)	1020	207	B		
D	SD07	XH7i・7j	614	184	104	B		
D	SK01	XH3h・4h	536	250	40			
D	SK02	XH2h	540	330	50			
D	SK03	XH2g	204	163	18			
D	SK04	XH1f・1g-	58	26	16			
D	SK05	XH11l	32	112	54			
D	SK06	XH12m	(100)	(50)	36			
D	SK07	XH8k	260	(194)	19			
D	SK08	XH12k・12l	(280)	(130)	11			
D	SK09	XH2g・3g	442	190	35			
D	SK10	XH7i	464	(188)	56			
D	SK11	XH17o	172	169	51			
D	SK12	XH17o	280	(180)	23	B		
D	SB01-P1	XH15m	71	71	9	B	Pit1	礫板有り
D	SB01-P2	XH15n	81	70	22	B	Pit2	
D	SB01-P3	XH15n	<74>	62	42	B	Pit3	礫板有り
D	SB01-P4	XH16m	108	86	24	B	Pit4	礫板有り
D	SB01-P5	XH16n	102	84	83	B	Pit5	
D	SB01-P6	XH16m	<81>	62	40	B	Pit6	
D	SB01-P7	XH16n	88	70	10	B	Pit7	礫板有り
D	SB01-P8	XH16n	127	96	38	B	Pit8	礫板有り
D	SB01-P9	XH16n	108	72	17	B	Pit9	
D	P10	XH16o	126	105	36	B	Pit10	
D	SB01-P11	XH16m	<136>	<120>	24	B	Pit11	礫板有り

## 2 遺物一覧表

### A期の遺物

神岡 遺物 番号	遺物番号	遺物名	产地・材質	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	内面	外面	胎土	備考	登録 番号	目録 番号
10	1	C-SD18	土器窓	壺	径23.2	高2.3		斜尖突状紋	斜尖突状紋	灰褐色	E-1	96Ca	
10	2	C-SD17	土器窓	壺		高2.8		+	+	灰白色	E-2	96Ca	
10	3	A-SD17	土器窓	壺		高2.9		+	+	浅黄色	E-3	95Aa	
10	4	C-SD17	土器窓	壺		高2.4		段々	+	浅黄褐色	E-4	96Ca	
10	5	C-SD17	土器窓	壺		高2.5		横+	横+△	同軸ハラズ			
10	6	C-SD17	灰陶系陶器	碗	径14.6	高5.2	径6.2	横+△	横+△,回転切削	灰白色	E-6		
10	7	A-SD17	灰陶系陶器	壺	8	1.4	4.9	横+△	横+△,回転切削	灰白色	E-7	95Ac	
10	8	A-SD17	灰陶系陶器	壺	7.6	1.2	径4.6	横+△	横+△,回転切削	灰白色	E-8	95Ac	
9	9	B-SD12	灰陶系陶器	壺	径8.6	高2.2	径4.4	横+△	横+△	灰白色	E-9		
10	10	C-SD17	灰陶系陶器	壺	径9.4	高1.4	5.7	横+△	横+△,回転切削	灰白色	E-10		
10	11	C-SD17	灰陶系陶器	壺	径8.8	高1.8	5.0	横+△	横+△,回転切削	灰白色	E-11		
10	12	C-SD17	灰陶系陶器	壺	径7.6	0.8	4.6	横+△	横+△,回転切削	灰白色	E-12	96Ca	
10	13	C-SD17	灰陶系陶器	壺	径7.4	高1.0	5.4	横+△	横+△,回転切削	灰白色	E-13	96Ca	
10	14	C-SD17	灰陶系陶器	壺	径7.6	高1.3	4.6	横+△	横+△,回転切削	灰白色	E-14	96Ca	
10	15	C-SD21	灰陶系陶器	壺	径7.4	高2.0	5.4	横+△	横+△,回転切削	灰白色	E-15	96Ca	
10	16	C-SK09	灰陶系陶器	壺	径7.6	高2.0	4.0	横+△	横+△,回転切削	灰白色	E-16	96Ca	

### B期の遺物

神岡 遺物 番号	遺物番号	遺物名	产地・材質	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	内面	外面	胎土	備考	登録 番号	目録 番号
12	17	B-SD11	土器窓	壺	径5.8	高1.0	4.1	指押△後,△	指押△,横+△	灰白色	非クロロ成形	E-17	
12	18	B-SD11	土器窓	壺	6.3	0.8	5.3	指押△後,△	指押△,横+△	灰白色	非クロロ成形		
12	19	B-SD11	土器窓	壺	6	1.1	5	指押△後,△	指押△,横+△	ニハイ黄色	非クロロ成形	E-18	
12	20	B-SD11	土器窓	壺	6.2	4	1.1	南押△後,△	指押△,横+△	灰白色	非クロロ成形	E-19	
21	21	B-SD11	湖田美濃	擂钵		5.7	9.6	鉗輪	鉗輪	ニハイ黄色	E-20		
22	22	B-SD11	湖田美濃	擂钵		6.7	10.4	鉗輪	鉗輪	浅黄褐色	E-21		
22	23	B-SD11	湖田美濃	擂钵		7.6	10.4	鉗輪	鉗輪	灰白色	E-22		
24	24	B-SD11	湖田美濃	坪壠		5.8	14.1	無輪,露胎	無輪,露胎	ニハイ褐色	E-23		
25	25	B-SD11	湖田美濃	縦輪小皿		0.9	4.8	灰輪	無輪,回転切削	灰白色	E-24		
26	26	B-SD11	常滑	要		19.2		灰輪	鉗輪	ニハイ褐色	E-25		
27	27	B-SD11	木	折敷板	長21.3		2.7	鉗輪	鉗輪	乳4ヶ所	W-1		
28	28	B-SD11	木	十字形木製品	長20.6		2.5	鉗輪	鉗輪	乳4ヶ所	W-2		
29	29	B-SD11	木	十字形木製品	長20.8		2.3	鉗輪	鉗輪	乳4ヶ所	W-3		
30	30	B-SD12	湖田美濃	口広有肩窓	径11.1	高5.3		灰輪	灰輪	浅黄褐色	E-26		
31	31	B-SD12	湖田美濃	擂钵	28.8	3.8		灰輪	灰輪	灰白色	E-27		
32	32	B-SD12	湖田美濃	擂钵	30.0	3.4		灰輪	灰輪	灰白色	E-28		
33	33	B-SD12	木	木駒串器	残7.8	9.0		赤色漆	黒色漆,灰面漆	黒色漆	W-4		
34	34	C-SD17	銅	紅鉢	4.4	1.6	1.7	無	無	ニハイ褐色	M-1	96Ca	
35	35	C-SD17	湖田美濃	重底盆	径9.6	2.2		無	無	別心浮き面漆	E-29	96Ca	
36	36	C-SD17	土器窓	壺	径6.0	0.9		指押△後,△	指押△,横+△	ニハイ褐色	非クロロ成形	E-30	96Ca
37	37	C-SD17	土器窓	壺	径12.4	2.4	6	横+△	横+△,回転切削	ニハイ褐色	ロクロ成形	E-31	96Ca
38	38	C-SD17	中空骨	瓶	残1.9	4.9		青花	白地	白地	E-32	96Ca	
39	39	C-SD18	木	木胎漆器	径13.5	6.2	6.8	赤色漆	黒色漆,2様赤色	黒色漆	W-5	96Ca	
40	40	C-SD18	土器窓	壺	径6.2	1	5.1	指押△後,△	指押△,横+△	ニハイ褐色	非クロロ成形	E-33	96Ca
41	41	C-SD18	土器窓	壺	6	1.1	5.1	指押△後,△-L	指押△,横+△	灰白色	非クロロ成形	E-34	96Ca
42	42	C-SD18	土器窓	壺	径6.3	0.9	5.4	指押△後,△	指押△,横+△	灰白色	非クロロ成形	E-35	96Ca
43	43	C-SD18	土器窓	壺	径6.4	1.0	5.4	指押△後,△	指押△,横+△	ニハイ褐色	非クロロ成形	E-36	96Ca
44	44	C-SD18	土器窓	壺	径7.0	0.9	4.2	指押△後,△	指押△,横+△	灰白色	非クロロ成形	E-37	96Ca
45	45	C-SD18	土器窓	壺	径6.8	0.9	5.1	指押△後,△	指押△,横+△	灰白色	非クロロ成形	E-38	96Ca
46	46	C-SD18	土器窓	壺	6.4	1	5.7	指押△後,△	指押△,横+△	ニハイ褐色	非クロロ成形	E-39	96Ca
47	47	C-SD18	土器窓	壺	径6.5	残1.1	6.1	指押△後,△	指押△,横+△	灰白色	非クロロ成形	E-40	96Ca
48	48	C-SD18	土器窓	壺	10.8	2.1	5.6	横+△-L	横+△,回転切削	浅黄褐色	ロクロ成形	E-41	96Ca
49	49	C-SD18	土器窓	壺	12.4	2.2	5.9	横+△	横+△,回転切削	浅黄褐色	ロクロ成形	E-42	96Ca
50	50	C-SD18	土器窓	壺	径12.8	2.3	7.1	横+△	横+△,回転切削	ニハイ褐色	ロクロ成形	E-43	96Ca
51	51	C-SD18	中国古磁	蓮弁紋碗		残2.7		青磁	青磁	灰色	E-44	96Ca	
52	52	C-SD18	湖田美濃	腰折瓶	径9.4	1.7		灰輪	灰輪	灰白色	E-45	96Ca	
53	53	C-SD18	湖田美濃	擂钵		9.6		灰輪	灰輪	灰白色	E-46	96Ca	
54	54	C-SD18	湖田美濃	擂钵		9.7		灰輪	灰輪	灰白色	E-47	96Ca	
55	55	C-SD18	石	砾石	残長9.0	残13.3		鐵熱		凝灰岩	S-1	96Ca	
56	56	C-SD18	木	木胎漆器		0.5	0.8	赤色漆	黒色漆,文様赤色漆		W-6	96Ca	
57	57	C-SD18	木	木胎漆器		2.5	2.8	赤色漆	黒色漆,文様赤色漆		W-7	96Ca	
58	58	C-SD18	木	角柱状木製品	長9.8	厚1.5	厚2.6				W-8	96Ca	

番号	遺物 番号	地名・材質	器種	L3径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	内面	外面	胎土	備考	登録 番号	旧遺物 番号	
15	59 C-SD18 木	棒状木製品	残長15.3			径2.4					W-9	96Ca	
15	60 C-SD18 木	木箱(漆物)	長16.6			幅3.4					孔7ヶ所、 木釘16ヶ所	W-10	96Ca
15	61 C-SD18 木	結晶樹脂	長14.5			幅7.9					板目板	W-11	96Ca
16	62 C-SD18 木	結晶樹脂	長14.8			幅5.8	簡便				板目板	W-12	96Ca
16	63 C-SD18 木	結晶樹脂	長14.5			幅6.0	被然				板目板	W-13	96Ca
16	64 C-SD18 木	結晶樹脂	長14.2			幅4.8	被然				板目板	W-14	96Ca
16	65 C-SD18 木	豆腐豆乳製品	長18.8			幅4.0					孔7ヶ所	W-15	96Ca
16	66 C-SD18 不明木製品	不明木製品	残長20.4	厚6.8		幅7.9					木釘1ヶ所	W-16	96Ca
16	67 C-SD29 木	辛子甕	残長45.0			幅5.6						W-17	96Ca
16	68 C-SD29 木	飴瓶	残長51.2			幅10.8					孔3ヶ所	W-18	96Ca
17	69 D-SB01 木製器	瓶	6.6	1.1	4.2	直径2.8、厚7.7	指揮印、横ササ	灰白色	漆口クロロジンE	E-48	Pn07		
17	D-SD06 中国・青磁桂花瓶	瓶	12.0	残2.4			青磁	灰色				E-49	
17	71 D-SK12 中国・青磁團扇形	團扇	8.4	8.9		直柄	灰輪					E-50	
18	72 D-波出 中国・青花瓶	瓶	残長2.0				青花	青花、毛刷	白色			E-51	
18	73 D-波出 中国・青花罐	罐	残長1.8				青花		白色			E-52	
18	D-SD01 中国・青花罐	罐	残長1.5				青花		白色			E-53	
18	D-波出 中国・青花罐	罐	残長1.1				青花		白色			E-54	
19	76 A-SD20 中国・青磁蓮瓣紋瓶	瓶	15.4	残4.3			青磁	灰色				E-55	95Ag

### C期の遺物

番号	遺物 番号	地名・材質	器種	L3径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	内面	外面	胎土	備考	登録 番号	旧遺物 番号
19	77 A-レシナ 漢口美濃	弘法茶碗	残3.9	5.9		灰釉、須彌	灰釉、須彌	灰白色			E-56	95Ac
19	78 A-波出 金剛陶器	丸碗	残1.3	3.4		灰釉	灰釉、高台唇沿、 底面に墨書き	灰白色	圓口漢漆盒内		E-57	95Ac
19	79 A-波出 漢口美濃	平車	直径7.5*	1.6		灰釉	灰釉	灰白色			E-58	95Ac
19	80 B-SD01 漢口美濃	平車	直径12.3	残3.8		灰釉	灰釉	灰白色			E-59	
19	81 C-SD02 漢口美濃	丸湯舟合茶碗	直径9.2	残4.8		灰釉	灰釉	灰白色			E-60	96Ca
19	82 C-丸直五 漢口美濃	圓舟碗	残4.7	4.4		灰釉	灰釉、高台部露胎	灰白色			E-61	96Ca
19	83 C-SD21 胡唐・青磁	瓶	直径12.2	3	残7.3	青磁	青磁、露胎部分、 回転糸切版	灰白色			E-62	96Ca
19	84 C-丸直五 漢口美濃	香炉	直径10.5	6.2	残10.1	灰釉	灰釉	灰白色			E-63	96Ca
19	85 C-SK19 漢口美濃	香炉	直径10.2	5.8	7.4	灰釉	灰釉	灰白色			E-64	96Cb
19	C-横出 漢口美濃	丸碗	直径12.1	5.8	4	良石輪	良石輪手文様	灰白色			E-65	96Ca
19	87 C-SD02 漢口美濃	丸碗	直径12.0	8.2	4.9	灰釉	灰釉、高台部露胎	灰白色			E-66	96Ca
19	88 C-SK19 漢口美濃	釜	直径13.4	残3.5		黑釉	黑釉、回転糸切版	灰白色			E-67	96Cb
19	89 C-丸直五 漢口美濃陶器	鉢	直径19.8	残3.8		透明釉	透明釉	浅黄色			E-68	96Cb
19	90 D-SD01 漢口美濃	圓盤付	残1.5	直径7.8		長石輪	長石輪、鉢底	灰白色			E-69	

### 加工円盤

番号	遺物 番号	地名・材質	板用器種	長軸 (cm)	短軸 (cm)	重量 (g)	内面	外面	胎土	備考	登録 番号	旧遺物 番号
24	91 A-波出 漢口	鉢脚?	2	1.7	2.7	2.7	灰釉	灰釉			E-70	95Aa
24	92 A-波出 漢口	鉢	2.7	2.6	8.5		灰釉	灰釉			E-71	95Aa
24	93 A-波出 漢口	鉢脚	2.8	2.3	8.2		灰釉	灰釉			E-72	95Aa
24	94 A-波出 漢口	鉢脚	2.8	2.6	8.5		灰釉	灰釉			E-73	95Aa
24	95 A-丸直五 漢口	鉢脚	2.8	2.4	8.1		灰釉	灰釉			E-74	95Ab
24	96 A-波出 漢口	鉢脚	2.2	2.1	4.3		灰釉	灰釉			E-75	95Ab
24	97 A-波出 漢口	鉢脚	2.3	2.2	4.5		灰釉	灰釉			E-76	95Ab
24	98 A-丸直五 漢口	鉢	3.2	3.1	12.5		灰釉	灰釉			E-77	95Ac
24	99 A-トランク 漢口	鉢脚	3.3	3.2	15.5		灰釉	灰釉			E-78	95Ac
24	100 A-波出 漢口	合巻茶碗(笠付)	2.5	2.6	3.6		灰釉	灰釉			E-79	95Ac
24	101 A-波出 漢口	鉢	2.3	2.2	4.4		灰釉	灰釉			E-80	95Ac
24	102 A-波出 漢口	鉢脚	2.8	2.2	6.4		灰釉	灰釉			E-81	95Ac
24	103 A-波出 漢口	鉢脚	2.4	1.9	4.4		灰釉	黒釉(露胎)			E-82	95Ac
24	104 A-波出 漢口	鉢脚	2.4	2.1	3.7		灰釉	黒釉(露胎)			E-83	95Ac
24	105 A-波出 瓦		3.6	2.8	10.4						E-84	95Ac
24	106 A-波出 漢口	筋影巻合茶碗	2.8	3.1	5.6		灰釉	灰釉			E-85	95Ac
24	107 A-波出 美濃	筋影巻合茶碗	2	1.9	2.6		灰釉	灰釉			E-86	95Ac
24	108 A-波出 漢口	鉢脚	1.9	1.5	3.1		灰釉	灰釉			E-87	95Ac
24	109 A-波出 漢口	鉢脚	2.2	2.3	6.7		灰釉	灰釉			E-88	95Ac
24	110 A-波出 美濃	鉢脚	2.9	3.1	9.9		灰釉	灰釉			E-89	95Ac
24	111 A-波出 漢口	鉢脚	2.8	2.6	9.2		灰釉	灰釉			E-90	95Ac
24	112 A-波出 漢口	鉢脚	2.6	2.2	9.3		灰釉	灰釉			E-91	95Ac
24	113 A-波出 漢口	筋影巻合茶碗	3.4	2.3	6.5		灰釉	灰釉			E-92	95Ac
24	114 A-SD20 漢口	鉢脚	1.8	1.5	4.3		灰釉	灰釉			E-93	95Ac
24	115 B-波出 宝滑	鉢	2.8	2.2	11.7		無釉	無釉	赤物		E-94	95Bb

登録番号	遺物番号	遺物名	地質・材質	使用器種	長軸 (cm)	短軸 (cm)	重量 (g)	内面	外面	胎土	備考	登録番号	田道場番号
24	116	B-SD01	湘口美濃	鉢	2.1	2.3	3	灰釉	灰釉			E-95	96B
24	117	C-共用美濃	小碗	4.8	4.5	32.5	灰釉	無釉	無釉			E-96	96Ca
24	118	C-ソントウ	常滑?	器?	1.8	1.6	5.2	灰釉	灰釉			E-97	96Ca
24	119	C-ソントウ	常滑	大型製品	3.4	3	11.8	灰釉	無釉	赤物		E-98	96Ca
24	120	C-核出	美濃	容器?	2.1	2.3	4.7	灰釉	無釉			E-99	96Ca
24	121	C-核出	湘口	壳	1.9	1.8	4.1	灰釉	灰釉			E-100	96Ca
24	122	C-核出	湘口	壳	1.9	1.8	4.1	灰釉	灰釉			E-101	96Ca
24	123	C-SD03	湘口美濃	鉢	1.9	2.2	3.4	灰釉	灰釉	一部露胎		E-102	96Ca
24	124	C-SD04	湘口	鉢	2.5	2.3	10.6	灰釉	灰釉			E-103	96Ca
24	125	C-SD07	常滑	壳	2.2	1.9	10.5	無釉	無釉			E-104	96Ca
24	126	C-SD09	湘口美濃	天日茶碗	4.3	4.3	24.4	灰釉	無釉	露胎		E-105	96Ca
24	127	C-SD16	湘口美濃	鉢	1.1	1.1	4.1	灰釉	灰釉			E-106	96Ca
24	128	C-SD16	湘口美濃	鉢	2	1.6	5	灰釉	灰釉			E-107	96Ca
24	129	C-SK01	湘口	酒呑茶碗	1.9	1.7	1.8	灰釉	灰釉			E-108	96Ca
24	130	C-共用美濃	碗類?	2	1.8	3.3	灰釉	灰釉			E-109	96Cb	
24	131	C-共用美濃	湘口美濃	鉢	3.8	4.4	22	灰釉	灰釉			E-110	96Cb
24	132	C-共用美濃	小杯	5.3	5.3	32.5	灰釉	無釉	高台露胎		E-111	96Cb	
25	133	C-核出	湘口美濃	大型製品	2.5	2.1	9.3	灰釉	灰釉	蓋・蓋・瓶		E-112	96Cb
25	134	C-核出	湘口	灰釉碗?	5.3	4.2	34.6	灰釉	灰釉			E-113	96Cb
25	135	C-核出	美濃	灰釉碗?	2.4	2.3	6.1	灰釉	灰釉			E-114	96Cb
25	136	C-SD01	湘口	鉢	2.9	2.7	10.1	灰釉	灰釉			E-115	96Cb
25	137	C-SD01	湘口	鉢	2.9	3.6	11.5	灰釉	灰釉			E-116	96Cb
25	138	C-SD11	湘口	鉢	3.8	4.5	21.7	灰釉	灰釉			E-117	96Cb
25	139	C-SK18	湘口	煎茶器各類	5.8	3.6	20.9	灰釉	無釉	蓋(合掌器蓋)		E-118	96Cb
25	140	C-SK19	美濃	利多	2.3	1.9	4.1	灰釉	灰釉			E-119	96Cb
25	141	D-ソントウ	湘口美濃	鉢	2	2.1	2.9	灰釉	灰釉			E-120	96D
25	142	D-核出	湘口	鉢	2.1	3.1	7.2	灰釉	灰釉			E-121	96D
25	143	D-核出	湘口	瓦	4.7	4.2	34.2	灰釉	灰釉			E-122	96D
25	144	D-核出	湘口	鉢	2.2	1.9	4.1	灰釉	灰釉			E-123	96D
25	145	D-核出	湘口美濃	扇口茶碗	5.1	4.3	26.6	灰釉	無釉			E-124	96D
25	146	D-核出	湘口美濃	鉢	3.6	3.9	17.2	無釉	無釉			E-125	96D
25	147	D-核出	湘口	瓶	2.5	2	7.2	灰釉	網紋			E-126	96D
25	148	D-核出	湘口	鉢	3	3	9.1	灰釉	灰釉			E-127	96D
25	149	D-SD01	湘口	鉢	1.9	2.1	4.2	灰釉	灰釉			E-128	96D
25	150	D-SD01	湘口	鉢	2.5	2.9	8.6	灰釉	灰釉			E-129	96D
25	151	D-SD01	湘口美濃	丸皿(端子皿)	3	3	7.3	灰釉	灰釉			E-130	96D
25	152	D-SD01	單耳不明	鉢	4.1	3.1	10	灰釉	灰釉			E-131	96D
25	153	D-SD01	美濃	利多	2.4	2.4	3.9	灰釉	灰釉			E-132	96D
25	154	D-SD01	湘口美濃	鉢	2	2	4.2	無釉	無釉			E-133	96D
25	155	D-SD01	美濃	器	2.4	2.2	8.2	無釉	無釉			E-134	96D
25	156	D-SD01	美濃	器	3.7	3.6	17	無釉	無釉	赤物		E-135	96D
25	157	D-SD01	美濃	片口鉢	2.4	2.6	5.4	灰釉	灰釉			E-136	96D
25	158	D-SD01	湘口美濃	鉢	3.6	3.5	16	灰釉	灰釉	一部露胎		E-137	96D
25	159	D-SD01	湘口美濃	器	3.3	4.6	3.7	無釉	無釉			E-138	96D
25	160	D-SD01	湘口美濃	器	2.6	2.5	9	無釉	無釉			E-139	96D
25	161	D-SD01	湘口	鉢	3.4	2.3	8.3	無釉	無釉			E-140	96D

### 加工凹盤

登録番号	遺物番号	遺物名	地質・材質	器種	長軸 (cm)	短軸 (cm)	重量 (g)	内面	外面	胎土	備考	登録番号	田道場番号
25	162	C-SD11	土師器	土製円盤	93.5	41.6			指印	二		E-141	96Cb

### 擦り痕を有する土器

登録番号	遺物番号	遺物名	地質・材質	使用器種	長軸 (cm)	短軸 (cm)	重量 (g)	内面	外面	胎土	備考	登録番号	田道場番号
25	163	A-核出	湘口美濃	鉢	3.0	2.5	17.7	灰釉	灰釉			E-142	95Ab
25	164	A-核出	湘口美濃	鉢	4.4	3.4	13.9	灰釉	灰釉			E-143	95Ab
25	165	A-核出	湘口美濃	鉢	5.1	6.1	20.3	無釉	無釉			E-144	95Ac
25	166	A-核出	瓦	4.3	6.6	40.1						E-145	95Ac
25	167	C-ソントウ	湘口美濃	器	8.5	6.8	45.3	黑釉	灰釉			E-146	96Ca
25	168	C-SK02	常滑	器	6.6	6.9	77.4	黑釉	灰釉			E-147	6Ca
25	169	C-SK01	湘口	鉢	4.6	7.3	35.6	無釉	無釉			E-148	96Ca
25	170	C-SD17	湘口	鉢	6.8	4.7	35.4	無釉	無釉			E-149	96Ca
25	171	C-SK01	湘口	鉢	5.9	4.8	25.5	無釉	無釉			E-150	96Ca
25	172	C-SK02	湘口	火鉢	8.9	6.1	58.3	無釉	無釉			E-151	96Ca
25	173	C-SD02	湘口	鉢	6.4	5.4	31.5	無釉	無釉			E-152	96Ca
25	174	C-SK01	湘口	鉢	6.7	5.6	29	無釉	無釉			E-153	96Ca
25	175	C-SD01	湘口	鉢	2.8	3.1	10.7	無釉	無釉			E-154	96Ca

番号	遺物番号	产地・材質	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	内面	外側	胎土	備考	登録番号	旧通番号
25	176 C-SK01	瀬戸口	擂鉢	5.3	4.4	34.3	直輪	直輪		武部仁磨り路	E-155	99Ca
25	177 C-秋出	瀬戸口美濃	擂鉢	2.8	3.2	3.4	直輪	直輪			E-156	99Ca
25	178 C-SD01	瀬戸口	擂鉢	3.5	3.9	21.6	直輪	直輪			E-157	99Cb
25	179 C-秋出	瀬戸口	擂鉢	6.7	6.1	51.4	直輪	直輪			E-158	99Cb
25	180 C-秋出	瀬戸口	擂鉢	6	6.3	30.9	直輪	直輪			E-159	6Cb
25	181 D-吉田屋	瀬戸口	壺	4	3.6	15.8	無輪	直輪			E-160	
25	182 D-吉田	瀬戸口	擂鉢	4.8	3.7	26.6	直輪	直輪			E-161	

### 陶丸・土玉

番号	遺物番号	产地・材質	器種	最大径 (mm)	重量 (g)	内面	外側	胎土	備考	登録番号	旧通番号
25	183 A-吉土舟	瀬戸口美濃	陶丸	22.4	11.9		灰白色			E-162	95Ab
25	184 B-掛出	瀬戸口美濃	陶丸	23.5	11.9		灰白色			E-163	
25	185 C-掛出	土師器	土玉	20.6	6.5		灰黄色			E-164	96Ca

### 土鍤

番号	遺物番号	产地・材質	器種	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	調整	表面	胎土	備考	登録番号	旧通番号
25	186 A-トレンク	土師器	土鍤	残45.3	13.0	3.6	6.9	ニビ指付	指ナデ	ニブイ赤褐色	E-165	95Ab	
25	187 B-トレンク	土師器	土鍤	残40.5	15.6	5.0	7.2	ニビ指付	無し	浅黃褐色	E-166		
25	188 C-SD03	土師器	土鍤	31.5	12.9	5.3	3.5	ニビ指付	指ナデ	浅黃褐色	E-167	96Ca	

### 土鈴・土人形

番号	遺物番号	产地・材質	器種	高さ (cm)	幅 (cm)	奥行 (cm)	形状	成形法	胎土	備考	登録番号	旧通番号
25	189 A-飛丸	土師器	鈴	残1.5	残1.7		手捻り	ニブイ黄褐色			E-168	95Ac
25	190 C-SD20	土師器	鈴	残1.7	残1.8		手捻り	灰白色			E-169	96Ca
25	191 C-SD01	土師器	鈴	残1.6	残0.9		手捻り	淡黄色			E-170	96Cb
25	192 C-SD01	土師器	鈴	残1.8	残1.8		手捻り	淡黄色			E-171	96Cb
25	193 D-トレンク	土師器	鈴	残2.5	残2.7		手捻り	橙色			E-172	
25	194 D-SD01	土師器	鈴	残2.1	残1.6		手捻り	ニブイ橙色			E-173	
25	195 A-飛出	土師器	人形	3.7	3.6	2.6	鳥	手捻り	橙色		E-174	95Ac
25	196 D-掛出	土師器	人形	0.8	2.9	2	魚	懸垂子手工	灰白色		E-175	

### 石製品

番号	遺物番号	产地・材質	器種	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状	調整	石材	備考	登録番号	旧通番号
31	197 A-飛出	石	右鍬	残2.1	1.4	0.7			下凸石		S-2	95Aa
31	198 C-飛出	石	片口右鍬	残1.9	1.5	0.5			チャート		S-3	96Ca
31	199 D-SD20	石	鑿石	2.3	2.1	0.9			チャート	新老山系産?	S-4	
31	200 C-SD20	石	鑿?	残4.2	残3.5	0.7			凝灰質混岩		S-5	96Ca
31	201 C-SD01	石	鑿	残2.6	1.8	0.7			凝灰質混岩		S-6	96Cb
31	202 C-SD09	石	鑿	残5.8	残2.2	0.6			凝灰質混岩		S-7	96Ca
31	203 B-飛出	石	點石	10.5	4.3	3.4			凝灰岩	自然形	S-8	
31	204 C-SD02	石	點石	残5.6	3.7	1.5			凝灰質混岩		S-9	96Ca
31	205 C-SD01	石	底石	3.4	2.6	2.3			凝灰岩		S-10	96Cb
31	206 C-SD09	石	底石	残6.0	残5.1	2.4			凝灰岩		S-11	96Ca

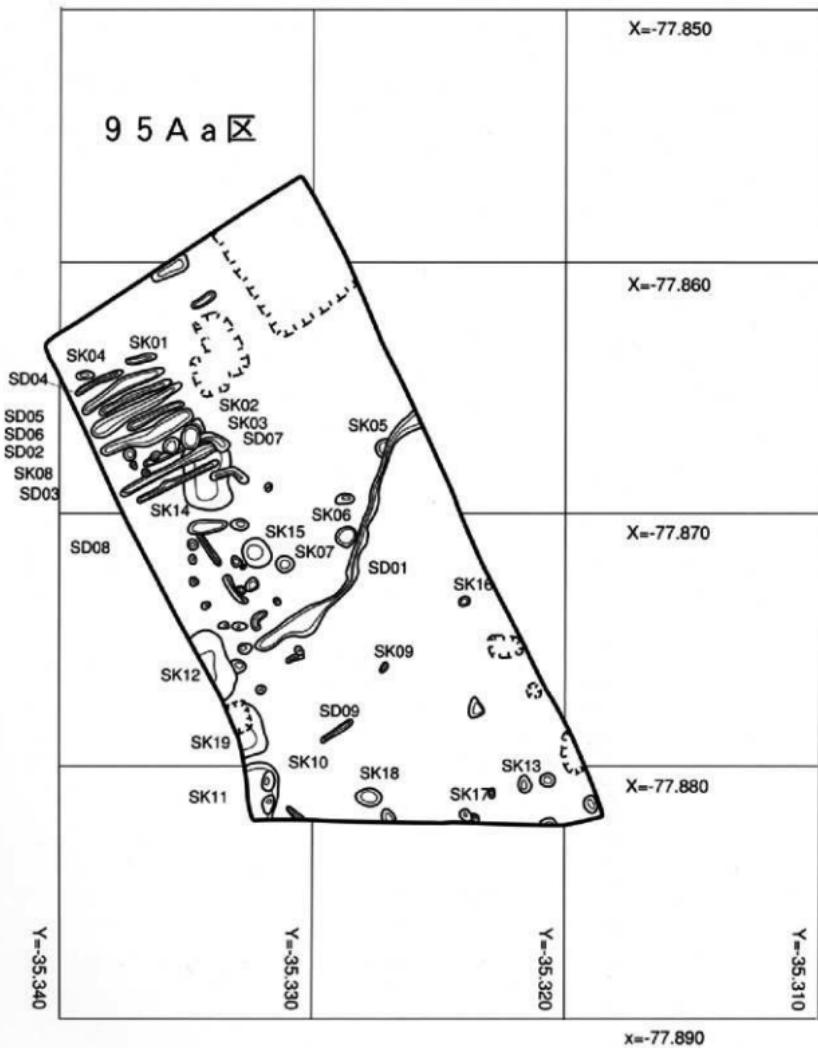
### 金属製品

番号	遺物番号	产地・材質	器種	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状	調整	鍛種	備考	登録番号	旧通番号
32	207 A-飛出	鐵	劍	12.6	0.7						M-2	95Ac
32	208 B-SK03	鐵	劍?	7.3	0.8						M-3	
32	209 C-SD08	鐵	劍	残3.3	0.5						M-4	96Ca
32	210 D-SK03	鐵	劍	4.9	0.8						M-5	
32	211 A-飛出	銅	銅鍔	残2.44					杆荷元寶		M-6	95Ab
32	212 A-飛出	銅	銅鍔	残2.38					元符通寶		M-7	95Ab
32	213 A-裏鍔	銅	銅鍔	残2.39					乾永通寶		M-8	95Ac
32	214 C-飛出	銅	銅鍔	残径1.38					判段不確		M-9	96Ca
32	215 D-飛出	銅	銅鍔	残2.41					7元通寶少		M-10	
32	216 D-飛出	銅	銅鍔	残2.41					?元通寶少		M-11	

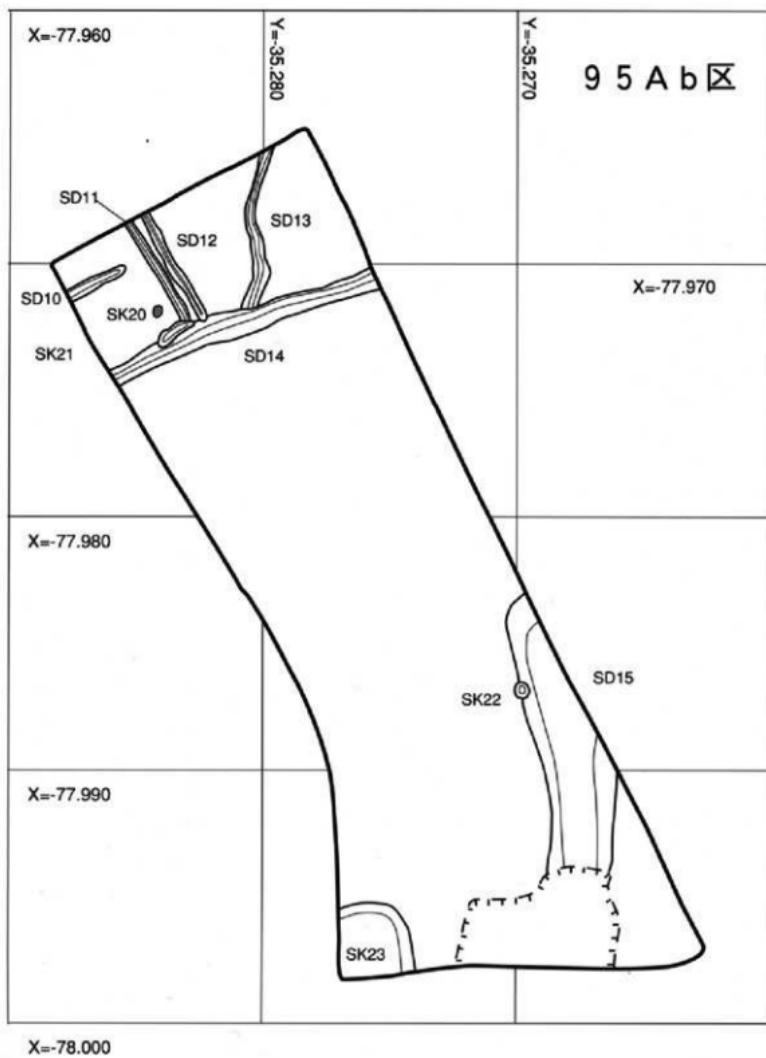
## 図版

- \*遺構図版の縮尺は1：200である
- \*写真図版の縮尺は各頁ごとに記載している
- \*写真下の数字は挿図の遺物番号を示す

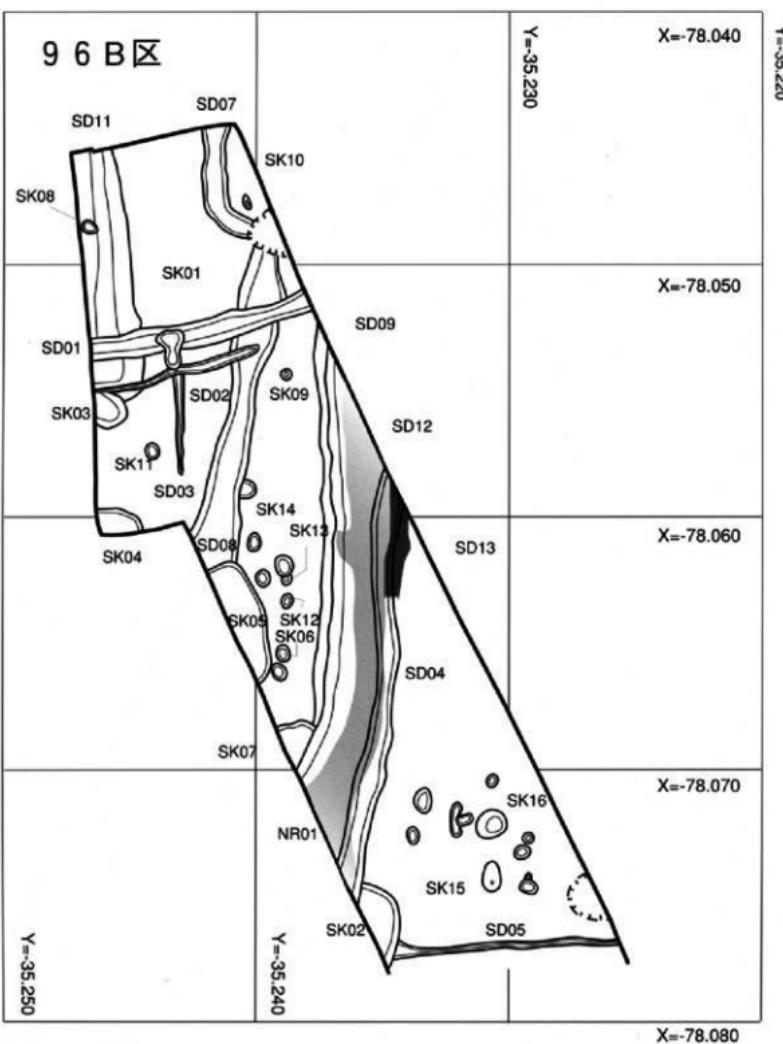
図版1

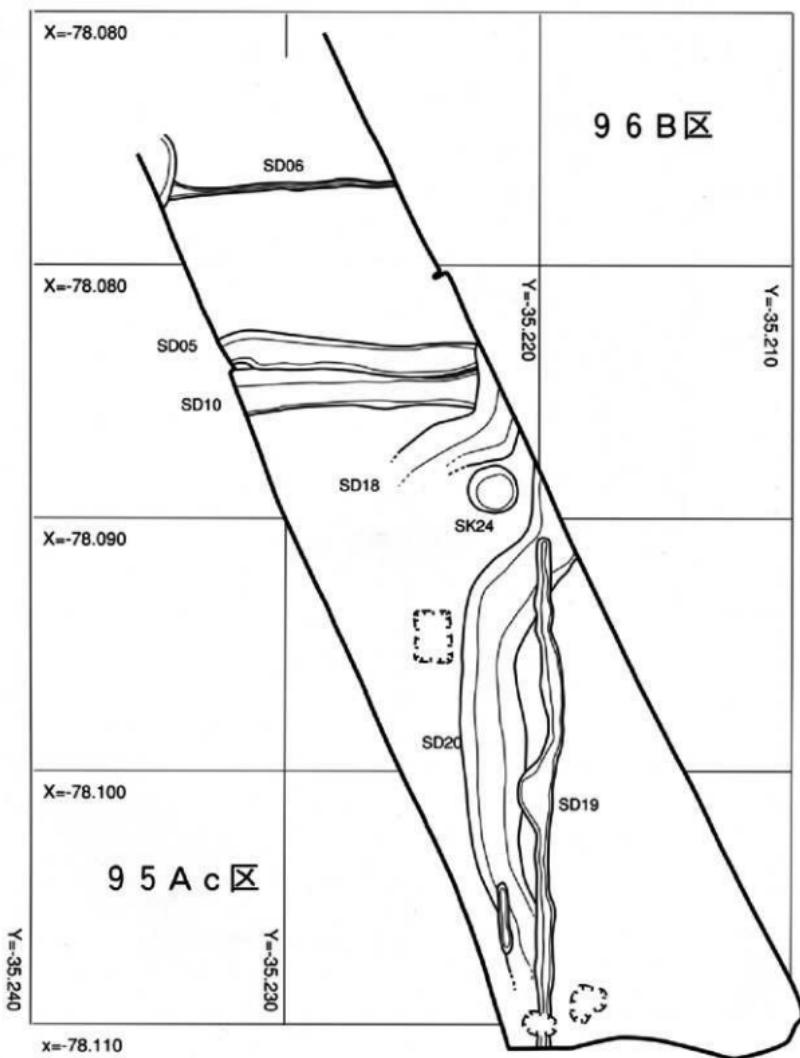


図版2

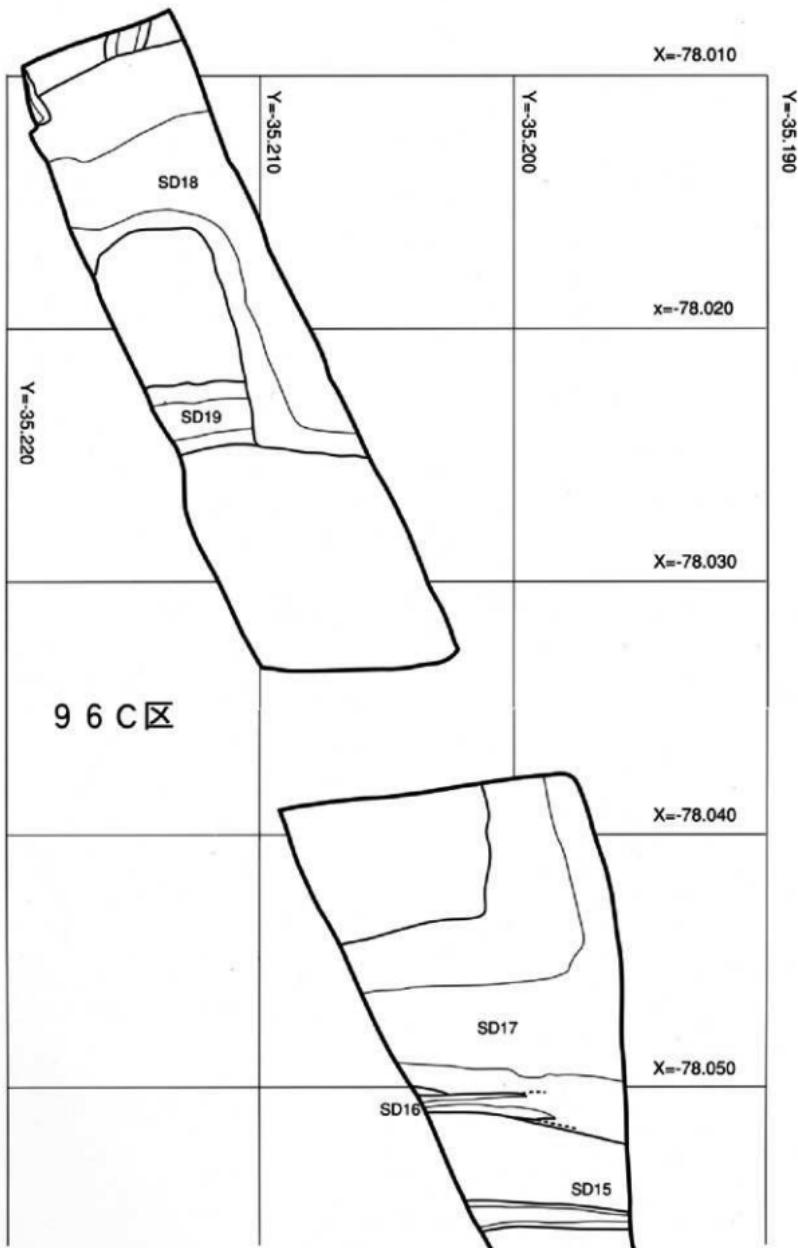


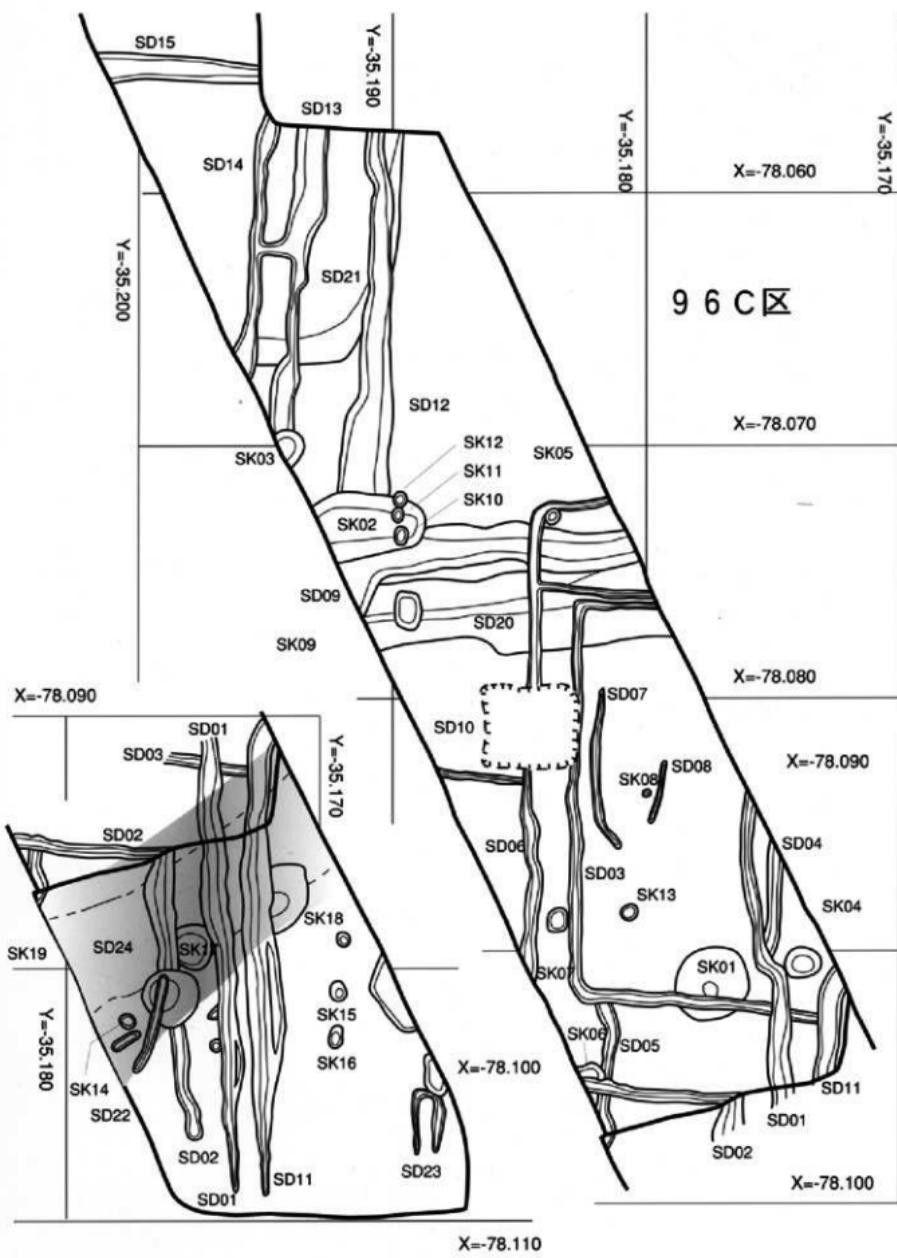
図版3



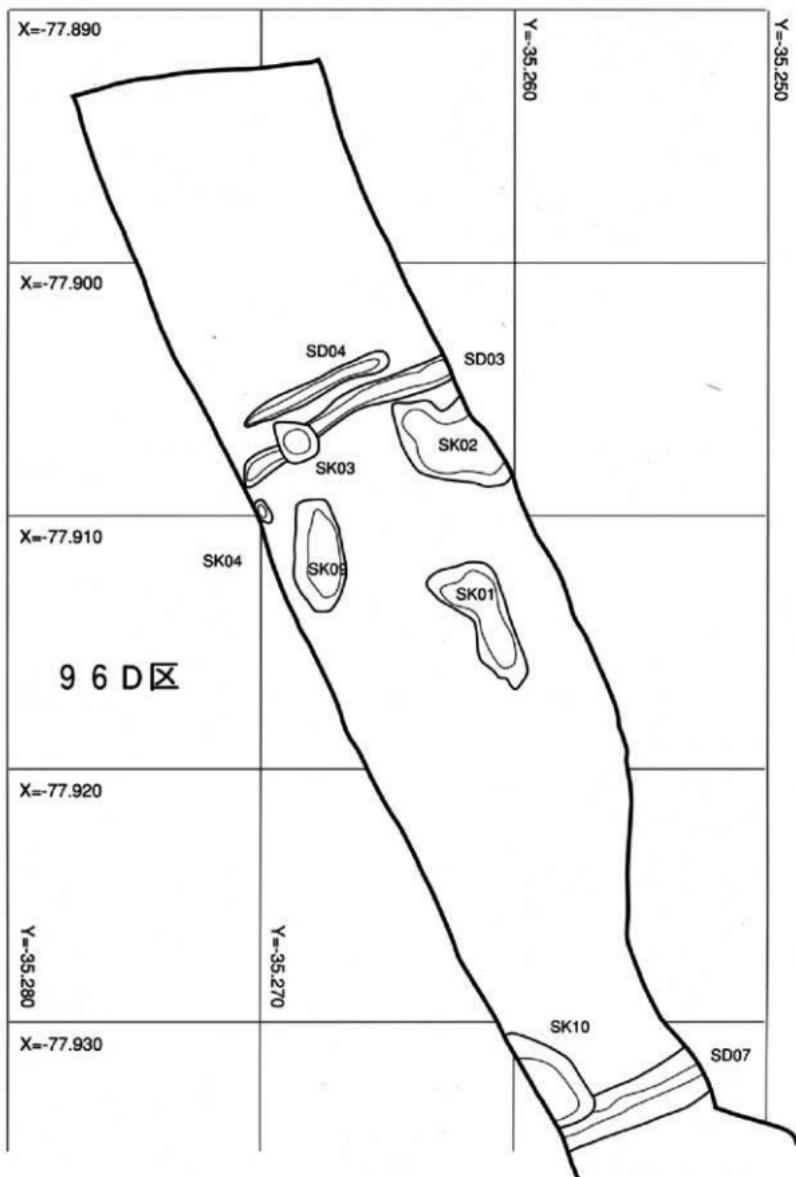


図版5

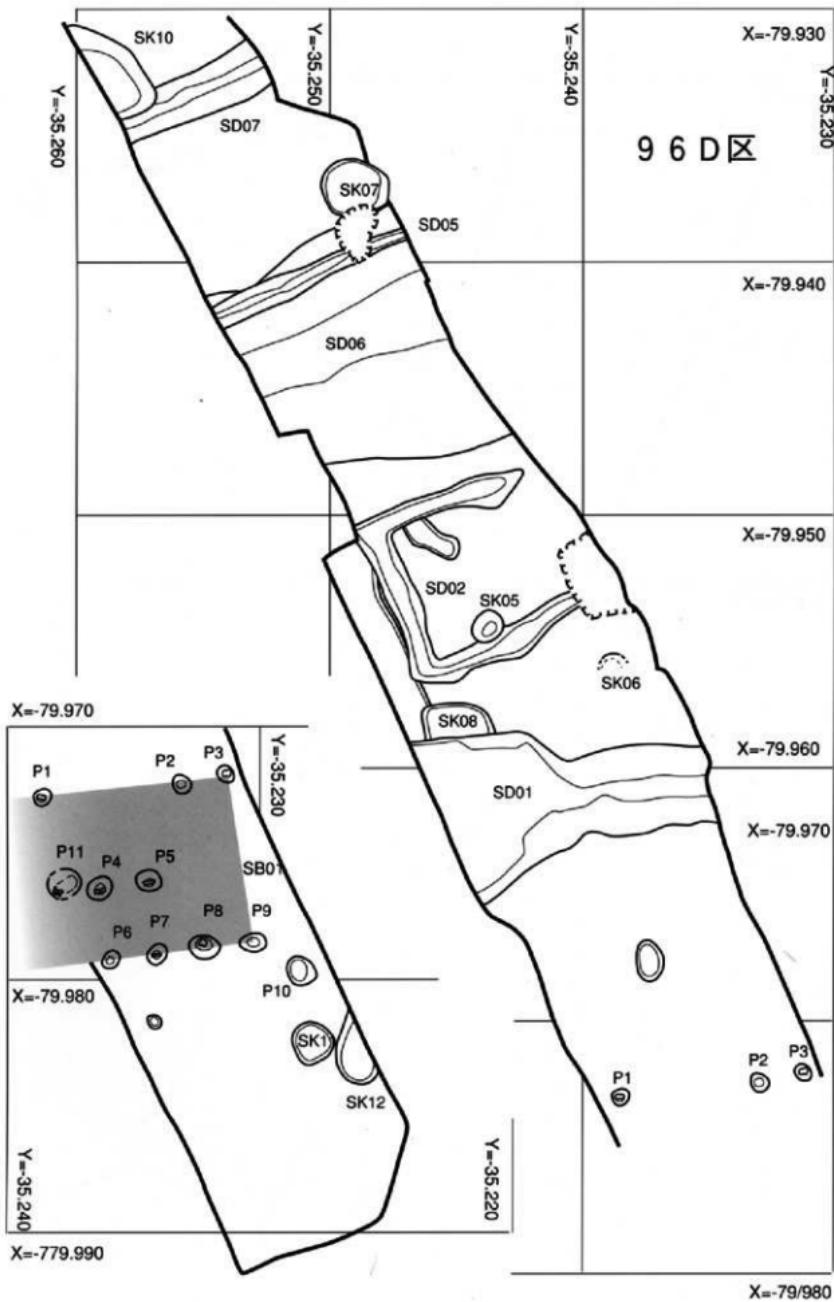




図版7



図版8



図版9



毛受遺跡遠景（南から）



A a 区全景（北から）



A b 区全景（南から）

図版 11



Ac区全景（北から）



B区 SDI2（南から）



B区全景（南から）



B区 SDI2（西から）



C区全景（北から）

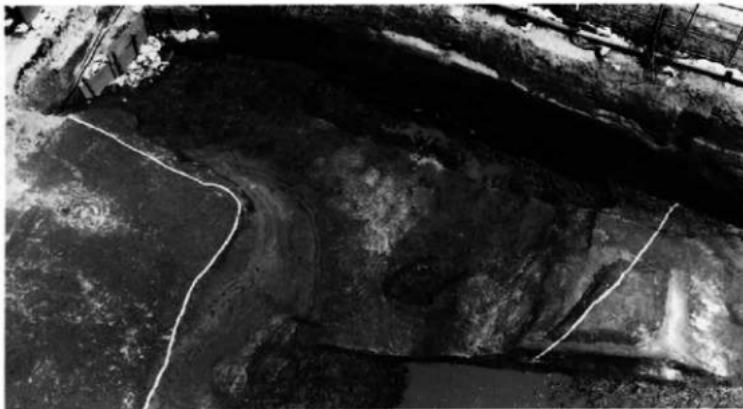


C区 SK18 最下層



C区 SD20 遺物出土状況

C区南部全景（北から）



C区 SD17（西から）



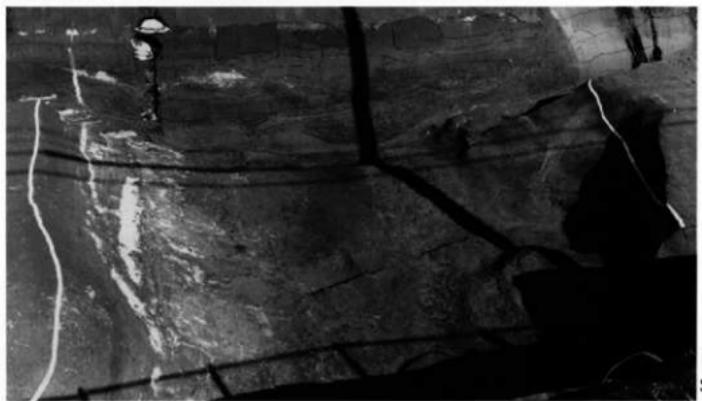
C区 SD18（西から）



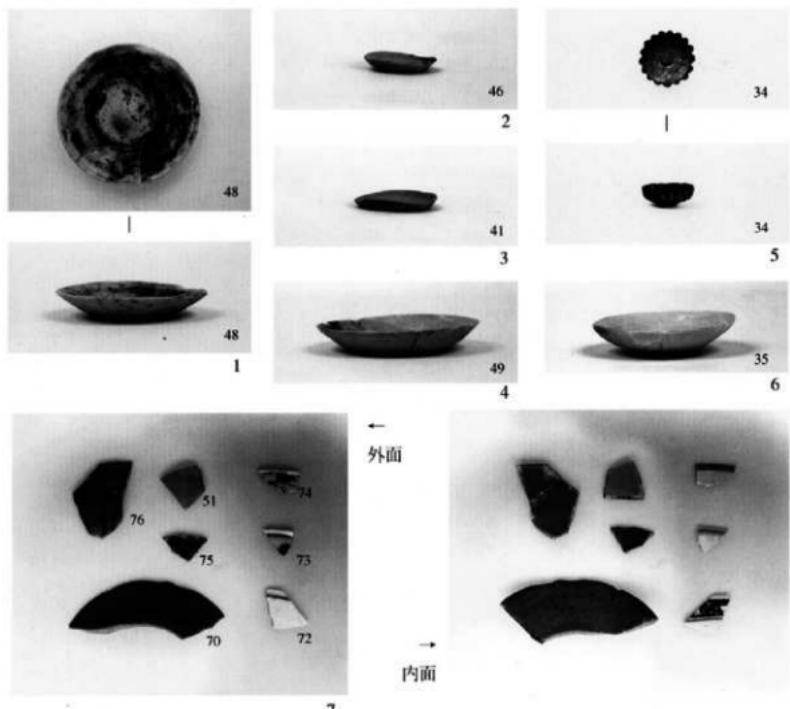
C区 SD17 遺物出土状況



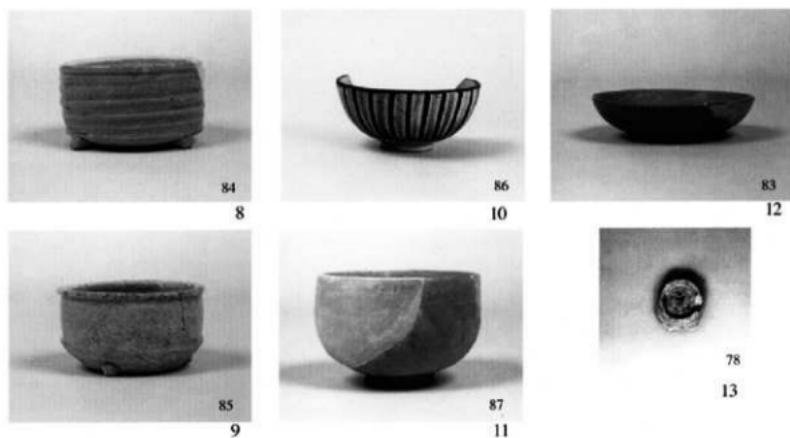
C区 SD18 遺物出土状況



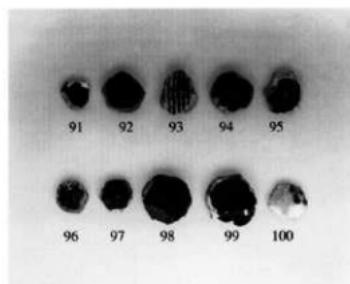
図版 15



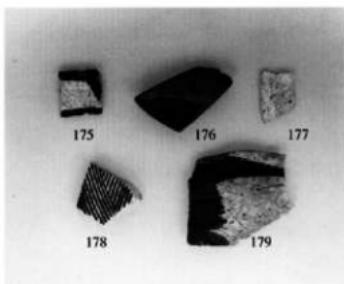
B期遺物 (7は1:3、他は1:4)



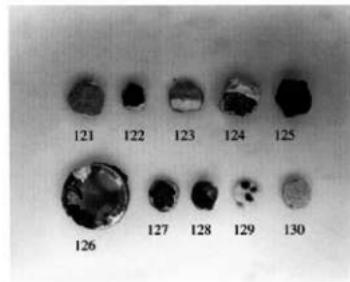
C期遺物 (1:4)



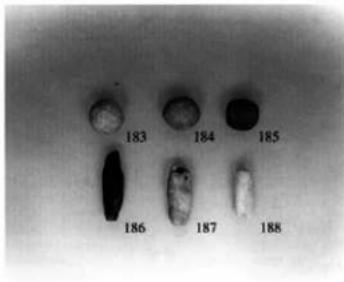
14



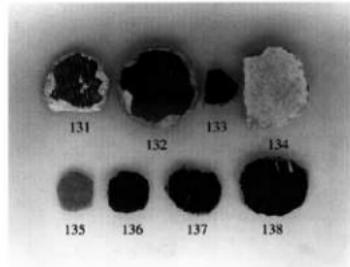
18



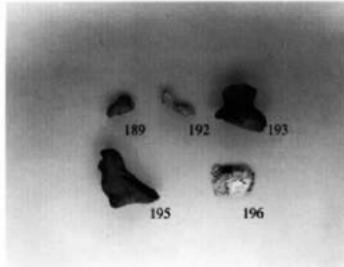
15



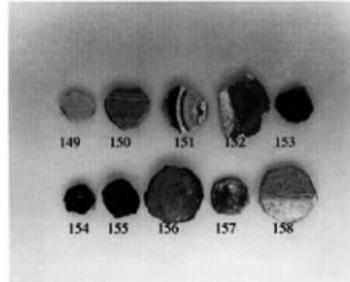
19



16



20



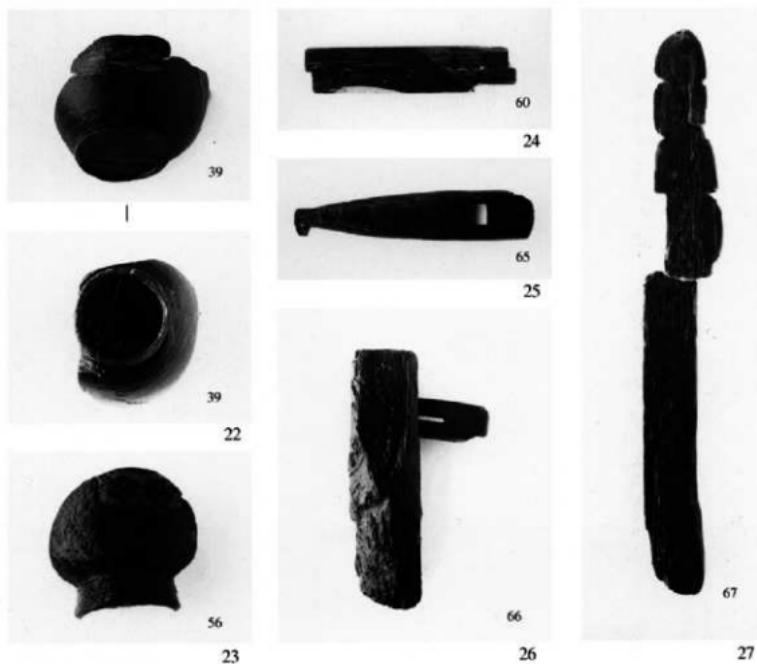
17



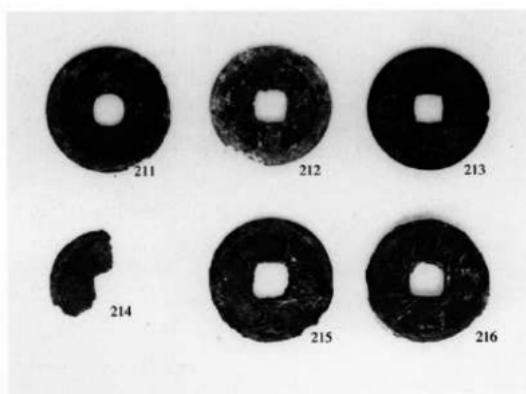
21

加工円盤 (14～17)、擦り痕を有する土器 (18)、陶丸・土錘 (19)、土鈴・土製品 (20)、石製品 (21) (1:3)

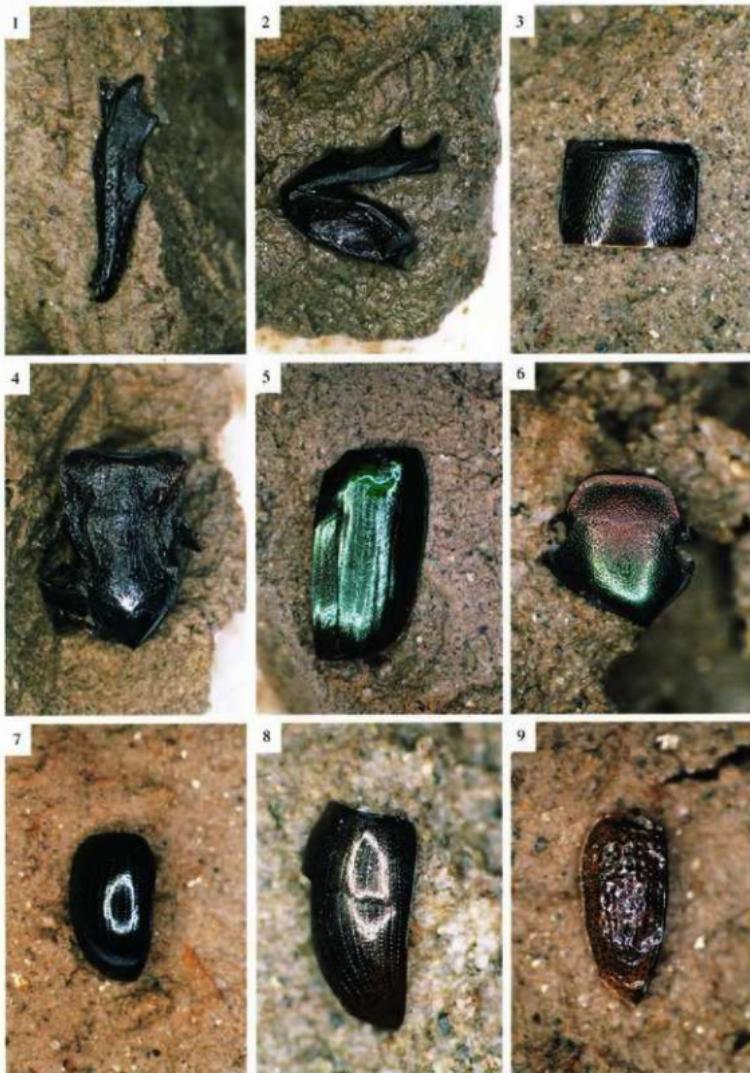
図版 17



木製品 (1:4)



銅錢 (1:1)



1. クロガダ *Histerichus kantensis* Breviski  
右前脚部 長さ 4.4 mm (標本 11)  
2. ゴラブトムシ *Euplatynus chrysomeloides* (Fabricius)  
左前脚部 脚面の長さ 7.2 mm (標本 19)  
3. ハネカクシ付 *Staphylinidae*  
腹部背面 最大幅 2.8 mm (標本 41)

4. ヒダゴダ *Polyphyllia laticollis* Lewis  
頭 頭 長さ 6.5 mm (標本 27)  
5. ヒメゴダ *Aegialiodes antennatus* Motschulsky  
右上翅 長さ 9.2 mm (標本 32)  
6. ヒメゴダ *Anomalia microspila* Motschulsky  
頭 頭 長さ 3.2 mm (標本 9)  
7. ダイコンハムシ *Phaenon brasiliensis* Baly  
左上翅 長さ 3.4 mm (標本 78)  
8. マメガムシ *Regostomus attenuata* (Fabricius)  
右上翅 長さ 3.8 mm (標本 44)  
9. コゼンツミズムシ *Pleoclytus intercedens* (Sharp)  
左上翅 長さ 2.6 mm (標本 10)

## 報告書抄録

ふりがな	めんじょいせき
書名	毛受遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第82集
編著者名	鈴谷 一・浅井厚視・鬼頭 剛・三辻利一・森 勇一
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802番24 TEL.0567-67-4161
発行年月日	西暦 1999年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° . ' "	東経 ° . ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
めんじょ 毛受	あいちけんいちのみやし 愛知県一宮市 やまとちょうめんじょ 大和町毛受	23203	2097	37度 17分 56秒	136度 46分 58秒	199504～ 199506 199604～ 199610	1446m <sup>2</sup> 4115m <sup>2</sup> 計 5561m <sup>2</sup>	東海北陸 自動車道 建設に伴 う 事前調査

所収遺跡名	種別	主な 時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
毛受	集落	室町	溝1		
		戦国	掘立柱建物1 溝	瀬戸美濃窯産陶器 常滑窯陶器 中国窯産陶磁器 土師器・木製品 石製品・金属製品	居館跡
		江戸	井戸2 土坑 溝	瀬戸美濃窯産陶磁器 肥前窯産磁器 関西系窯産陶磁器 常滑窯産陶器 土師器・石製品 金属製品	町屋

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第82集

## 毛受遺跡

1999年8月31日

編集発行 財團法人  
愛知県教育サービスセンター  
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社 名古屋大氣堂